

「おもかるお稲荷」

むかしむかし
四国のどこか
鄙びた村の野良仕事に
そんな声が響いてきた。

「おもかる
お稲荷は
いらんかね」

「なんじゃあ
あの絶世の美人は……
それに妖艶な声……」

「こちらでは
見ん顔だが……
見てるだけで
ギンギンに
おっ勃ちちゃう！」

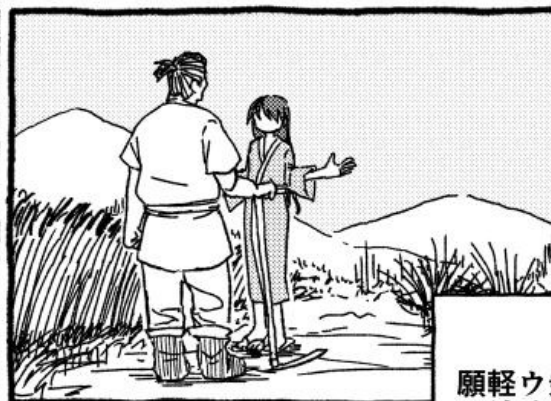
「おおい！その女！
なんだかわからんが
一つもらおうか！」



「しかし
おもかる
お稲荷とは
どのような？」

「あなた様の
ふぐりをウチの手に
乗せてくださいまし
ウチが思ったより
軽ければ叶いますよ」

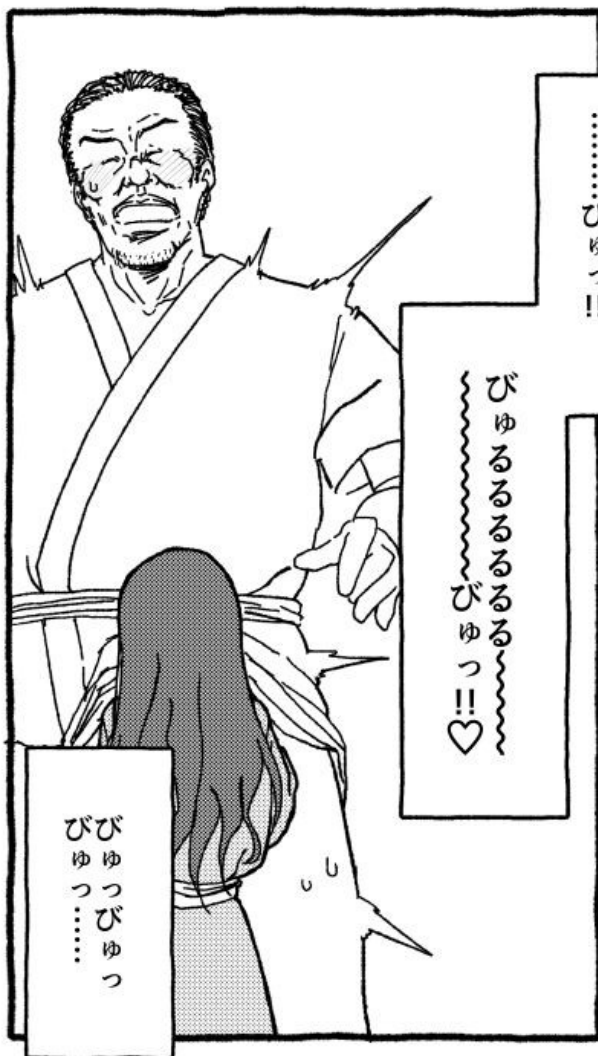
「そうか
ようし運試しだ！」



「これは重たい……♡
そんな……」

「えっ!?!
あつ……そ、そんな……
汚ねえぞ……つそんなつ……」





「あっ♡あっ……♡
あっあ……♡
……びゅっ!!」

びゅるるるるるるるるるる
びゅっ!!♡

びゅっびゅっ……
びゅっ……



ちゅば♡ちゅぽ♡
ちゅぽ♡ちゅぽ♡

ちゅーちゅー♡
ちゅっぽちゅっぽ♡
ちゅば♡ちゅぽ♡

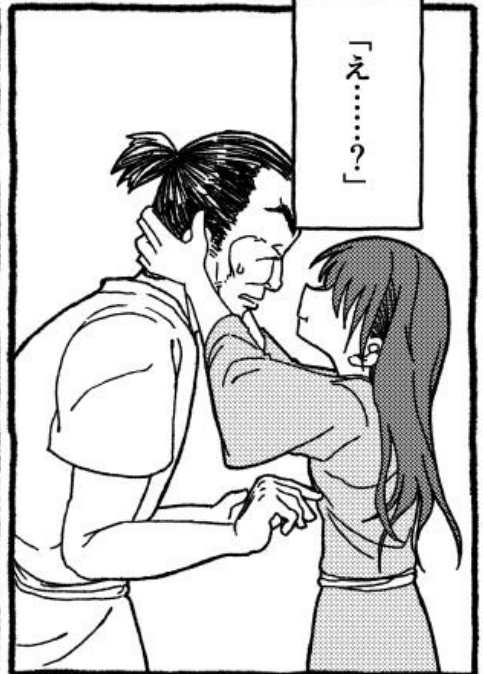


「はあ……
はあ……っ」



♡~~~~♡

♡れれ……♡
♡れれ……♡



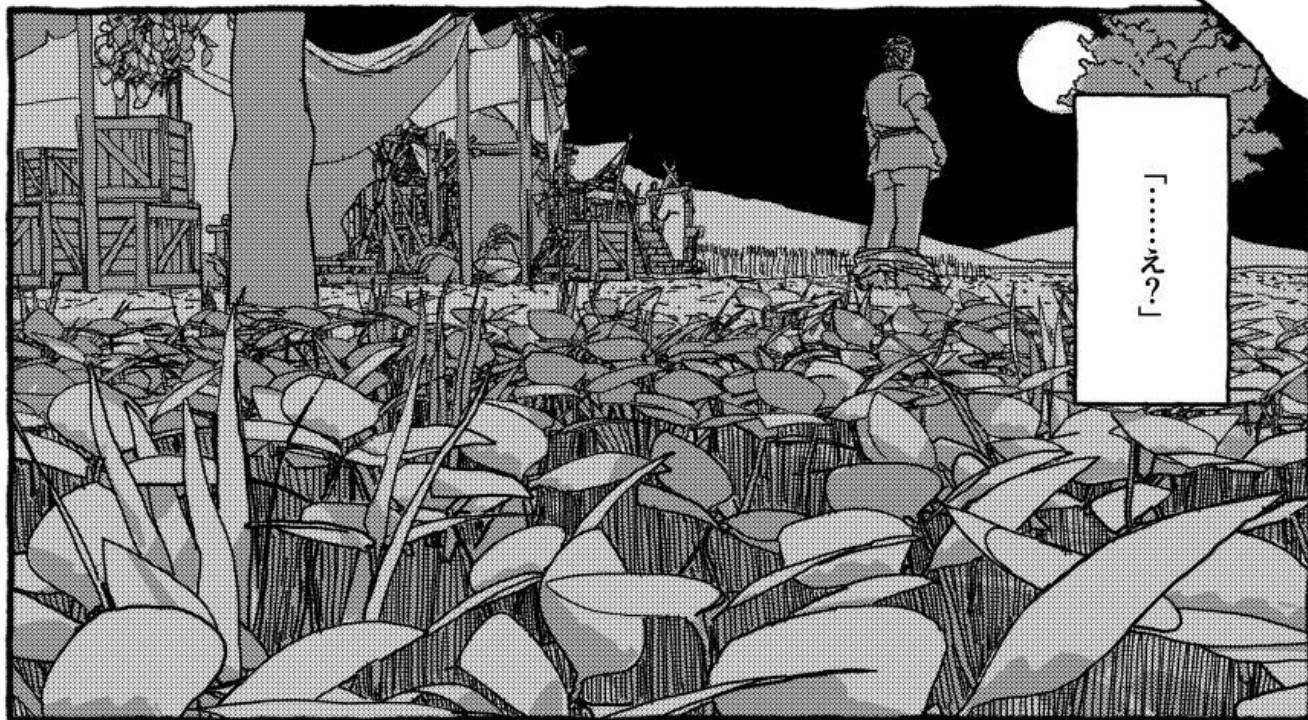
「え……?」



「……!!」
「っふはあっ……」

「軽くなりましたあ♡
よかったですねえ」
「お……おああ……」

「あ……あ……あ
極楽やあ……あ」



「……え？」



「おーい
何しとるんだお前
ちんこ丸出しで」



「はりや？」



「ありやう
狐に化かされちまった
みてえだあ」
「わっはっは」

……と
ここらでは
日ごと狐が
いたずら放題！

ところが、ある日、
たまたま（金玉だけに）
この地を訪れた
弘法大師がこれにつき、
女達から相談を受けた…

「村の男衆が揃って
化け狐に精気を端から
抜かれとるんです。」
「もう全員あのように骨抜き
の腑抜けになってしまつて。」
「このままではこの村では
子供も出来ません。」

相談を聞き入れた
弘法大師、
これをなんなく退治。

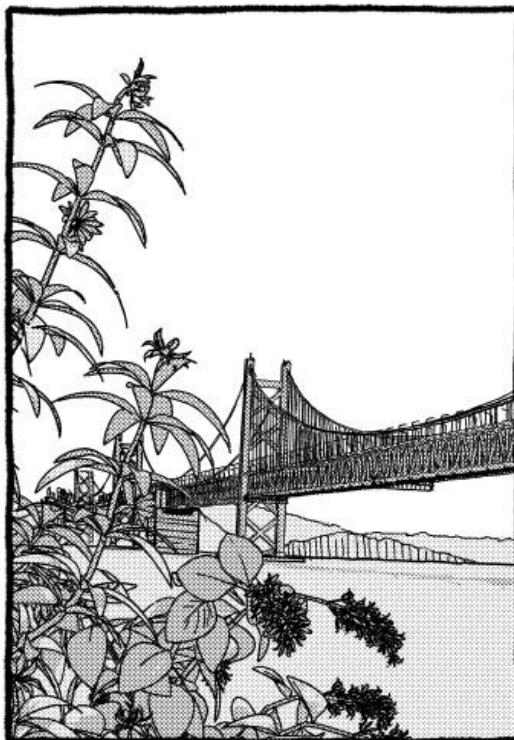
ド迫力の説教開始。
「辺鄙な場所と高を括り
悪戯が過ぎたな……」

「都に帰れ化け狐。
そのうち弟子が葛井寺に
橋を架けるから
それを手伝うといい」

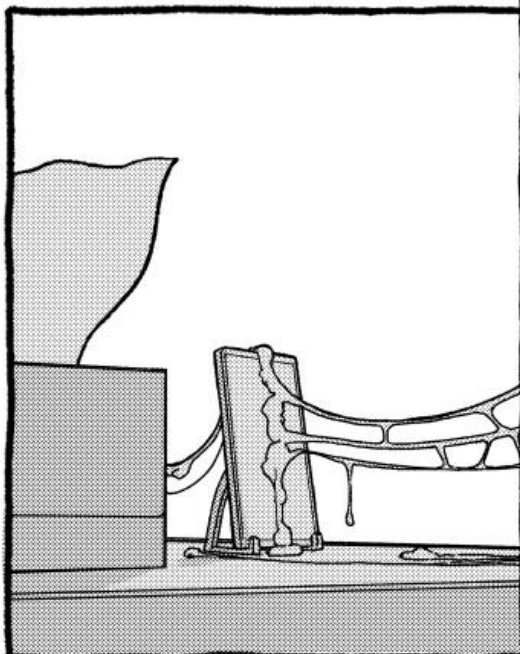
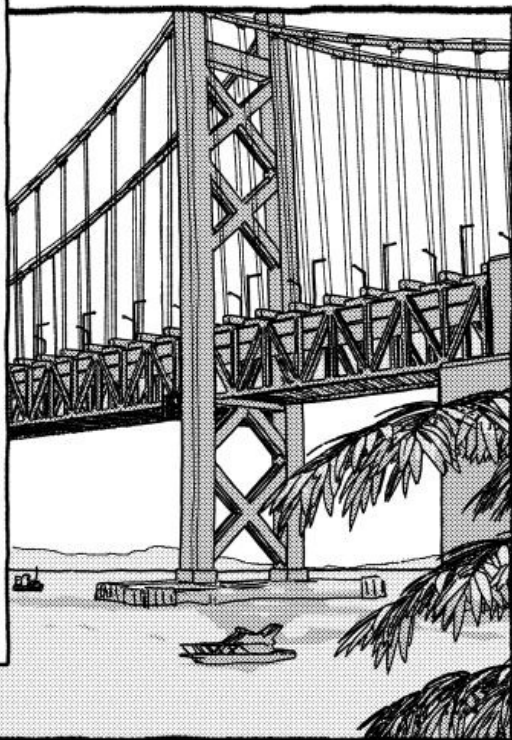
説教終わりにさりげなく
労働契約を滑り込ませる
さすがの手腕だったが
狐もただ頷くだけではない
「そしたら
ここに戻っていいのか？
あんな夏暑くて冬寒い所
ずっといたくない！」
しばし思案のち、弘法大師……

「わかった。
本土からこの地まで鉄の橋が
架かる頃に帰ることを許そう。」
これには狐も憤懣やるかたなし、
渾身の抗議を絞り出すのだった……

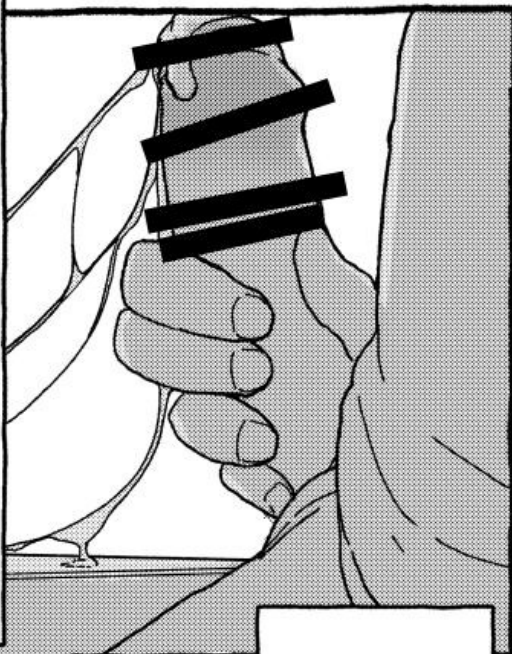
「かっ……かっ……」



「かがるか——っ!!」



一方、愛知県名古屋在住、橋はやと11歳は精通以来初めて三日我慢して熟成させた超濃厚精液を、スマートフォンに保存している同年齢のジュニアアイドル動画に思い切り放出した。



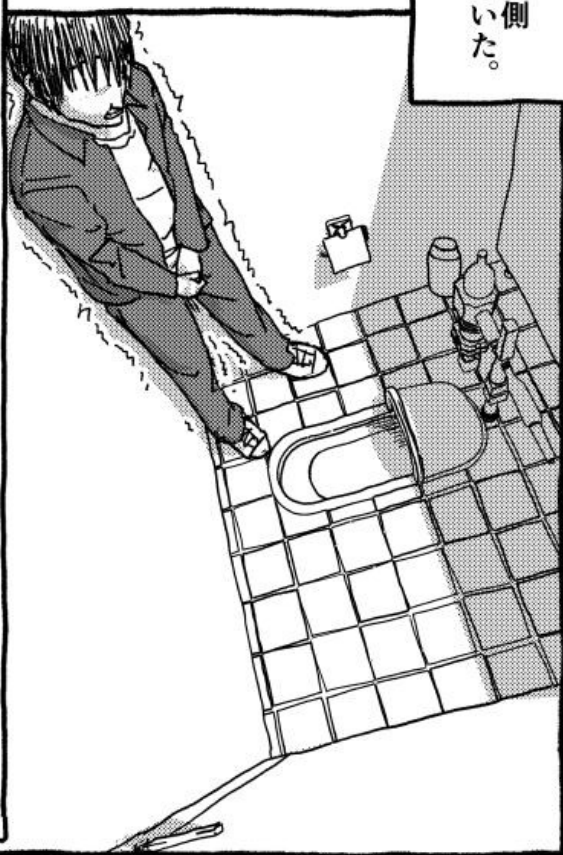
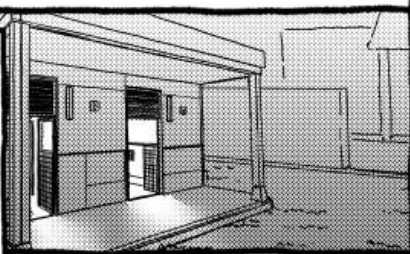
そして
乱れた息を整えながら、
気怠い満足感の中
誰にもなく呟いた。
「はあっ……はあっ……」

「ふう……やば……」



「かかっちゃった……」

谷川順、27歳。
彼は公衆トイレ女子側
最奥個室にて震えていた。



地元福島から大学進学を期に東京で一人暮らしを始めたが、徐々に部屋から出られなくなり休学。それでもなんとか過呼吸を抑え付け最小限のバイトで生活をしていたがある日、105号室在住の人の良さそうな男が最近、104号室で一人暮らしする老婆の気配がここ数日一切ないが最近いつ見たか、異臭がする」と尋ねられ、老婆が住んでいることすら知らなかったがとにかく何も分からなかったため、アパート管理人に連絡。鍵を開け105号室に入ってゆく管理人に「105号室の男となく帯同したところ風呂場に老婆の全裸の遺体があり、糞尿こそあったがまだ綺麗でそれが人生で初めて見た生おまんこだったことをきっかけに、近所の公衆トイレにて芳香剤に小型カメラを仕込む盗撮に目覚めた。

その日、谷川順は仕掛けたカメラを回収するため深夜に公衆トイレに忍び込んでいた。震えているのはそのとき、隣の個室に誰かが入る音がしたからだ。



扉を閉める音も聞こえなかったため出ていくまで身を潜めて待つことにしていたのだが、おそろくは若い女。激しい苦悶の声をあげている。

嗚咽のような声、激しい呼吸音、そして水音がしたのち、しかし流す音もなくその女は息を切らしながら出ていった。



緊張を解く谷川。

素早く立ち去る、一目散に。そのはずだった。一目散に。一目ではわからなかった。



何かはわからなかったが、排泄物とは違うのはわかった。5秒ほどで新生児だと気づいた。





静かだった。

抱き上げて、
やたらめったら
揺すったり背中を
叩いたりしたところ、

泣き声を
あげた。

驚くべきことに
彼は4ヶ月後に
その子を負って
交番に現れ、
全てを話した。



供述記録によると
拾った日から
バイトにも顔を出さず、
消費者金融から
金も借りて一人で
付きっきりで育てて
いたが、物理的に、
金が尽きたという
ことだった。

それまで誰にも
露見しなかった。
彼には諸々含めて
執行猶予が与えられた。



更に2年後彼らは
妻・涼子の不倫により離婚、
世帯年収100万の
父子家庭となった。

忙しかったが
金銭的には余裕があり、
料理が一切できず
ジャンクフードや
外食・配達を好む父の
嗜好もあり橘は父とは
どっしりしていた。

そんな風にしてその子は
最終的にカセドル系列の
施設に移送され、
2年後に世帯年収1200万の
橘二郎・涼子夫妻に
引き取られたが、



それが
橘はやとの
これまでの
なりゆきで、

橘はやとの楽しみと言えば
純粋なオナニーと、
校舎裏の林にいる野良犬に
給食の残りや持参したおやつを
あげることだった。

犬には人間の美醜は
あんまりわからないし、
橘はやとが運動も勉強も
できなくてトロいとか
そういうことを踏まえた
態度で接してこない

しかし、ある日の放課後
その楽しみはクラスメイトの
中山ゆみの報告により
瓦解するのだった。

「先生、橘君が
校舎の裏の林のところの
野良犬にエサやってます」

「やっではダメと
この前のプリントでも
周知したはずですね？」
担任の安藤敏雄43歳は
静かに語り出した。

そして
一番後ろの席にも風圧が
届きそうな大きなため息を
一つ吐いたあと黒板に
単語を一つ書いた。
「今日は帰る前に、
この言葉について
みんなで考えようか」

偽善

静かなねちっこい説教は
二十分続き、偽の字がちょっと
誤っていることについては
6人が気付いていたが
誰も指摘しなかった。

そんなこんなで
人畜問わず友達もなく
オナニーだけを日々の楽しみに
中学生になった橘はやと。

「やったっ！」

放課後の帰路、校舎裏から
心から嬉しそうな中山ゆみの
歓声が聞こえた。



そこにいたのは
二年の先輩男子生徒と
中山ゆみ。
告白成功の瞬間だった。
しかし男子はすこし
不思議そうな顔。

怪訝な口調で尋ねる。
「付き合うのはいいけどさ、
あんま喋ったことないよな？
俺って割と女子から怖がられ
てるしさ、正直どこらへんが
好きなの？」



中山ゆみは答える。
「私知ってるんです
先輩が裏山の野良犬に
毎日エサあげてること」

「先生や学校の皆は
怖い人だって言ってるけど
本当は優しい人なんだって
私知ってるんです」

これには先輩も頬が緩む。
「見られちゃってたか……」





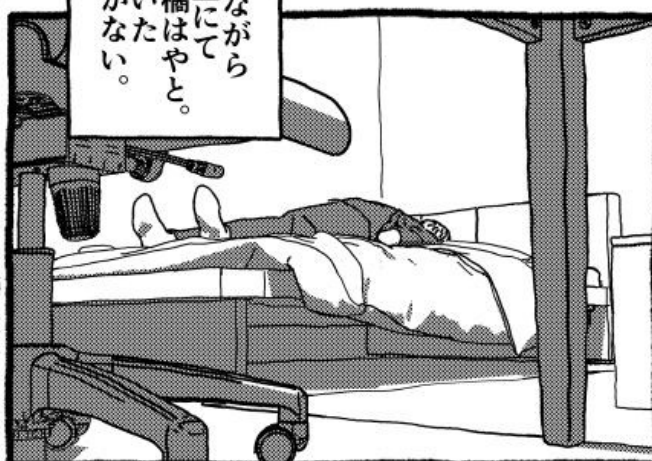
こんなもの、いつものことなのに、自分の知らぬ何かが閾値を超え、心から大切なものが失われた感じがあった。



ちくしょう……などと声に出して言おうとした。言おうとして初めてそのエネルギーすらもう自分の内に無いことに気付いた橘はやと。



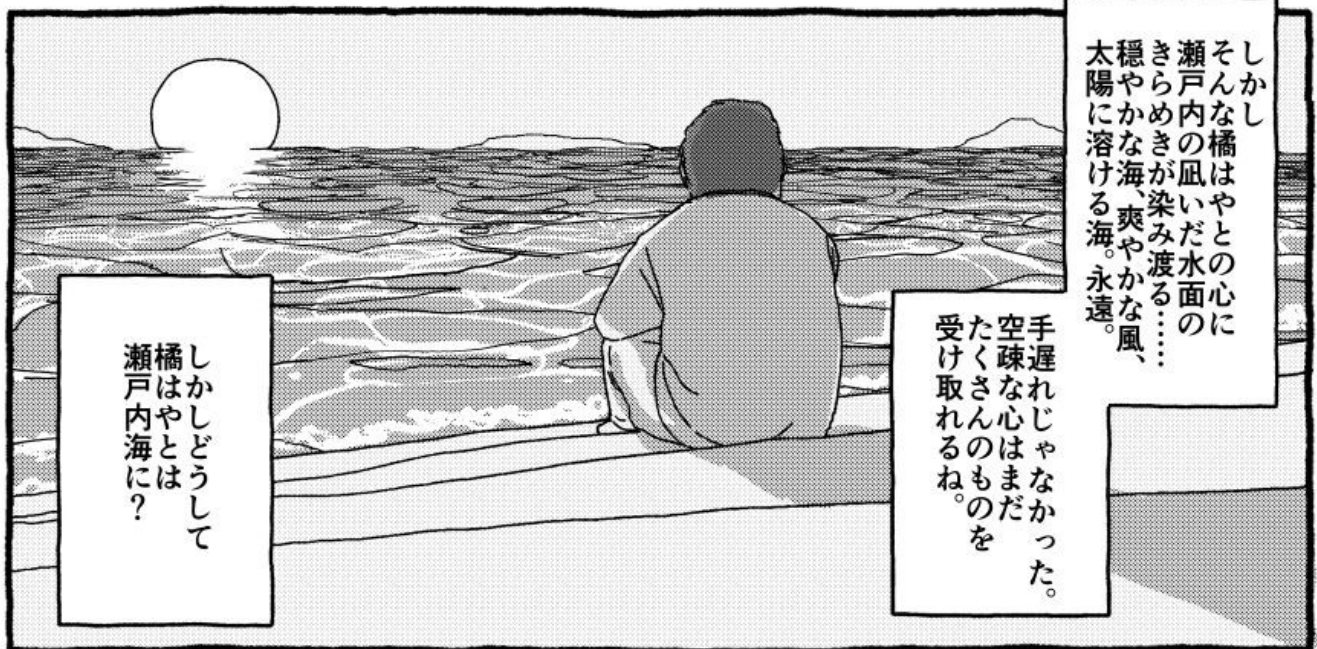
膝が抜けそうになりながら這々の体で帰宅、自室にて虚脱感に支配される橘はやと。自分の当番となっていた晩飯を作る気力も湧かない。



腹に力を入れただ一言声に出して悪態を吐きたかった。深呼吸しその努力すらした。そうすればこの虚無感を吐き出せる気がして。

しかし無駄だった。ちくしょう、とすら思っていないから。空っぽの心。空っぽの世界。矛盾もない。言葉もない。

空虚なだけの行動だけがただ残されているのみ。それに代わる何も残されていないなら。ああ、やってやる！ 全てぶち壊してやる！ 橘はやと、怒りの



しかし
そんな橋はやとの心に
瀬戸内の凪いだ水面の
きらめきが染み渡る……
穏やかな海、爽やかな風、
太陽に溶ける海。永遠。

手遅れじゃなかった。
空疎な心はまだた
たくさんのものを
受け取れるね。

しかしどうして
橋はやとは
瀬戸内海に？



転校の話は突然だった
わけではなかった。父の
次の転勤先によつては
田舎の祖母のところは
預けられる選択肢も
折に触れて示唆
されていく

中二になる節目で
それが現実化した。
そういうことだった。

橋はやとが転校したのは
現在広島県の、
外から橋の架かっていない
人口七百人程度の
大久絵島という島。

最高峰は大久絵山で標高180m。
集落は三カ所あり
急傾斜地以外はほぼ
瀬戸内海式気候により
柑橘類の畑も点在し
主要産業は水産業と鉛の
工場である。

漁業は昔から盛んであり
芸州藩ではこの水産加工品を
特別に賞味したとの記録も
あるが、現在は漁獲高も
漁師の数も雀の涙である。
鉛工場は歴史が深く、
太平洋戦争中には兵器の生産
にも携わり、島内には現在も
当時の名残が随所に認められる。

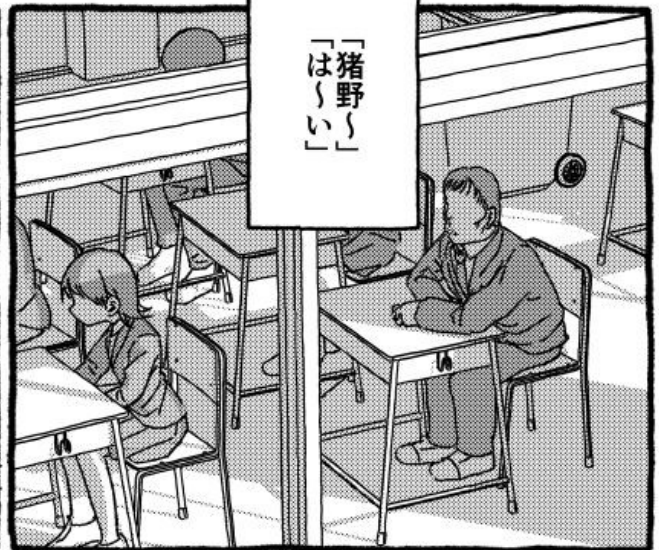
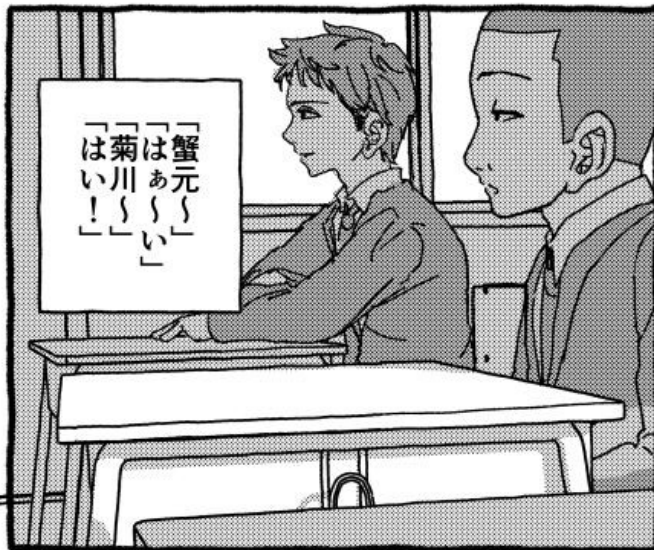
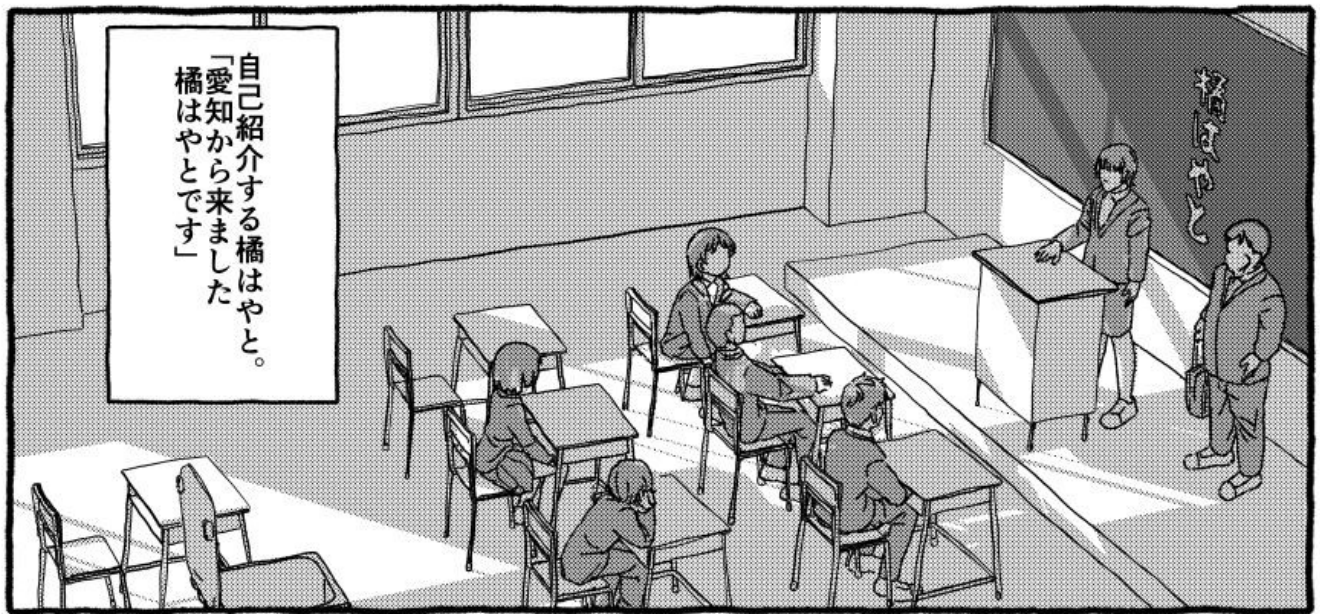
また、古来より独自の
稲荷神信仰のようなものが
盛んで、その起源は不明だが、
この土地に渡来した者が
持ち込んだものと推測される。

大久絵山は広さとしては
島の西半分を占めているが
簡易的な山道こそあれ
ほぼ手つかずの岩塊である。

現在広島県安芸郡湊狐町から
唯一の船便が出ている以外に、
島への交通手段はなく、
規模に比してアクセスが悪い。
島内に比して中学校は一つずつ
あるが高校はない。

橘はやとの
クラスメイトは
6人だった。





放課後

初日の
ホームルームも終わり
帰り支度。



今日一日すべての授業で
配られたプリントは
欠席とおぼしき後ろの
「くえん」と呼ばれていた
席にも置かれていたが

それを全て
ゴミ箱に捨てる菊川を
目撃する橘はやと。

「えっ？」
思わず声をあげる
橘はやと。
「捨てるの？」

それに対する
長曽我部の返答は
意味不明で

こういうものだった。
「ああ、今日おれ
日直だし」



意図を掴みかね
首を傾げる
橘はやと。
「察して長曽我部、
「そりゃわからん
よな」とドカッと
座り語る。



「なんか伝統的にやってる
儀式みたいなもんでな。
この島に伝わってる民話に
基づいてるんだが……」



「ぐくり……
生唾を飲み神妙に
聞き入ろうとする
真面目な橘はやとの
表情を認め、

長曽我部は、それなら、
といった感じで丁寧に
その続きを語り始めた。



「その昔、
四国には絶世の美女に化けて
悪戯放題の悪い化け狐がいた。
それを坊さんが本州に退治し、
鉄の橋が架かるまで戻っては
ならんと言った。という話がある」
それは橋はやとも微かに聞いた
ことがある気がする話だった。

真偽はともかく、あと美女に化けて
という所もともかく、有名な
悪戯狐退治の弘法大師伝説の一つだ。
確かそれは、だから四国で狐を見ることが
ないのだ、という話でもあった。
続けて長曾我部は、そこまでが人口に
膾炙している話で、この島には続きが
伝わっているのだと語った。
曰く、弘法も筆の誤り……
彼は化け狐にもう変化の術を
使えぬように秘術をかけたのだが、
美女の姿の時にそれをやってしまった。

つまり……
人心惑わす美しい人の姿のまま
狐に戻れなくなってしまったのだ
という。
さて、狐はそれからは人間のまま
しばらく京でここによしていた
が……

我慢ならなくなり、泳いで四国に
渡ろうとし、渦潮に巻き込まれて
漂流、この島に流れ着いた。

そして一人の島民に看病され
命を繋ぎ止めた狐は、たいそう感謝し、
その島民のために残りの生を尽くす
ことに決め、子を為し、生涯仲睦まじく
暮らした。
めでたしめでたし……

ぎぎん…

ぎぎん…

——とお話はそこで
終わるはずだった……。
しかしそうなるには
人間と交わってできたその子供は
あまりに美しすぎたのだった。
それはもうぞっとするほどに……
人里でなど暮らせぬほどに
人を誘惑する容貌であつた。

そしてなお悪いこと
に本人もすつごく淫乱だ
った。

その子は両親を
出し抜いては
次々と島の男を
骨抜きにしていった。
それはそれは
辻斬りのようなレイプ
だったという。

このままでは島の秩序は崩壊、
少子化加速、無人島一直線。
そこで島で対策会議が開かれ
議論の末に、

この島は
狐一族の子が
生まれる度に人
生け贄を捧げる
ことで人里に無
意に合意させ
てこなかった。
じゃなきゃ戦争
だ、と。



そして彼らは
島一番の活きの良い醜男を
生け贄として捧げた。

これは島長しまおさの案で、
島とこの狐との未来をも
包括して見据えた考え
あったことだった。

どうやら狐は
人間に対する外観の
美醜の判断が全くない。
そして、

特段美男子でもない
島民の子で美しさが
更に増してしまった
その性質を鑑みると、
この子の更に子の子…と
平和的に末永くなら
付き合っていくなら
それは逆向きの力で
抑えるしかないわけだ。





さて、顛末としては
まんまと……
と言うべきか否か、
キツネは彼を
醜男などとは
夢にも思わず
生涯愛でたそうだ。



それ以来、この島は
島一番の醜男或いは醜女を
この一族に捧げ続けたが、
目論見が成功したのか
どうかは闇の中。

彼らがそれからもう、
お天道様の下
人里に自ら現れることは
あんまりなかったからだ。

彼らは島の西の大久絵山に
居を構え、くえんさんと
呼ばれており、人を捧げなく
なつた今も確かにいる
一族ではあるそうで、
今じゃ長年の生け贄との
交配により醜い異形の
一族と化してゐるって
噂する者も……

とにかく彼らは姿を見せないが新しい子が生まれれば籍が取得され、学校でも席を用意し、居るものとして扱うことにしているという……。そんな風に長曽我部の話は終わり、気付くと各々帰り支度を済ませたクラスメイトが周りに集まってきている。

「お前細かいところまでよく覚えてるよなあ
そういうの」

「全然細かくねえよ。
エピソードはまだ色々あるぞ」

「ぐえんと飲んだくれ三郎」の話とか、「ぐえんと漁師の弥助の話」、「ぐえんと偽天狐の歌」、「ぐえんと天狗の隠れ蓑」とは「ぐえんと入道」、「ぐえんと王様」、「ぐえんと暗黒物質」、「ぐえんとRケンタウリ」、他には……」

「キモ記憶力」
「爺ちゃん婆ちゃんしかしない話」
「ちゃんと聞いといてやれ、みんなも身近な老いぼれの話は……猪野、お前ん家の老いぼれもそろそろ……」
「うるせえ」
「もっと転校生には実用的な話してあげた方がいいだろう、○○番地の畑のクソババアの話とか」
「あそこには近寄ってはいけないぞ」
「駄菓子屋のクソババアの話も」
「奴に話しかけてはいけない」
「船着き場の投げ釣りクソババアの話とか」
「俺の婆ちゃんを悪く言うな」
「あっ、すまん」

転校生を和ませようという意図もあるのであろう小気味よく微笑ましい会話に橘はやとも笑う。

「ところで……」と今度は橘はやとに本州、都会について興味津々に色々と聞き出す一同。

小学生の時の修学旅行以外で、一切島から出たことのない者もあり、都会情報には皆興味津々であった。巨大ショッピングモールや映る番組やフアッションセンス等、橘はやとには荷の重い質問も多かったが、しかしネットショッピングで注文した商品が本当に一日で届くことが最も驚かれたのであった。

橘はやとも色々聞きたいことはなくもなかったが、今日はいいかと回答に徹する。

「いつまでたむろってるさっさと帰れ帰れ」きり良きところで帰宅を促す担任。お開きとなった。

下校する橘はやと。長曽我部真男は帰る方向が同じであった。

みんな都会が羨ましいって願ってたが……結局は誰も出て行かねえ、と長曽我部はぼやくように呟き、続けた。「俺は必ずここから出て行く。カセドラルで上り詰めるか、カセドラルを叩き潰すかそれはまだわからないが、まあとにかく故郷なんてもんは捨て去るだろう。そしてデカイことを成す」

カセドラル(CATHEDRAL)とは、世界で支配的影響力を持つ特にIT企業群を中心として最効善の計画に賛同する覇権的多国籍コングロマリットなどを足した9社の頭文字を取った総称であり即ち、

Campanella(カンパネラ)社、Applight(アップライト)社、Tenzen(テンゼン)社、HSC(ハイトシーブクラウド)社、Edea(エデア)社、D&M(ディクスン&メイスン)社、Rectangle(レクタングル)社、Agrohalo(アグロハロー)社、LGT(リバーサイドグッドシング)社の9社のこと。どちらのAが先かで派閥がある。

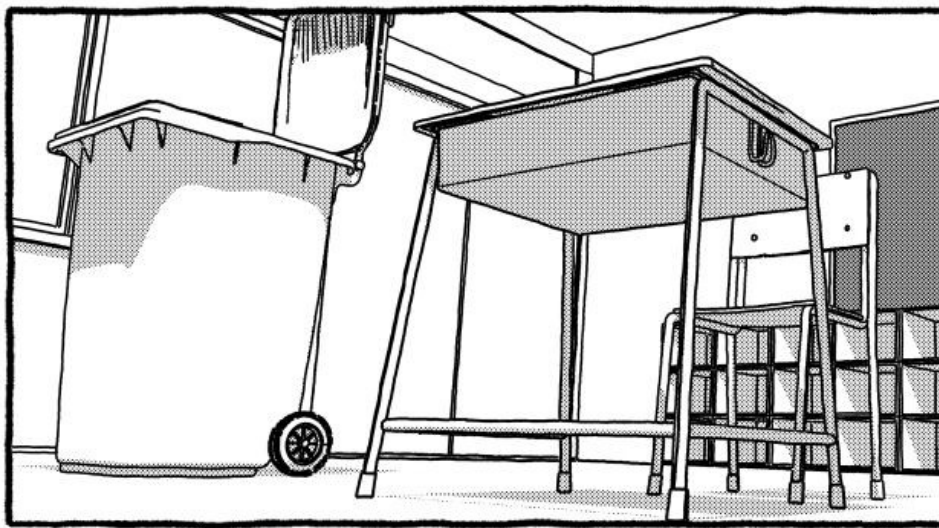
カセドラルは性的サービスを含み人間のほぼ全ての物質的な欲望と非物質的な欲望を一手に引き受けていると言って過言でない。

また「最効善の計画」は途上国への寄付等を他のどのような機関よりもロス無しで大規模に実現するハブとしての機能を自らに集約させ、透明性にも優れ、街頭の寄付に10ドル払うのとカセドラルのサービスに10ドル課金するのでは最終的に実現される恵まれない人々、子供への支援等の効能において後者が前者を上回ってしまうと説明する経済学者もいる。

カセドラルはデジタル家庭電化製品、ソフトウェア、オンラインサービスの開発・販売、電力、通信事業の世界展開、石油や天然ガスなどの資源開発から発電、送電までを行うエネルギー事業、「人幸福」と訳される医療福祉事業の展開、国家からの児童福祉の委託、航空輸送事業、放送、エレクトロニクス産業、等、内部にあらゆる事業を抱え込む複合的に絡み合った巨大な経済圏で、国家に代わり一定の秩序をもたらし存在として評価する者も多い。

そんなところに行って成り上がる気なのか、志の高い人間だなあとのんきに感心する橋はやと。真男と別れ帰宅の途につく。一日目としてはこの上なく幸先のいい一日だったのではないだろうか。皆いい奴だった。

ただ、気がかりはあった……
実質必要ないプリントを捨てる経緯は理解したが、話の内容があまりに突飛。



クラスの皆はたぶんいい奴らだ。
一日親切だったし、くえんという
子への手の込んだいいじめとか
……とは思う橋はやと。



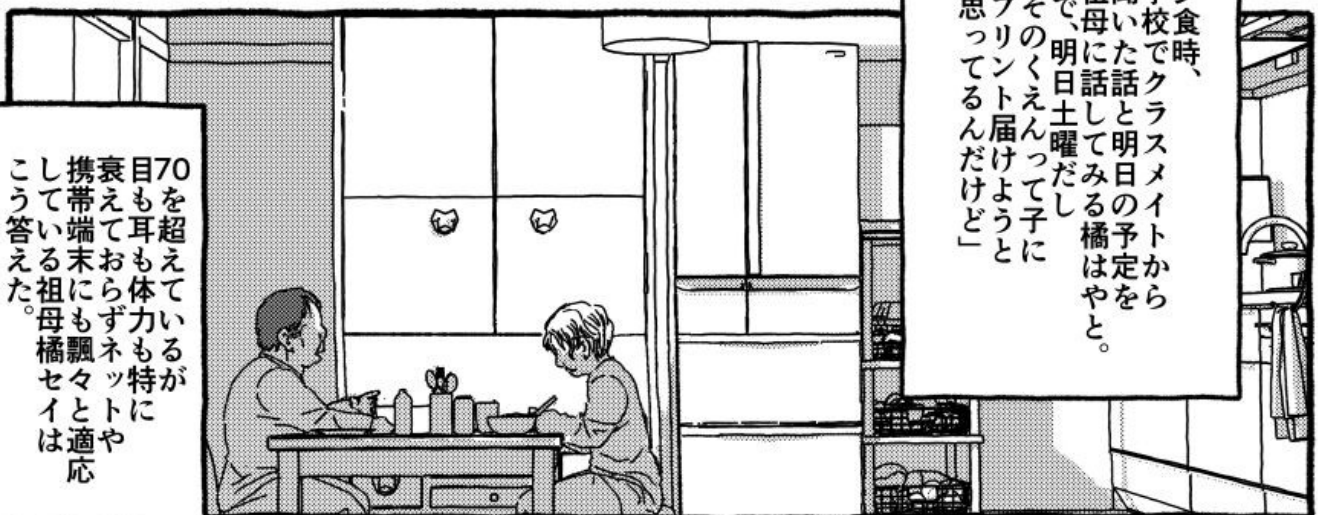
なんとなく、
こっそりとプリントを
ゴミ箱から回収した
持ち帰ってしまった
橋はやと。

くえんさんという
何かに対する文化は
とても非現実的で
飲み込もうとしても
否応なく喉に
引っかかる話だ。

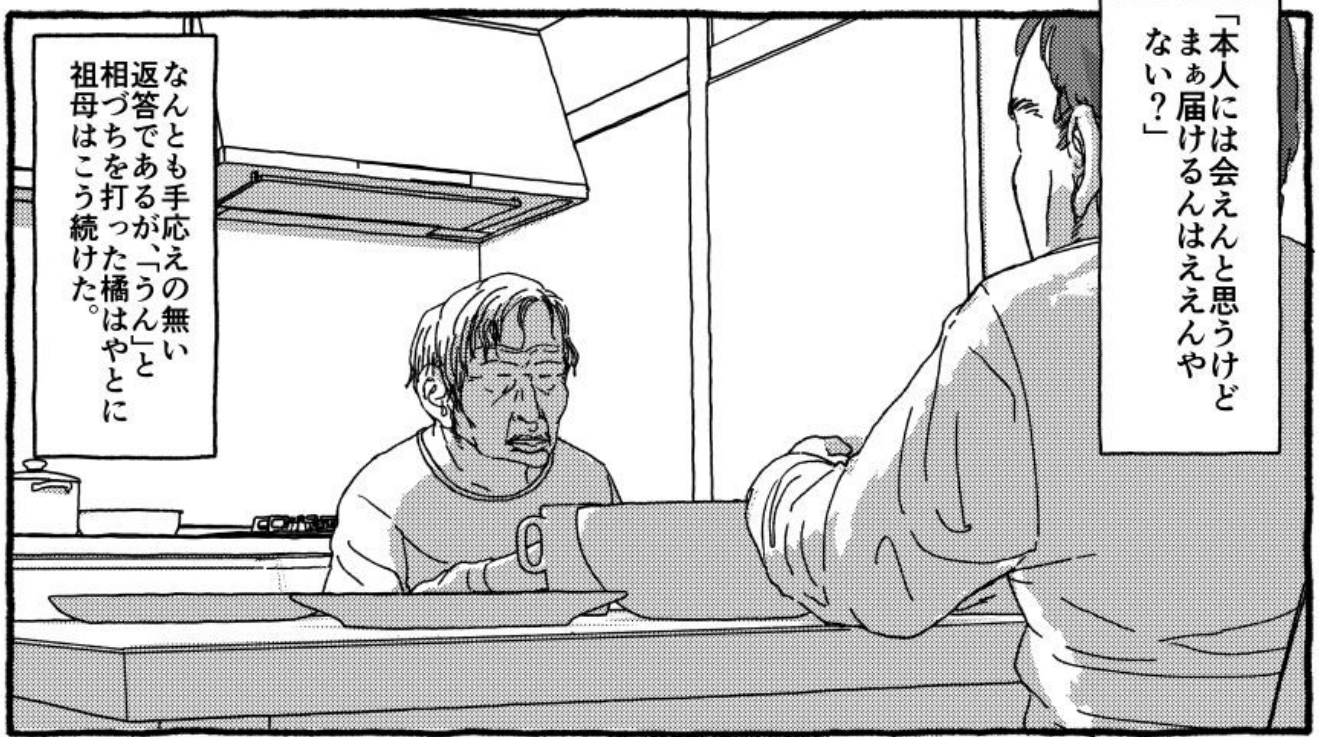
まるで
信楽焼の狸の金玉袋に
ずっしりと溜まった
濃厚な子種汁のような
話だ。



夕食時、
学校でクラスメイトから
聞いた話と明日の予定を
祖母に話してみよう
で、明日土曜だし
そのくえんって子に
プリント届けようと
思ってるんだけど」



70を超えてはいるが
目も耳も体力も特に
衰えておらずネットや
携帯端末にも飄々と適
応している祖母橋セイ
こう答えた。



「本人には会えんと思うけど
まあ届けるんはええんや
ない？」

なんとも手応えの無い
返答であるが「うん」と
相づちを打った橘はやとに
祖母はこう続けた。



「やけど、私はね、
遠くから一度
見たことがある。
夏祭りの日やった。
近くで花火が見とって
降りてきてたんかねえ」



「しかし
三度会うと人生が終わる、
と伝えられとるけ、
そのものには
会ったらいかんよ」

「概ね島民も
近寄りにはせん界限やけ
用心はしとき「一郎」
たまに父と名前を
間違える祖母。」



「ありやあ美しかった。
あれは絶対に……」
そう言ったきり
中空を見つめぼんやり
してしまふ祖母……」

という前日の
やり取りを経て尚
「くえんの家」らしき
場所にて翌日朝から
向かってみる橋はやと。

鞆にプリントを入れて
てくてく歩く。

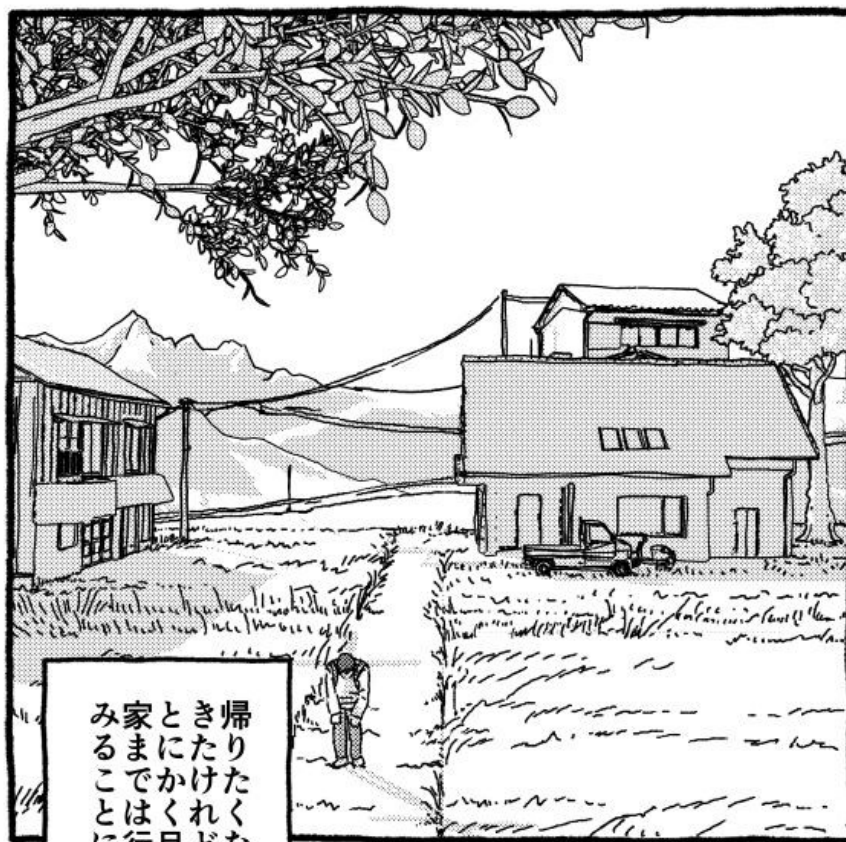
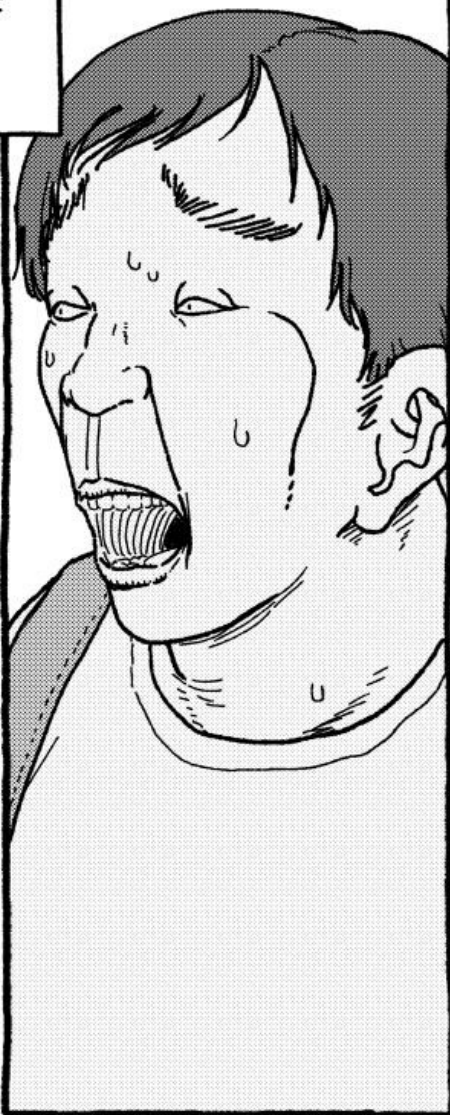
島の東の居住区部分は一周
歩いて1時間もかからないため
大方見て回ったのだが、その
ときに島西側との境目の少し
集落から離れたところに
ぼつんと変わった民家が
あるのは確認しており
おそらくあそこだろうとは
ヤマを張っていた。

違えば違ったでいい。
どちらにしろ島を
のんびり歩いて
見ておきたかった。

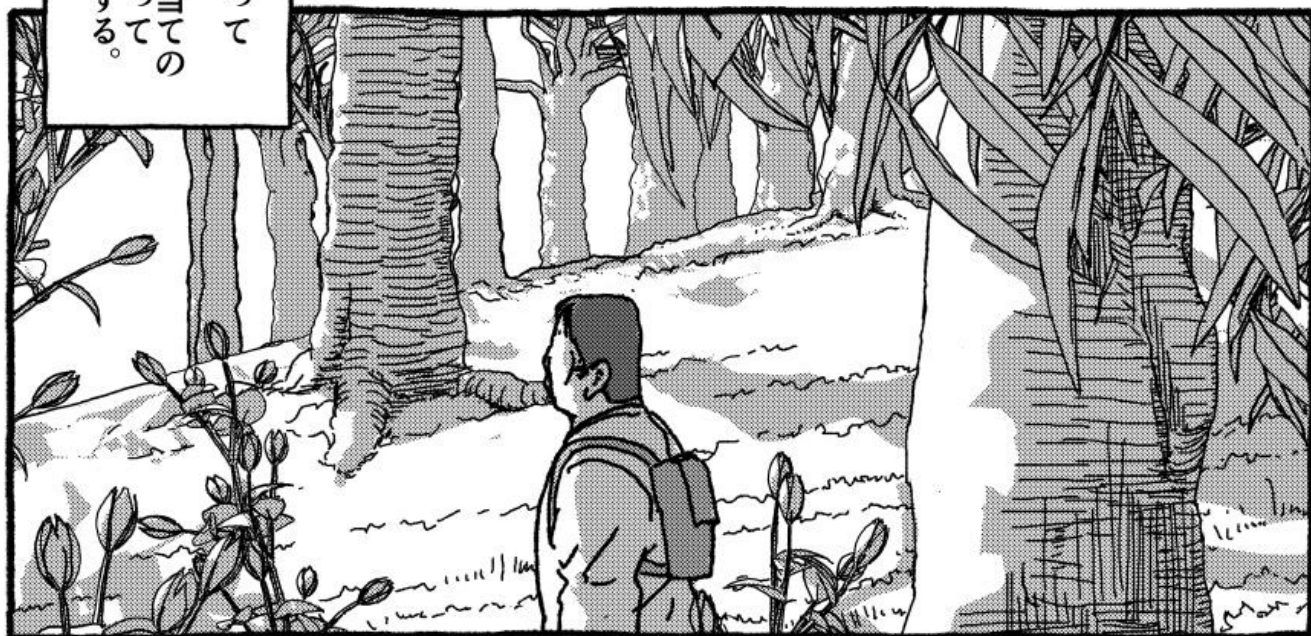




か……変わった
案山子だなあ……、
と自分なりに納得し
先を急ぐ橘はやと。



帰りたくなっ
てきたけれど、
とにかく目当
ての
家までは行っ
てみることに
する。



そもそも皆の言っている
ことからしても、恐らくは
関わらなくていい事柄で
あるのは明らかだった

行く必要は全然ないのだけれど、
といてどこか納得できる
落とし所が自分の中に欲しい。

とにかく何か軽率な
良心なのか正義感なのか、
自分でゴミ箱から拾って
しまったプリント。

それを自分の手で
また捨てる……というのも
なんだかきまりが悪かった。

世界のはしっこにいて
傷つかないで
うやむやな何かでいるのは
もうやめたいから……。
そんな思弁しているうちに
目当ての家に到着。
周りに他の家は全くない。

表札の文字は読めなかった。
単なる民家とも
そうでないとも見える。
後ろに接続している
大きな造りは何かも
訪ねてみる価値はある。
気になり

というか、
気持ちとしては
さっさと渡して
帰りたいかった。

インターホンを鳴らすと、
ゆっくりと出てきたのは
背の高い老人。

がら

コンパニ

少しうろたえながらも
言葉を絞り出す橘はやと。
「あ、あの」

「くえんさんの
お宅でしようか。休んでいた分の
プリントを届けにきたんですが」

とりあえず用件を
捲し立てる橘はやと。
「……プリント」
「復唱する老人。」
「はっ……はい。これを
渡して頂ければ……」
「ここにはいいない」
「え？」
「しげしげと橘はやとに
舐めるような視線を
向けた後、老人はまた
繰り返した。」
「ここにはいいない」

返答に詰まる橘はやと。
「え……ええと」
「……離れにいます。渡したいなら
直接持つて行ってやるといい」

「離れていうのはどちらに……」
「あの門から山の方に回り込んだら
大きな岩の方に……」
鳥居を辿っていけばよい」

「そ、そうですか」
「……」
「じゃあ……失礼します」
「……」

「渡してくれれば
いいのになあ」
独りごちる橋はやと。

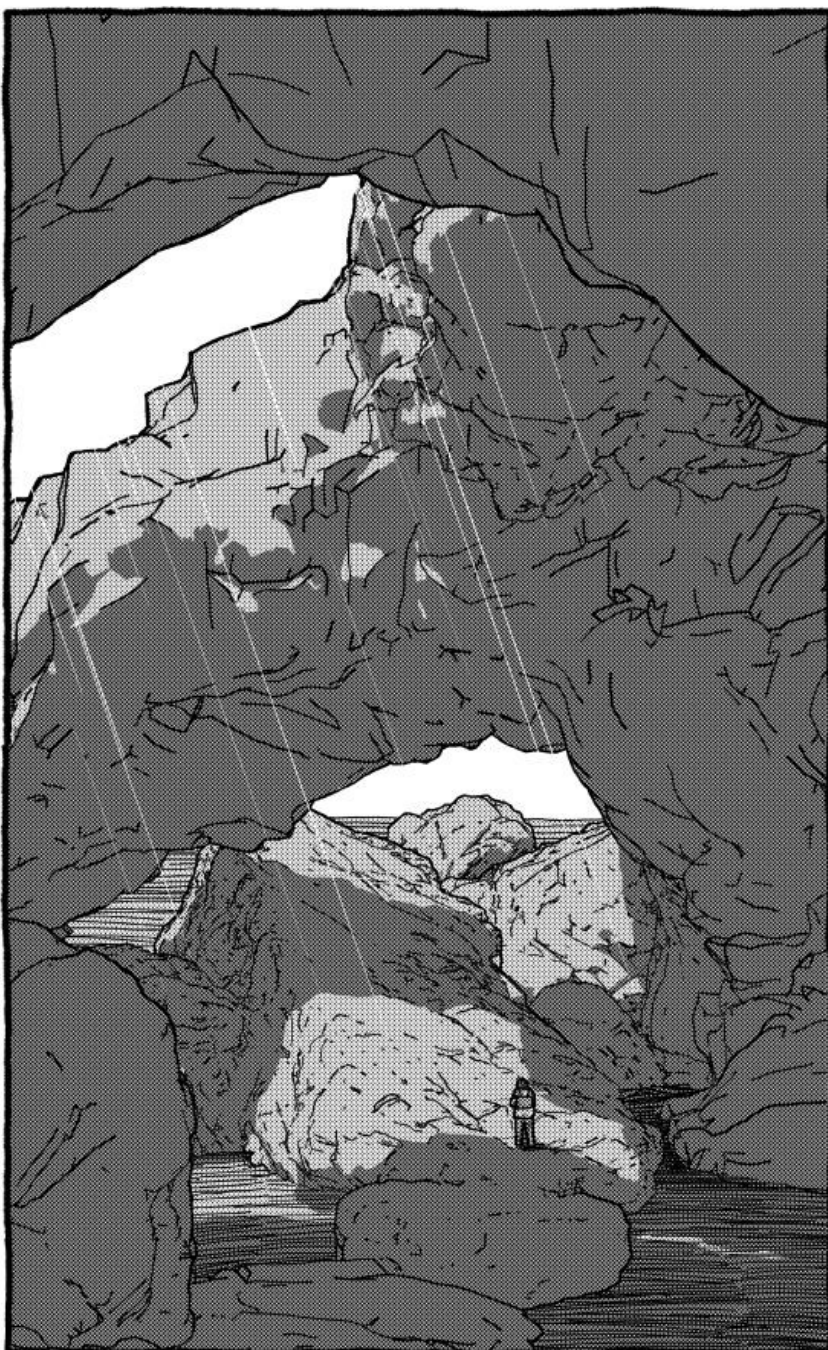
「……」

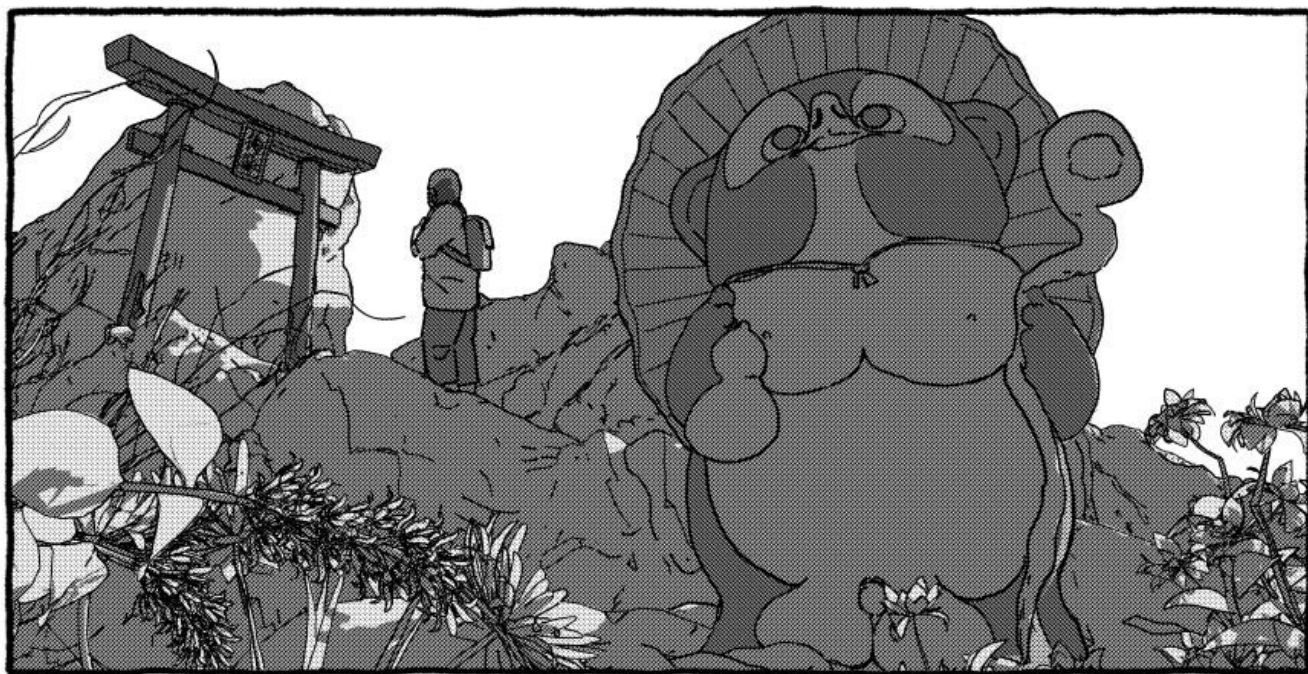
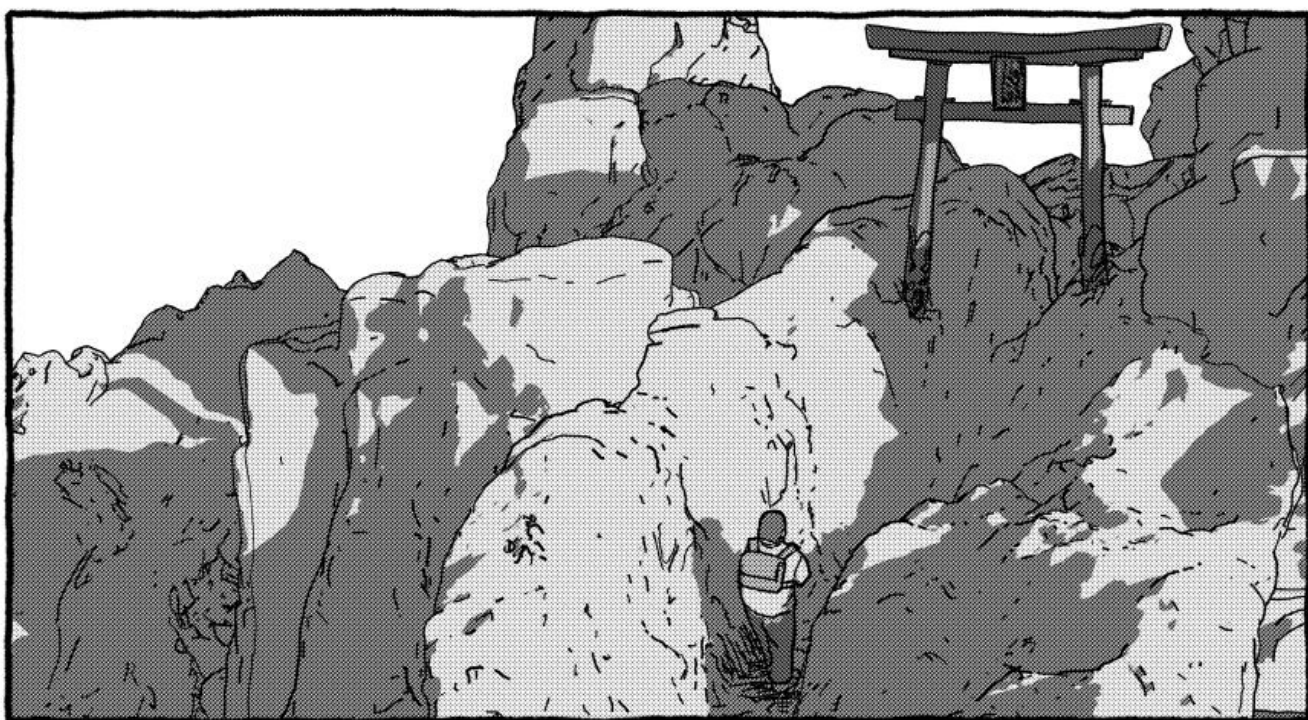
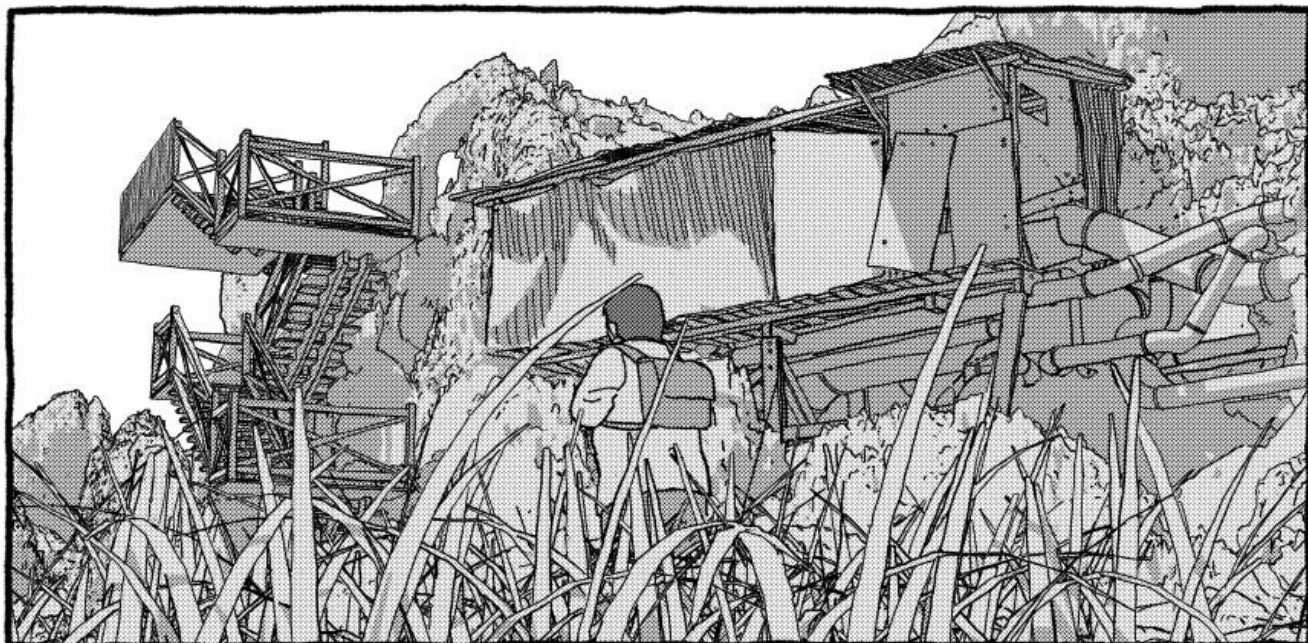
まあとにかく
さつさと渡してしまおうと
歩き始める橋はやと。
昨日祖母に何か注意された
気もするが成り行きとして
こうなった以上仕方がない。

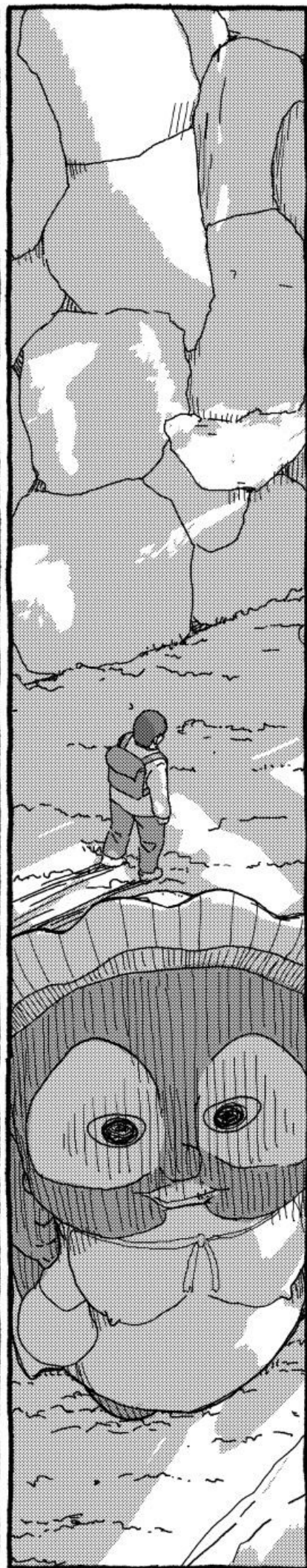
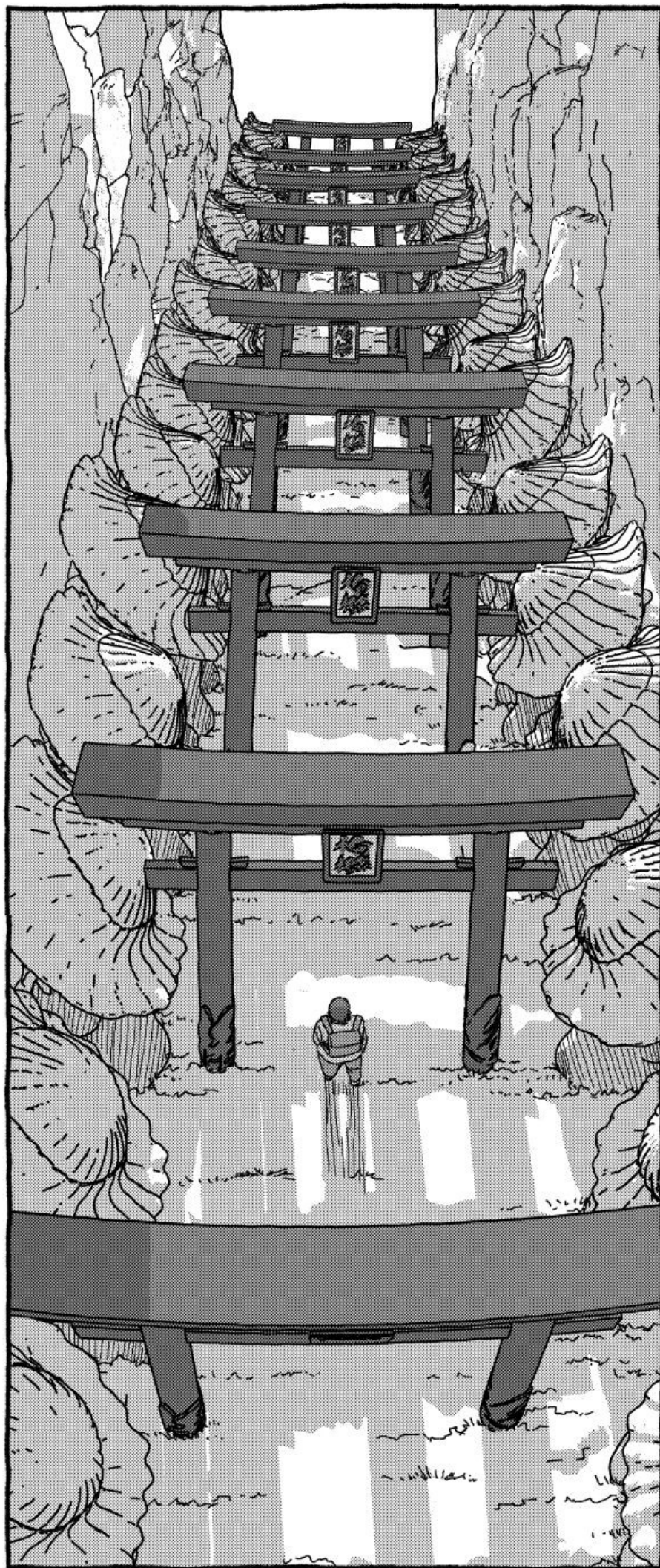
「鳥居……大きな岩
あれのことかな……
さつさとして行って
帰ろう……」

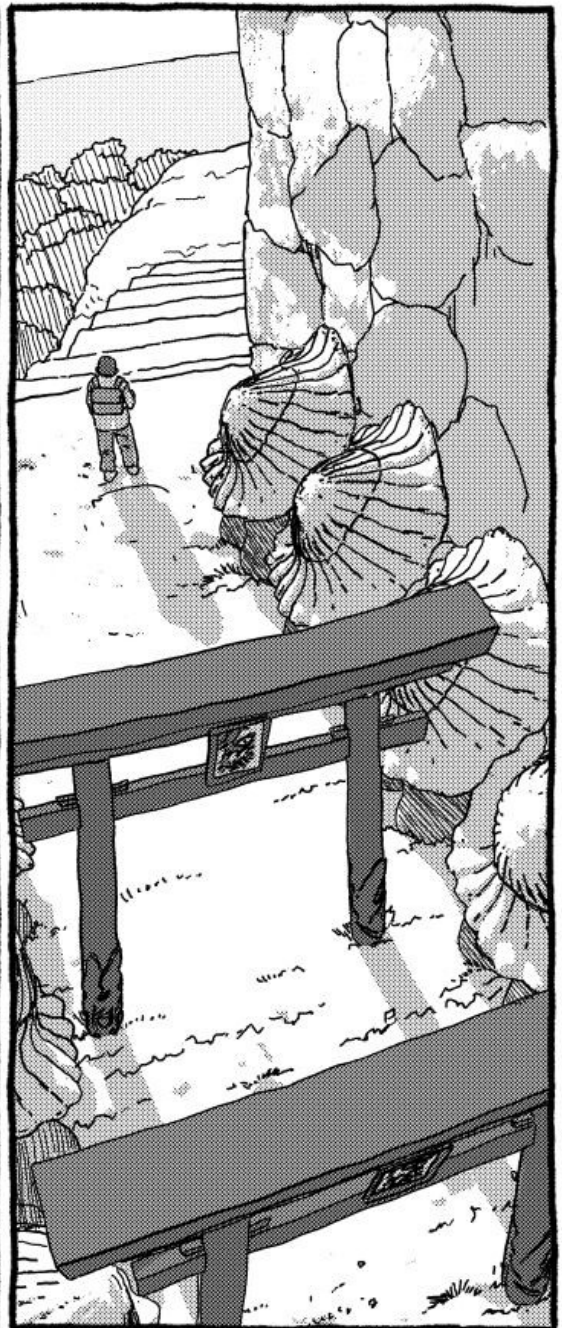
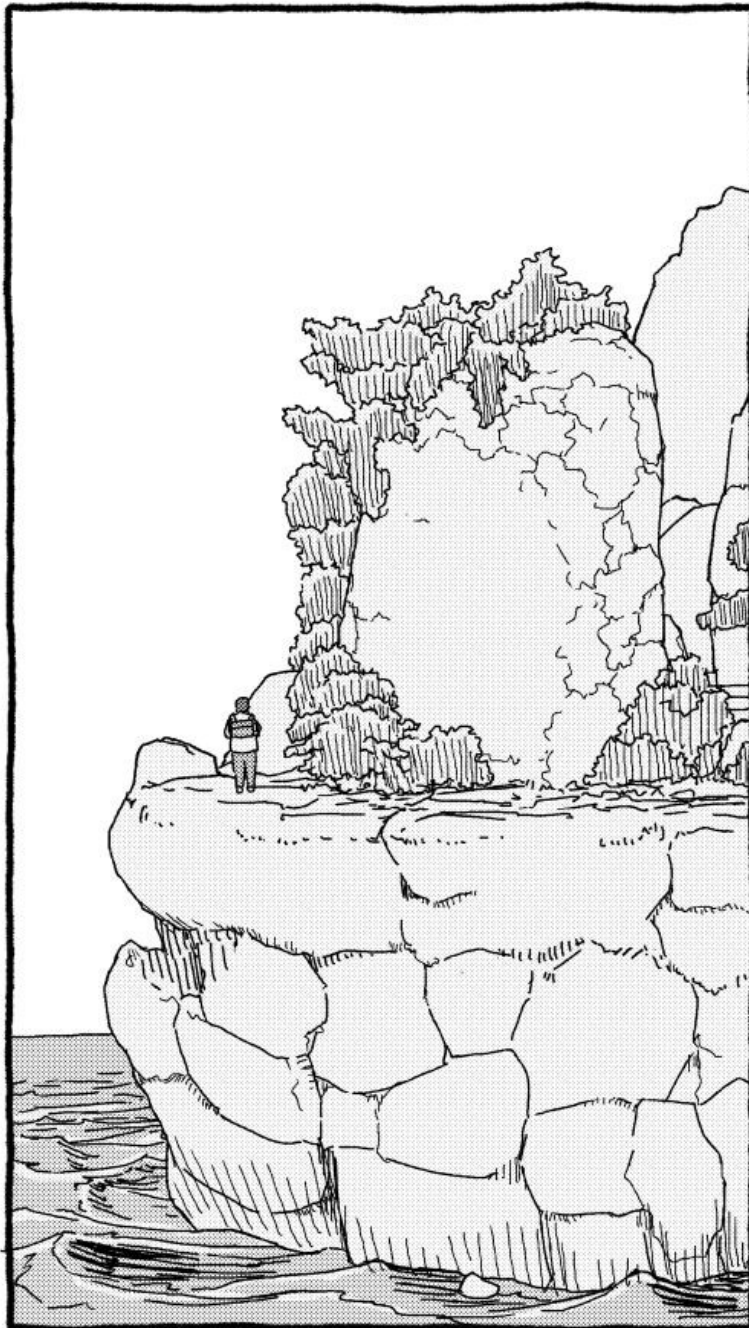


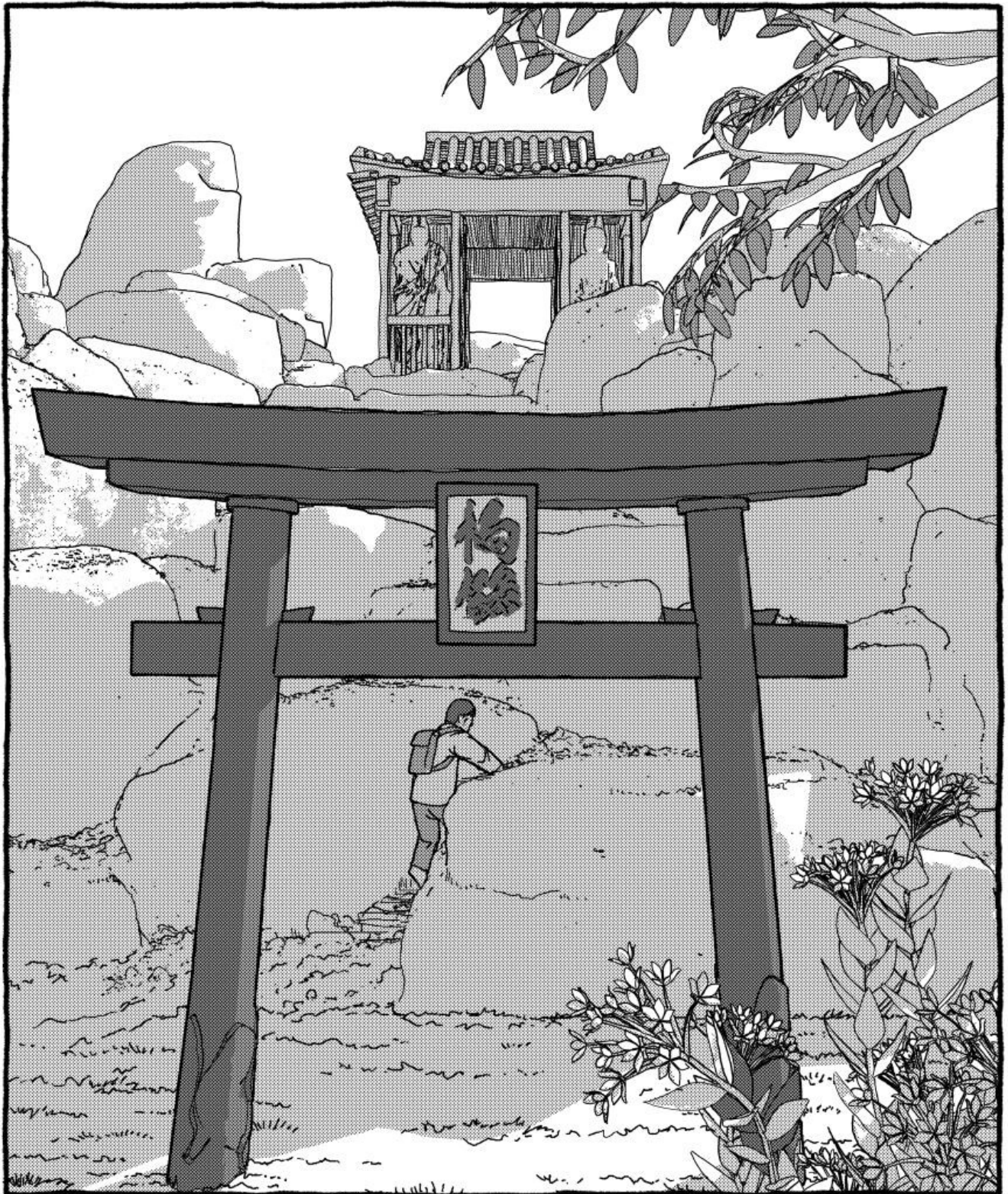
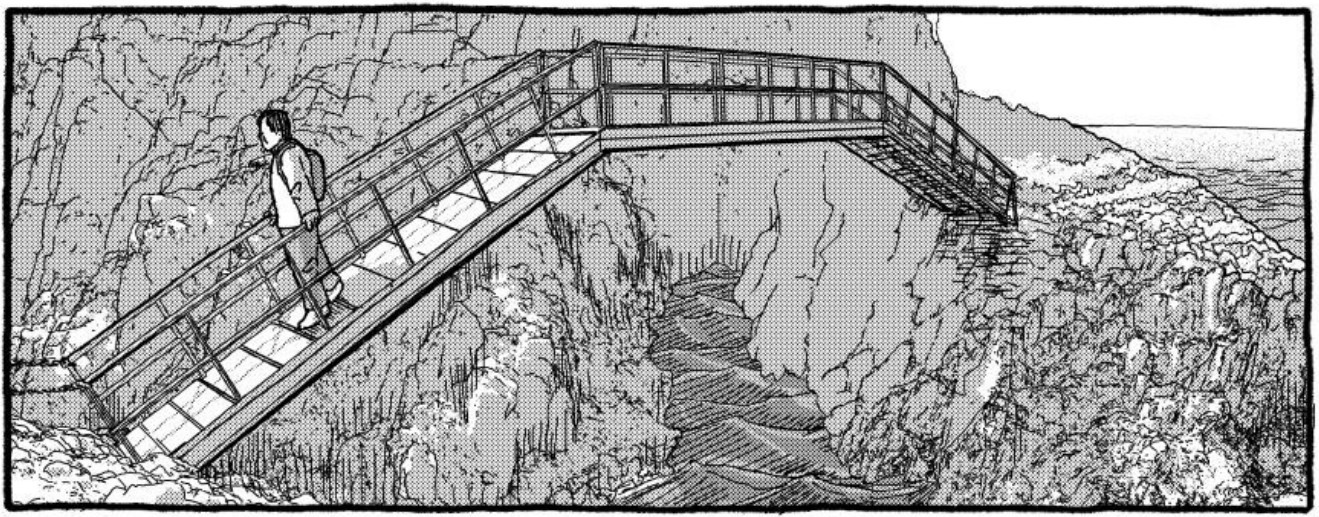


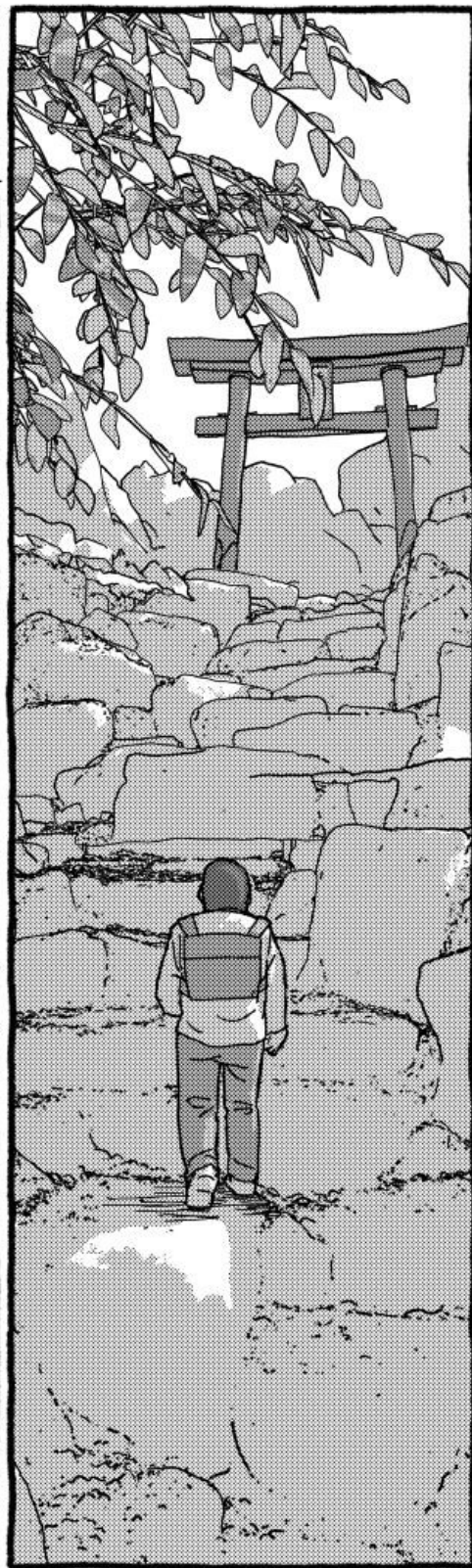




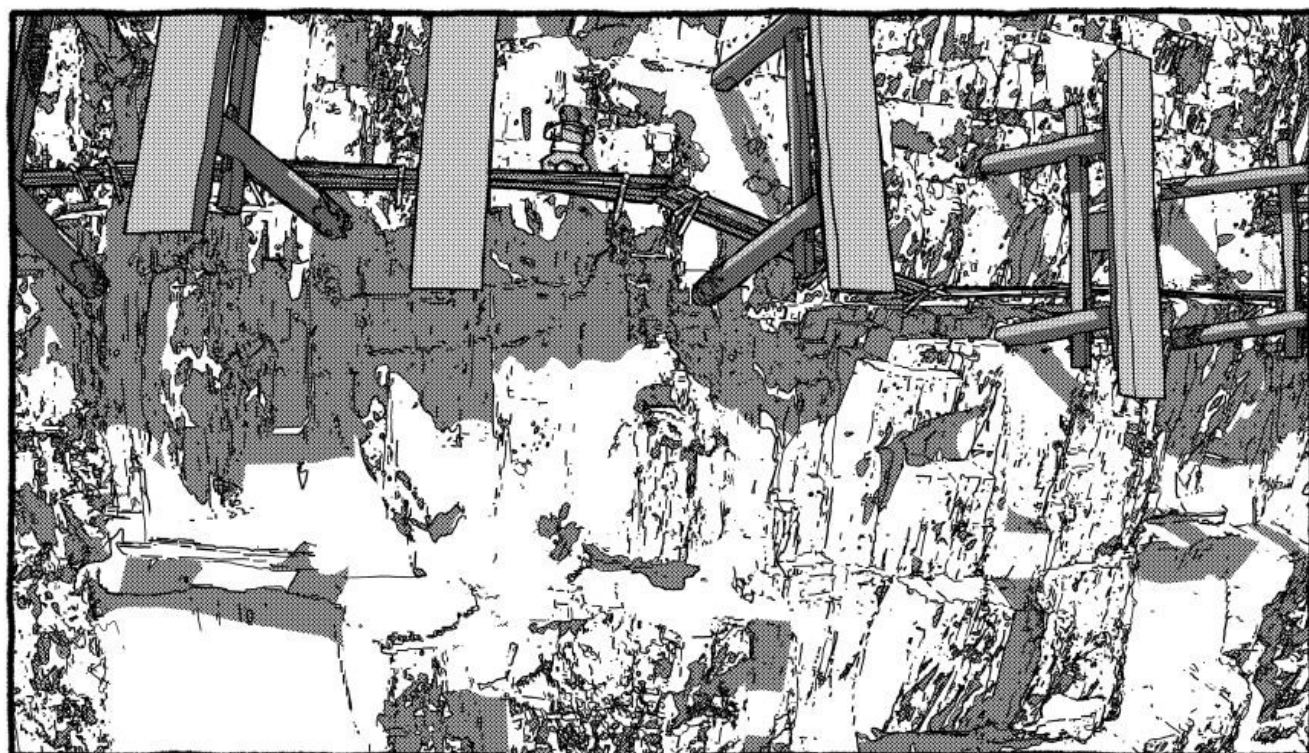
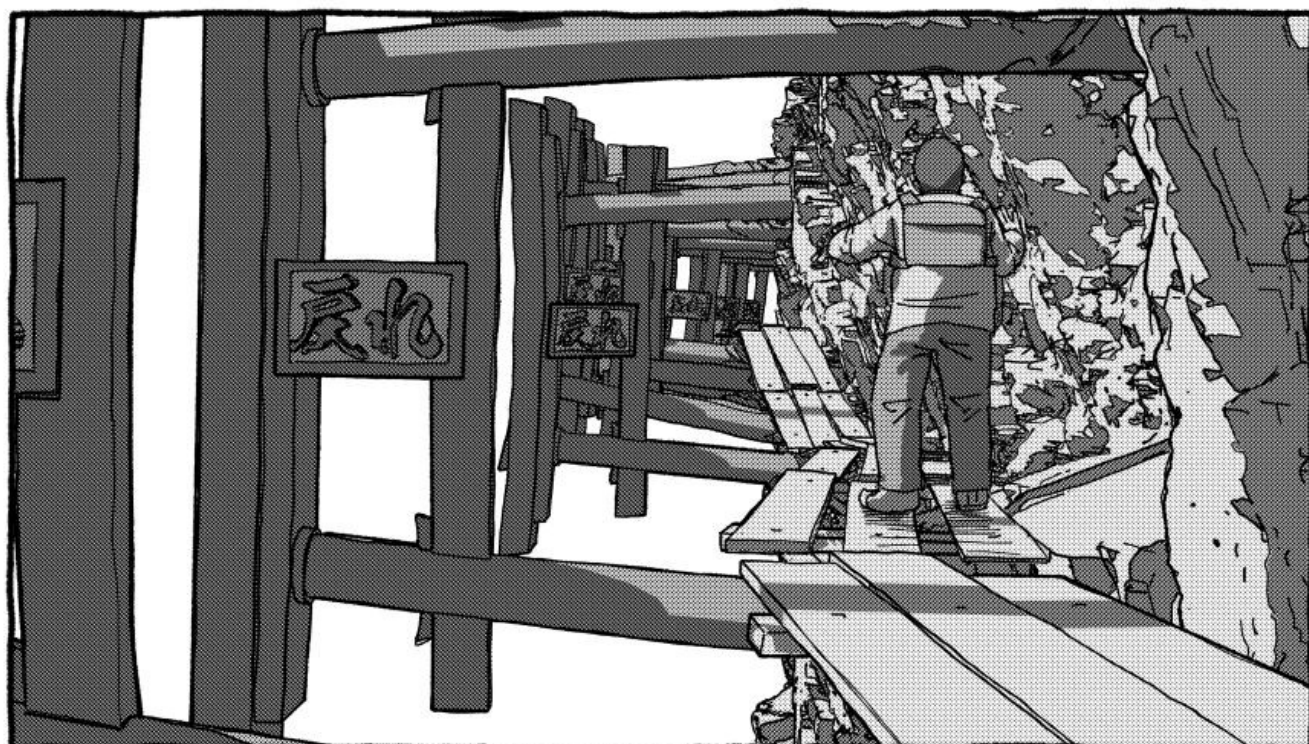


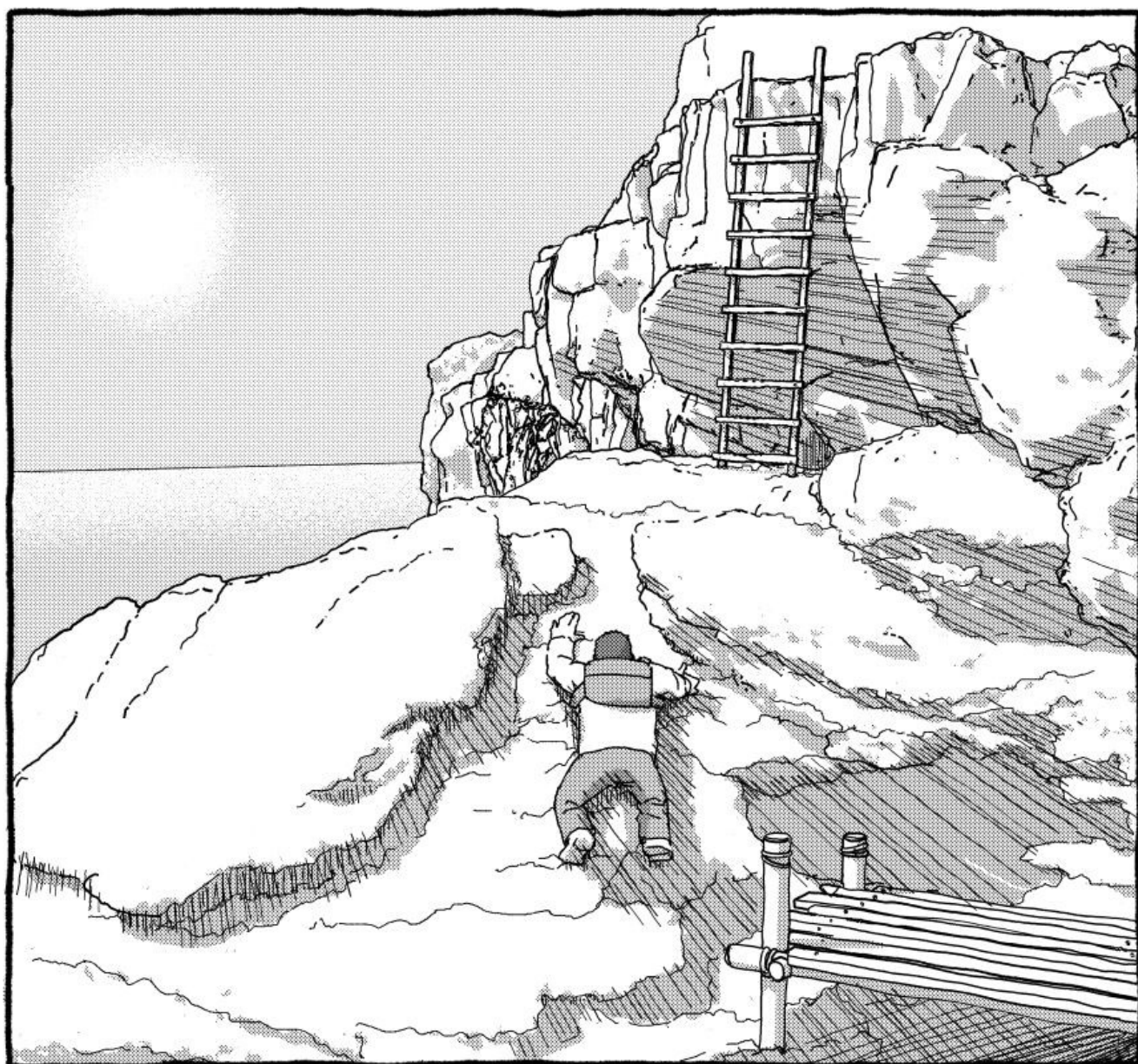


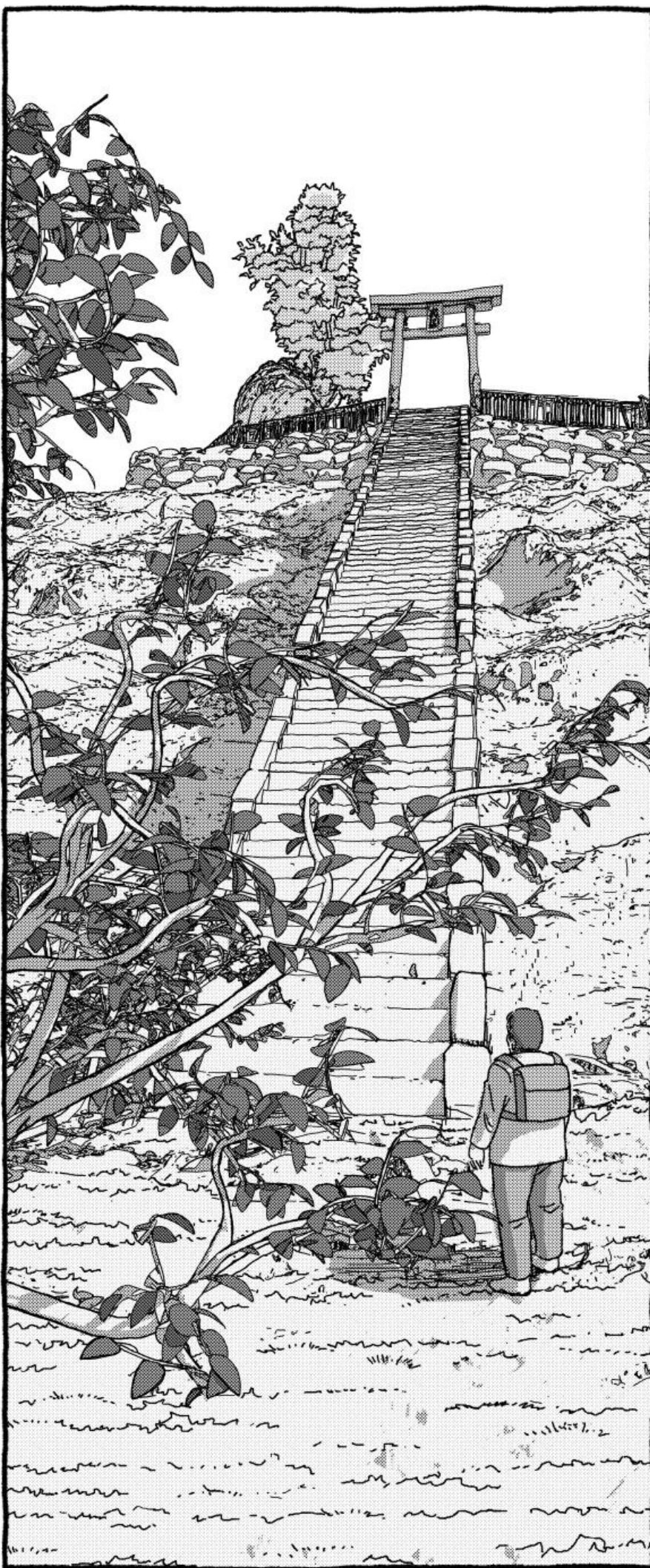
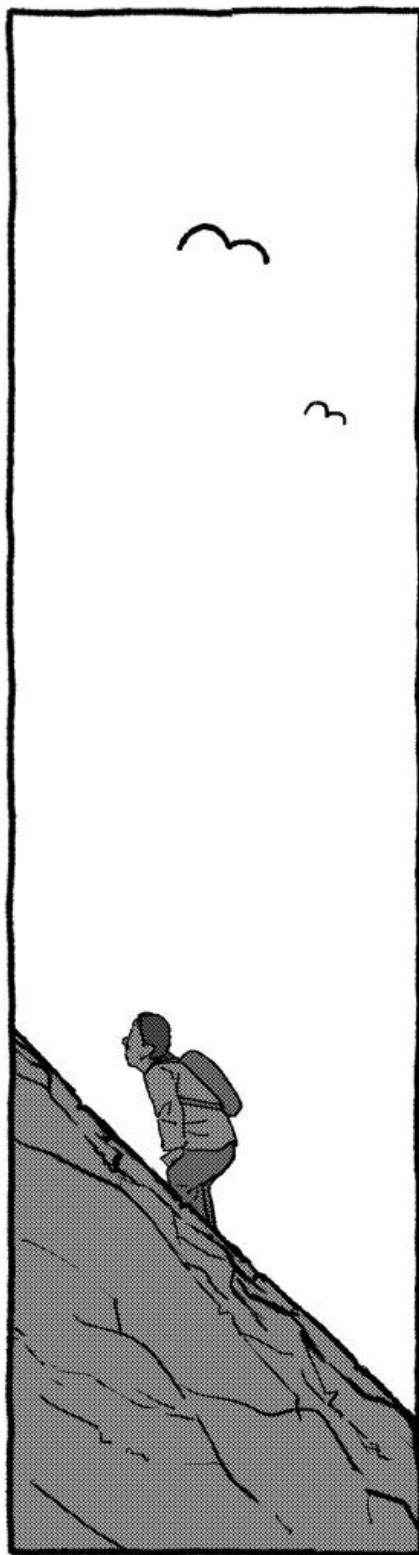


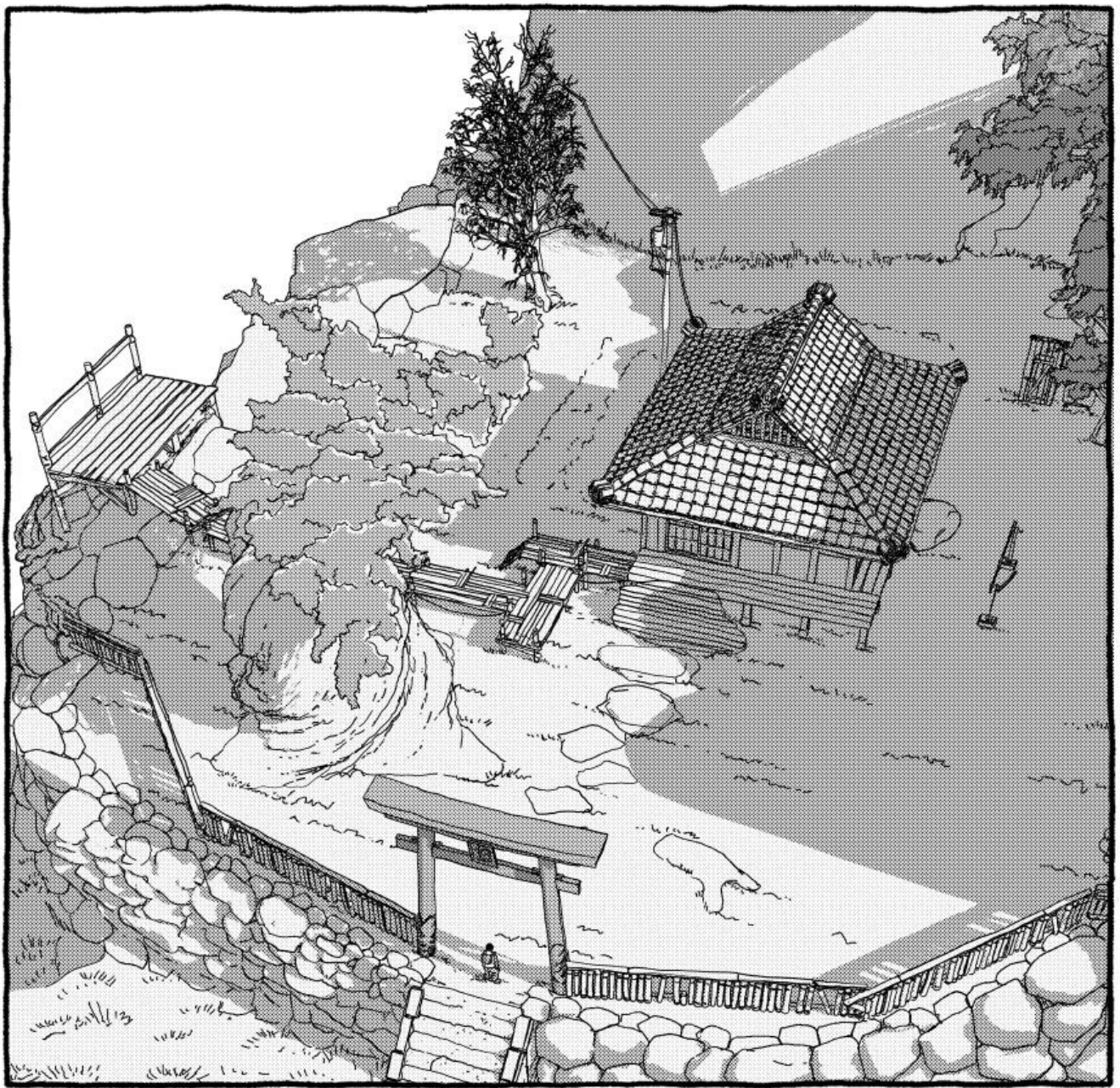














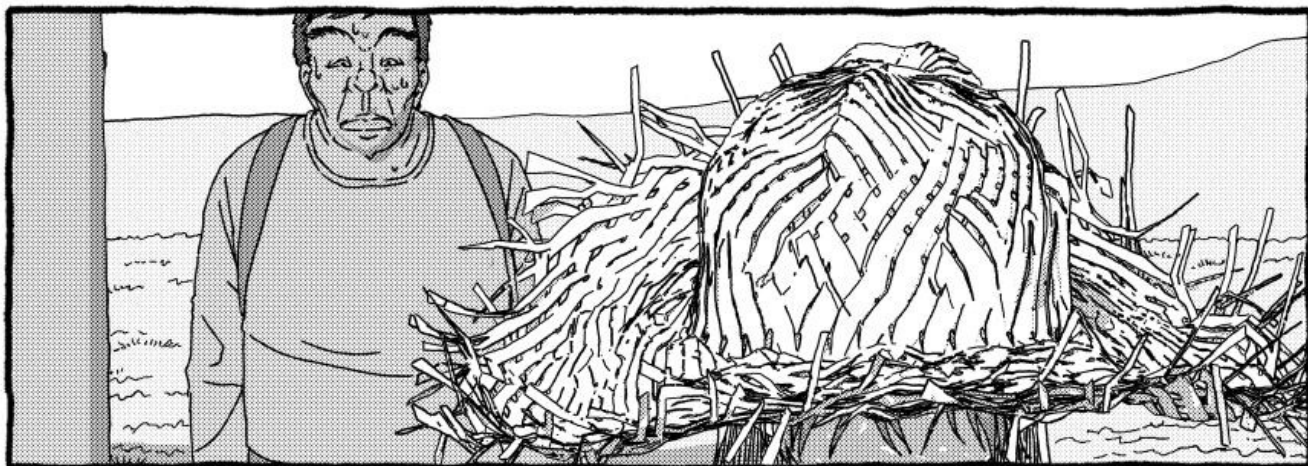
玄関まで歩き
息を整えなが
戸の前に来て
見当たらな
イタホに
遠くにいる
鳴っ音の
人付いた

何時間歩いたのか
分からず
帰りを考えるだけ
目眩がする中
現れた人家らしき
ものに安堵しつつ



人がいた。確かに居る。
少女だ。

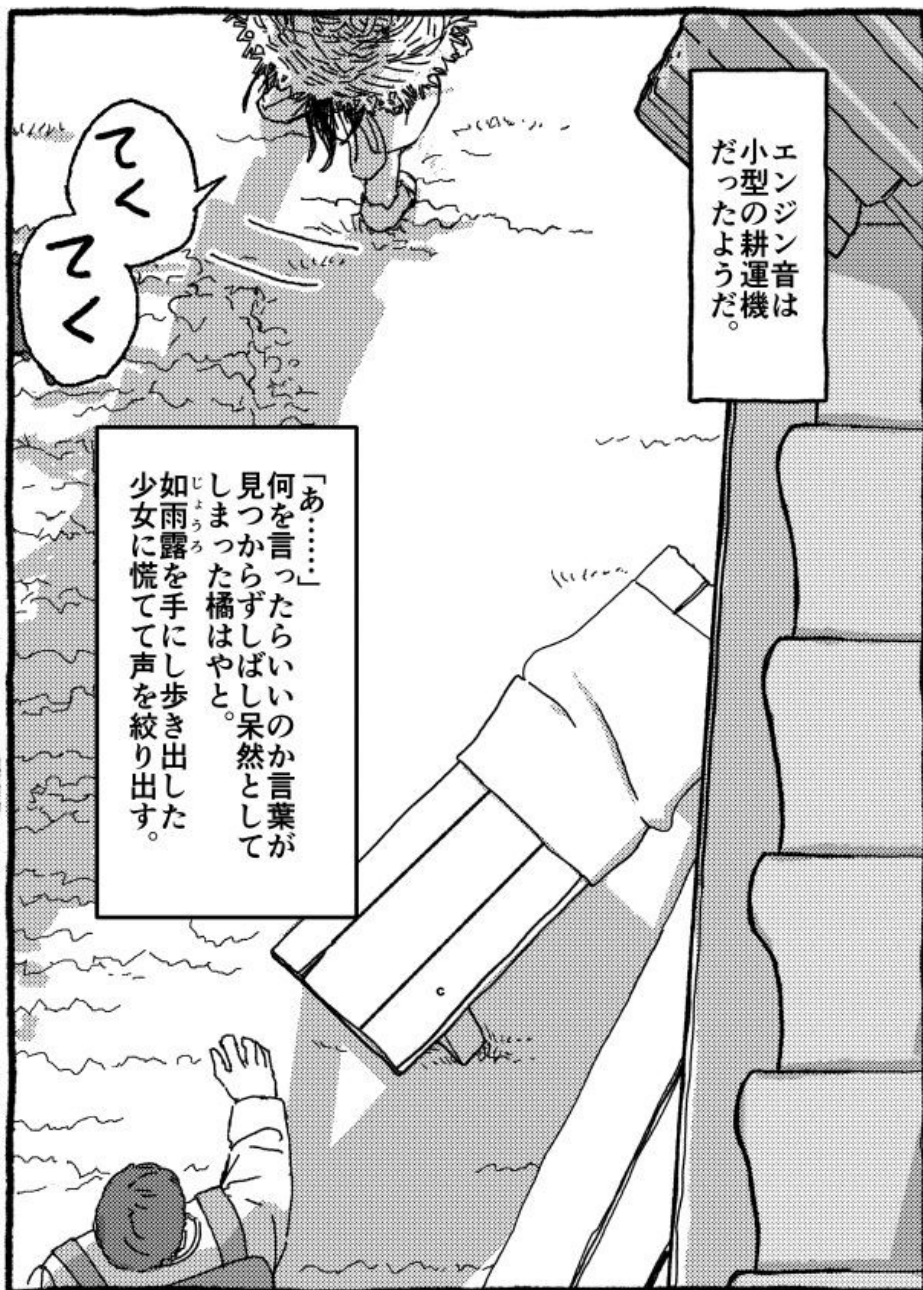
恐らく何らかの
エンジン音
家屋の裏に
明らかに人が
気配を感じ
回り込んで
桶はやと
音が止む





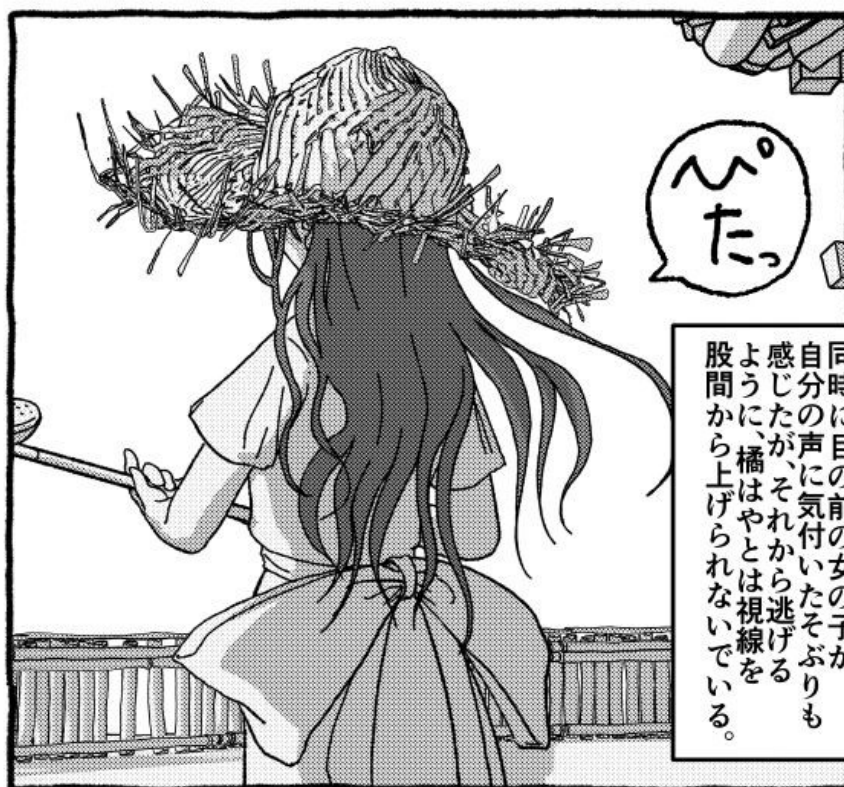
しかし
声を出してから
ある自分の身体
の
異変に気付く。

それはほとんど
自動的と言っても
いいほどに自然な
変化で、今気付いた
だけかもしれない。



エンジン音は
小型の耕運機
だったようだ。

「あ……」
何を言ったらいいの言葉が
見つからずしばし呆然として
しまった橋はやと。
如雨露を手にし歩き出した
少女に慌てて声を絞り出す。



へ
た

同時に目の前の女の子が
自分の声に気付いたそぶりも
感じたが、それから逃げる
ように、橋はやとは視線を
股間から上げられないでいる。



目視する必要があるほどに
目を落とした先には
ガチガチに自らの性器が
勃起しているのが
ズボン越しにも見えた。



ペニスとはや今まで経験したことがないほどズボンを内側から押し上げ

激烈に屹立していた。目の前の女の子は既に振り返りかけている途中なのがわかり、隠そうにも誤魔化そうにも既にどうすればいいのか頭が真っ白で視線を上げることも恥ずかしさからままならない。為す術なく時間がゆっくりと進む感覚に反して心臓の鼓動が速度を増し続けていて、まだ微かに息は切れていて、余計な所に血流を集めている。せいか意識が遠のきそうになる中、まず何をすべきか考え、顔を上げる。しかなさそうだと意を決し、そして橘はやとは、そっと姿勢を気持ち前屈みにしたあと、股間から視線を前に向け既に振り返りこちらをきょとんと見据えている少女と視線を交わした。





「あの……僕……
クラスメイトで」

「えっと
転校してきたん
ですけど」

「その……
プリントを……
休んでますよね」

「届けに……
休んでるから」

「というかあの……
くえんさんですか？」

「はい。」と、
しどろもどろな橘はやとに
「くえん」らしき者は
歯切れ良く返答したが、

しかし橘はやとは
そのただの一言の声に、
そして怒っているような
呆れているような、自らを
見つめる瞳に、

感じたことのない
胸の熱さと
ちんちんのパニックを覚え、
その場で動けなくなった。





「聞いてるっ」

へち



頬を叩かれ束の間
我に返る橋はやと
でかし既に手遅れ

びゅっ…

「あっ……いま
触っ……あ、あ」

びゅるる
るっ……!!



「あの……きみ……
もう暮れ方じゃけえ
来た道は今日
とても帰れんよ……」

信じられないことが
起こっているとか
どうやって誤魔化すか
とか考える余力もなく
意識が遠のく橘はやく



そもそも
こんな間近に
顔を寄せられたの
目を合わせて女子に
何事か囁かれたのも
こんな自然に
触れられたことも
初めてだった。
「……へ？ えっ」
とうとう、股間で
起きていた異変に
気付いたらしき声を
ぐえんが発したのが
聞こえたが、時既に遅し。

本人にとっても完全に不意の
射精の快楽のなか、橘はやとは
頬に添えられた手の温かさと
柔らかさという匂いと人生初めての
多幸感に包まれたまま気絶した。

「えっ!?
ちよっと
どしたんよ!?
ねえ!!
おーい……!」

「たいへん!!」

じわあ……

「はっ……」

はっ……



状況が理解
できない橘はやと。

ここは自室だ。



何か記憶をなくして
いるのでなければ、
整合性の取れる説は
なかった。思い浮かば



パンツがガビガビで
ビビる橘はやと。
「夢精!」

携帯端末を見て
ビビる橘はやと。
「日曜日の昼!」

全部……
「夢だったのだろう。
……でもどこから?」



「山で遭難しとったところを
網野さんが見つけて
運んでくれたそうなんよ」
と言っでずと
焙じ茶を嚙って婆ちゃんは
付言した。

おお、起きたんかね。
と橘はやとの姿を認め
いつも通りの婆ちゃん。



「遭難だけに」

山に行ったところまでは
現実か……と
考えを巡らす橘はやと。
つまり土曜の夜に救出されて、
昼まで寝ていたらしい。

取りあえずの得心がいくと
緊張が解けたのか腹が鳴る
橘はやと。



おそらく迷惑や心配を大量にかけた手前、
約束するしかない。やはり心に引つかかる
ものはあったが……。しかしあの女の子が
夢にしかいない、自分の作った存在とすると、
大きな喪失感のようなものが胸に去来する
橘はやとであった。



腹減つとろう、なんなり
作って食べな、と祖母。
袋麺の冷やし中華を作って
食べつつ、もうあの辺りには
行つてはいけない、網野さん
(あの麓の爺さんのこと
だと判明)もお礼には来なくて
いいと言っているの
近寄らないこと、と祖母から
伝えられる橘はやと。



「おいおい
失踪してたらしいな」
翌日の学校にて既に
広まっている昨日の顛末。



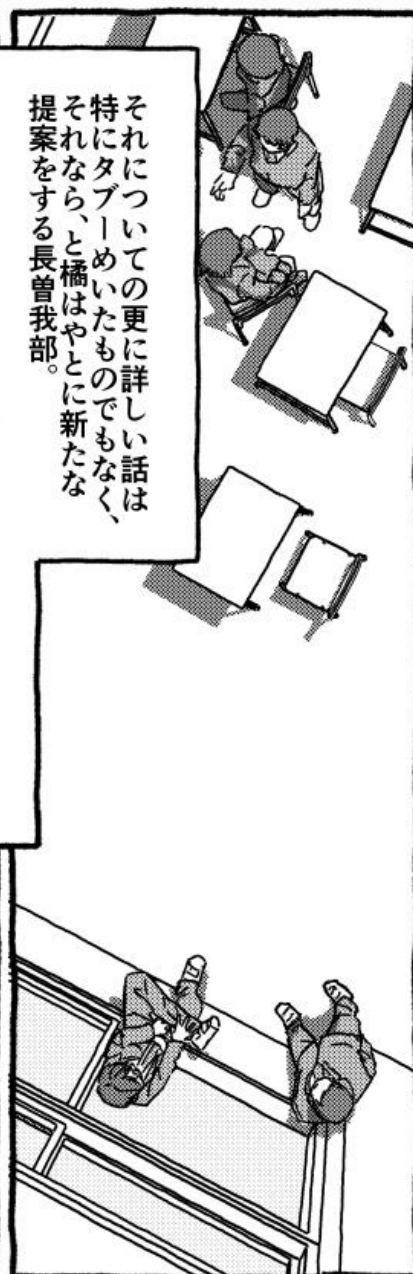
いや、実は三日前話してくれた
くえんについての話に興味を
持って、やらかしてしまっ……、
と半分くらい正直にことの背景を
話す橘はやと。



それについての更に詳しい話は
特にタブーめいたものでもなく、
それなら、と橘はやとに新たな
提案をする長曾我部。

「ならせつかくだしウチの
曾爺ちゃんの話聞いてやって
くれよ。完全にボケてるけど
その手の話なら聞いたら
教えてくれるぜ。
俺はもう聞き飽きたけど。
話聞いてもらえると喜ぶぜ。」

ということでは
長曾我部真男の曾祖父に
話を聞きに行くことに。



「くえんはどこにでもいる。
この部屋にもいるかもしれない」
長曾我部真男の父方の曾祖父
長曾我部孝三はそんな意味合いの
ことを語った。滑舌も声量も
聞き取りやすくはなかったが、
90代という年齢にしては元気だった。



そ、それってどういうこと？

尋ねる橋はやと。
話題にすっかり食いついた橋はやとの様子に
満足そうに煙草を燻らせゆつくりと喋りだす
長曾我部孝三。
「天狗の隠れ蓑を着けているからだ」



困惑する橋はやと。
俺ゲームしてるわ終わったら来いよ、と
真男は橋はやとに祖父の相手を任せて
さっさと行ってしまった。
そして長曾我部孝三はその説明を続けた。



「天狗の隠れ蓑」は婚姻したくえんが授かることが
出来るもので、着けた者以外から、姿が見えなくなる。

ここ何代かのくえんは血が濃くなるのを
嫌ったか移住者、旅行者など外部の者を
好んで夫にしているらしいという話もあり、
誰がその夫となったのか誰にもわからない。
くえんと婚姻しながら人間の妻を娶って
いる可能性すらある。

婚姻したくえんは天狗の隠れ蓑で姿を消し
人里に降りて生活してもよいのだ。
つまり誰もがくえんの夫である可能性が
あり、先代くえんは我々に見えていない
だけでそこにいる可能性もあるのだ。

そんな内容を1時間以上かけて
橋はやとに喋り、長曾我部孝三は、
「大久絵島案内社刊行大久絵山案内」
と書かれたポロポロの冊子を
書棚から引き出して貸してくれた。
くれたのかもしれない。その辺は
聞き取れなかった。



真男の部屋に行き、どうだった？
と訊かれこんな本貸してもらった、
とバラバラめくると大正八年刊行
との表記。貴重なものかもしれない。
ビビりながら丁重に鞆にしまう
橘はやと。



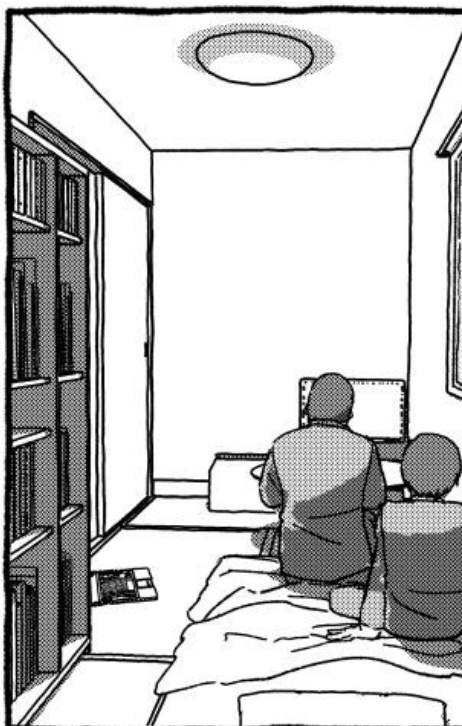
「そんなことよりちょっと
これやってみろよ」
世界的に流行っているPCのオンライン
対戦ゲームをやらされる橘はやと。

言われるがまま操作を覚え挑戦するが
初心者であること以上にゲームが下手な
ことが露呈する。
「二人用ゲームとかないの？」
あるけど、と真男は答えるが、
それに続く言葉は驚愕のものだった。



「好きなんだよな。ゲーム下手な
やつを後ろから見てるのが」
変態の貴族の遊びみたいなのに
付き合わされていたことに
ゾッとする橘はやと。

「しかしえらく長いこと話してたな。
そんなに興味あるか？ 山にも行くほど……
って、もしかして会ったとか？」



そこそこ長い懊悩の末に
「ぼつりと橘はやとは答える。
「会ったかも……」



しばしの沈黙はあったが
「マジ? どうだった?」と真男。



「ふーん。どんな感じよ? どういう系?」
「なんかこう、お姫様みたいな」
「語彙力がねえな」
「っていうか信じるの?」
「信じるもクソもそれってさ」

頭から信じた反応が来るとは思わず面食らうが、
「……すごい綺麗だった」と兎に角自分の見た
印象の最も的確な表現をそのまま答える橘はやと。

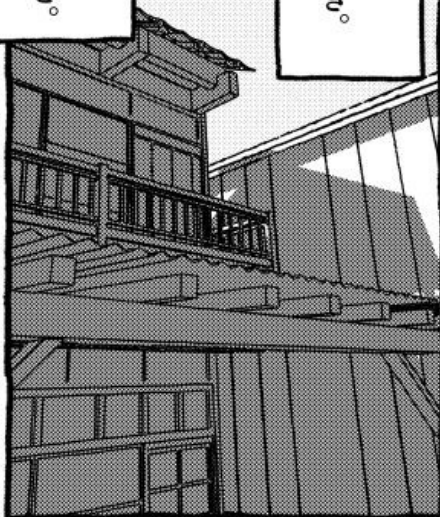


「お前だって夢かどうかからん話してらんだろう。まあ嘘をついてるとは思わんよ。
ただこの島で育つてると、あの山には近づかないな。別に具体的に理由があるわけじゃ
ないが、行くのは何かタブー感があるんだな。そういう刷り込みみたいなのはあるな。
先達の知恵かもしれない。何か幻覚物質のようなものを放出している植生が何かが存在
しているのかもしれないと俺は見てる。お前のそれも意識朦朧とした末の夢って
こともあり得るな。でも本当だった方が面白い」

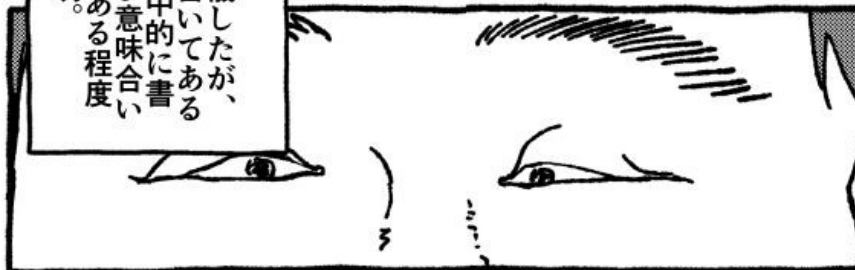
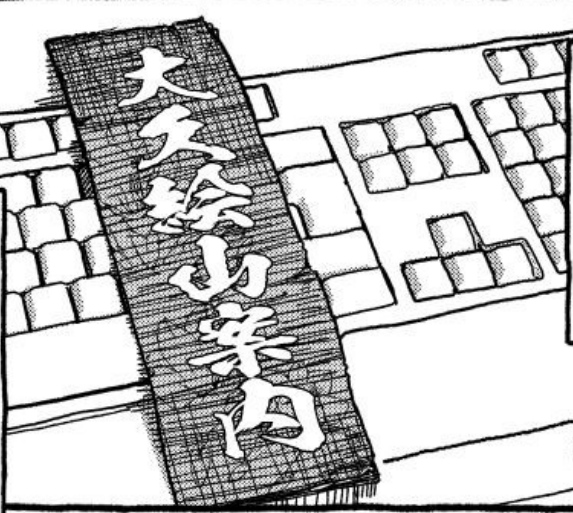


と真男が結論づけた
ところで本日はお開き。

「じゃな」
家に帰る橘はやと。



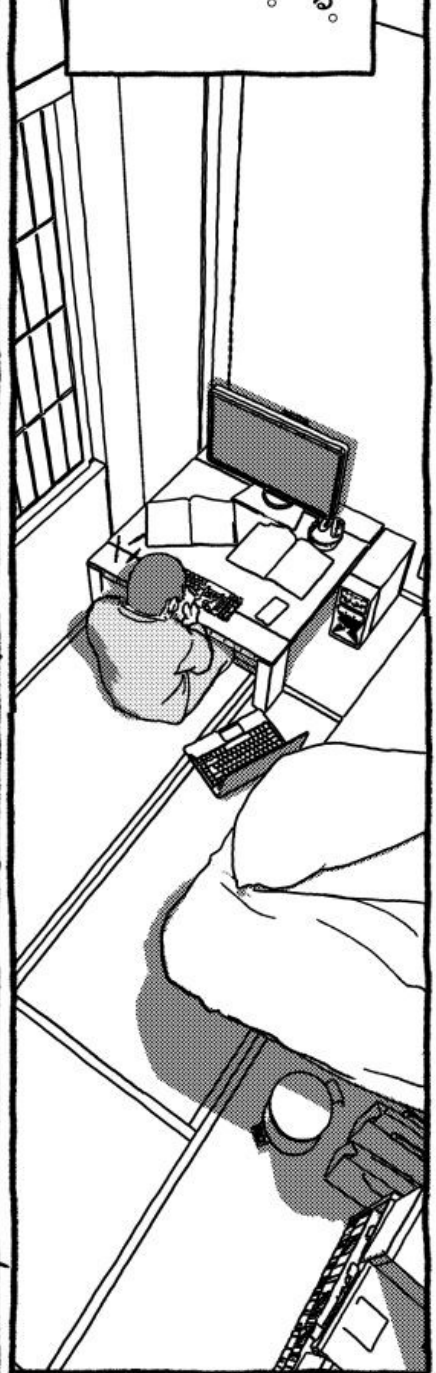
自室にて。
言葉が古く解説には難儀したが、
天狗の隠れ蓑のことが書いてある
っぽいところを発見、集中的に書
き写し一文一文どういう意味合い
か頭をひねり、なんとかある程度
の内容を読むことに成功。



くえんはその婚姻の儀において天狗の隠れ蓑かくみのを授かる。
それは姿を消すことの出来る道具だ。人のためのもの。
それはくえんのためのものではない。誰かとのためのもの。
姿を見続けられれば誰も正気ではいられないゆえに。
誰かと夫婦となればそれを着けて人里に降りられる。
くえんは子供ができたなら島から出てよい。
ただし子供は管理担当の者が預かり、
10歳になると山で一人で暮らす。

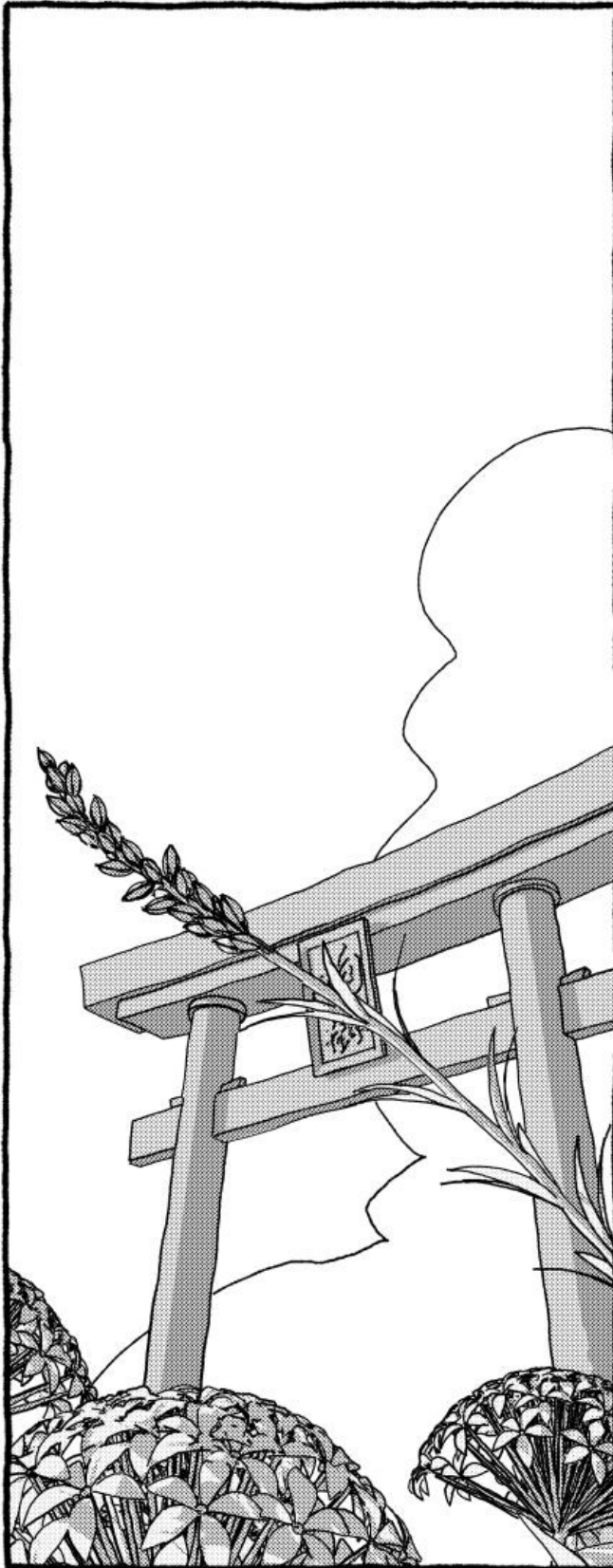
天狗の隠れ蓑はくえんが嫁入りする際に山頂の大樹にて授かる。
二通りの方法があり、一つはくえんが一代に一枚、
産まれたときに授かる特別な御札おふだをそこに奉納することで
それと引き換えることが出来る。
もう一つは、夫婦となる二人がそこに二つ柏手を打って願い事をし、
二人の願いが一言一句全く同じなら受け取ることが出来る。
(眼鏡をかけた学生風の男が質問するイラスト)
“なんで方法が二つあるんですか?”

(宮司のような風体の人が答えるイラスト)
“御札の奉納が本来のものだ。
だが、子を為す前に夫が亡くなったり、
子を残せないことがわかったり、
あり得ないことだが夫が逃げ出したりすると、
再婚しなければならぬ。
くえんの婚姻はあくまで子孫を残すのが
一番の目的だ。婚姻が破綻すると天狗の隠れ蓑は
効力を失う。しかしあくまで例外的な救済措置で
あるため、難易度が高くなっている。
これは一度目の婚姻に慎重さを要求するための
決まりなのだ。”





よくわからないので
本棚にしまう橋はやと。



クラスにも馴染み長曾我部真男と
割と仲良くなる橋はやと。
クラスメイト男子の真男以外の
他の二人は既に童貞ではないらしい。



純潔保護同盟、
結成。

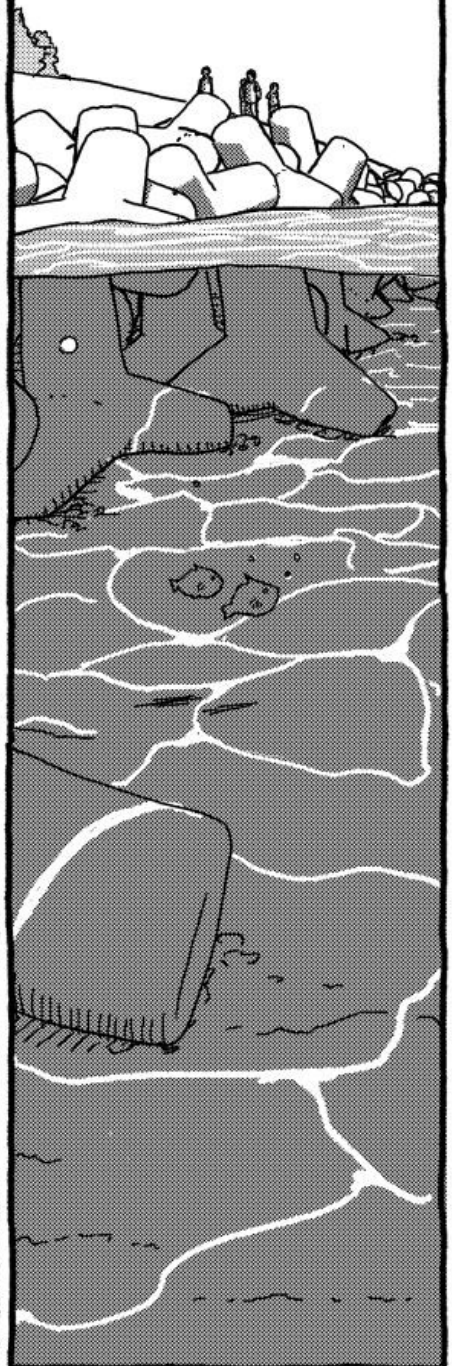
そんなこんなで
季節は初夏に。

観測史上最大の台風が
大久絵島にも直撃という
予報が。

この台風は極めて強い暴風雨を
伴います、予め食料備蓄や
避難準備等を用意しましょう、と
学校でもアナウンスがあり、
にわかにはソワソワし始める
皆の空気。

に拘わらず、一つ気がかりが
どうしても拭えない橘はやと。

あの山に居た女の子……やはり、どうしてもあの、
この世のものとは思えぬ美少女の姿、声、そして
仄かな匂いが、しかしまるき現実のものでなく
自分の想像の産物とは、到底思えない。
何度もシコった……といえは表現として嘘になる。
あの子でしかシコってない。



忘れた方がいいのだろう、
おそらく自分のためにも……
と努めてきたが、
「観測史上最大」という
恐ろしい言葉と町を吹き抜ける
力を孕んだ微風の妙な静けさに
胸がざわつく。

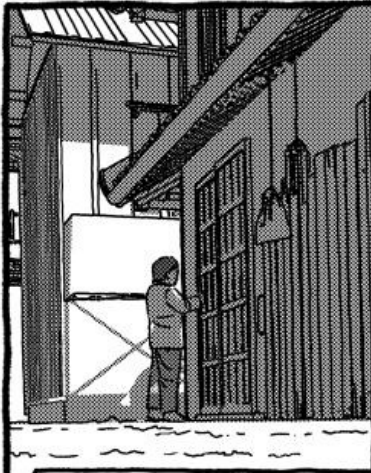


これから今までここに一度も
来なかった強さの風雨がくる……
あの場所とはとても危険そうな
地形に見えた。家は切り立った
崖のそばにあった気がする……
さすがに避難するだろうが……
大丈夫だろうか、あまりに心配だ。

そうだ、あの老人の家に
行ってみようと思いつく
橋はやと。

そういえば、
まとめて近寄らない
ようにと言われていたのも
あつてあの網野という老人
まで夢の一部として片付けて
いたような気がする。話は
それにあの老人とした話
くえんが存在する前提で
なければ成り立たないし。

確認だ。ただ確認に行く。
その点については心配
要らないとか、或いはもう
前回の会話はやはり夢が
混ざっていて、くえん
などという女の子はいないんだ、
とはつきり言ってもらえれば、
それでよしとしよう。
とにかく何もせずあの女の子の
ことをずっと心配しながら
暴風雨の一夜を過ごすなんて
単に無益だし自分が辛い。



「会ったんだろう、何を言っているんだ」

一瞬でいるかという事実を
突きつけられ周章狼狽する
橘はやと。しかし本来の目的を
思い出す。

「それで何の用だ」
「あつ、えつと、いや、その、つまり
くえんさんはちゃんと避難とか
したのかな……と、ちょっと心配に
なってるの、なんか一人暮らしっぽい
感じもあったし、ええと……」
「避難？」
「えっ、だって台風で、結構危なそうな
感じじゃないですか、地形とか、途中の
道とか風で吹っ飛んだりしたらもう
どうしようもないというか……
それにあそこ情報も……テレビとか
ネットきてるのになって……」



「テレビやネットは無いな。
それにこちらからは連絡できん」
とそれだけ言って、質問には答えた
とばかりに口を閉じる老人。

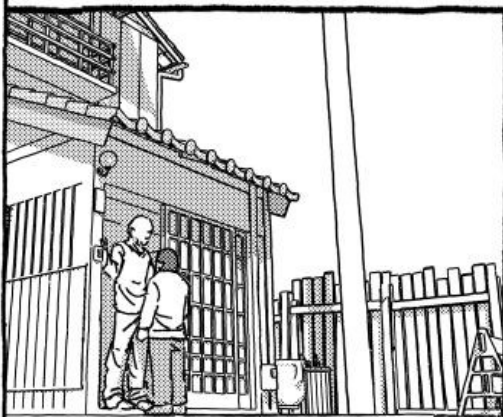
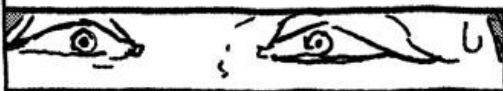
「啞然とする橘はやと。
「たっ台風が来てるって
情報は手に入るんですか？」」



「自然の力であれがどうなろうと知ったこっちゃない。あちらからの要望でしか私は動けん。」

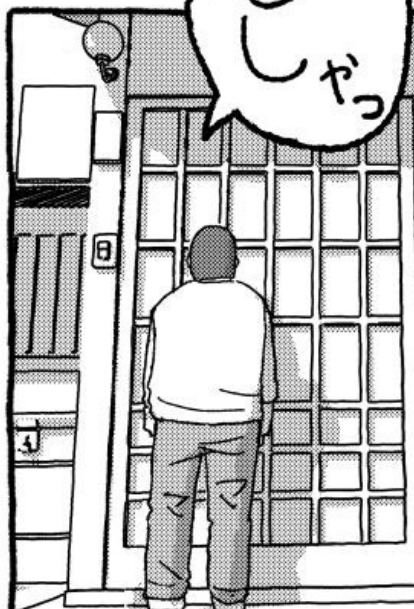


「降りだしたらもう手遅れですよ!」「知らんよそんなこと」「そんな、家族じゃ…」「家族? 勘弁してくれ」「えっ」「私は管理を任されているだけだ」



「……同様にお前があれに何をしようとして私は関知せんよ」
網野はそれだけ言って、
玄関戸を閉じた。

ひしゃっ



呆然とする橘はやと。
告げられた事実自体は
最悪のものだった。
にも拘わらず網野の応答は
事務的でくえんへの気遣いも
微塵もないようだった。

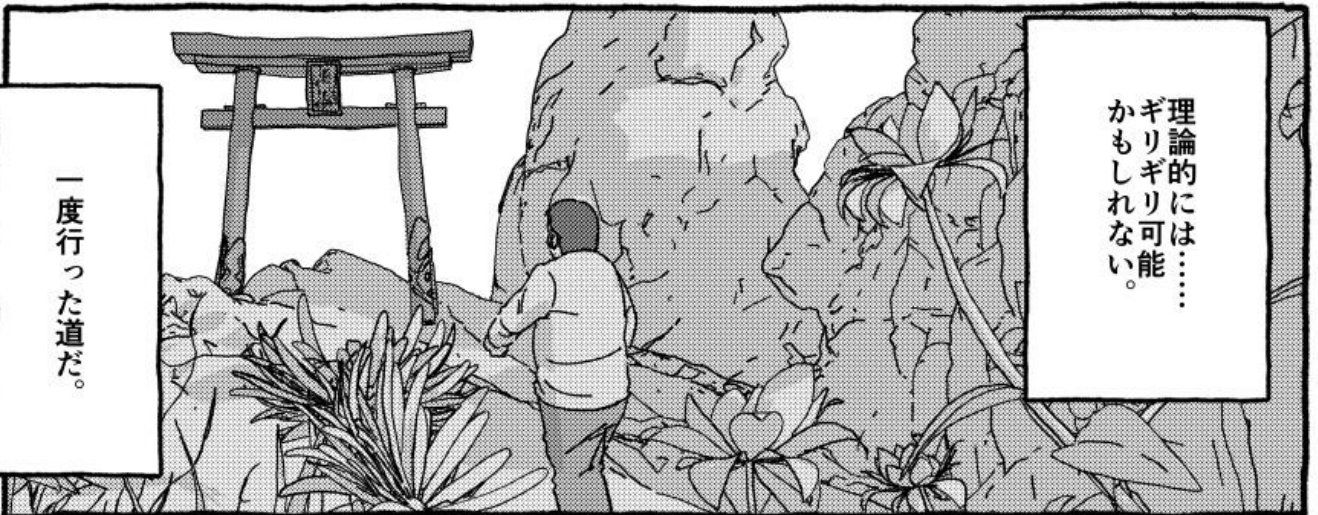
しかし、
最後の一言が浮いていたように
思える。前は、もう近寄るな
などと言ったはずなのに何故？
けれどそれを考える猶予はない。
既に橘はやとの足は動いていた。

歩きながら計算する。
あの家まで行つて、非常に
まずい台風が来ていることを
伝え、一緒に安全なところに
避難する……。それを雨が
降り出す前に完遂することは
可能だろうか。

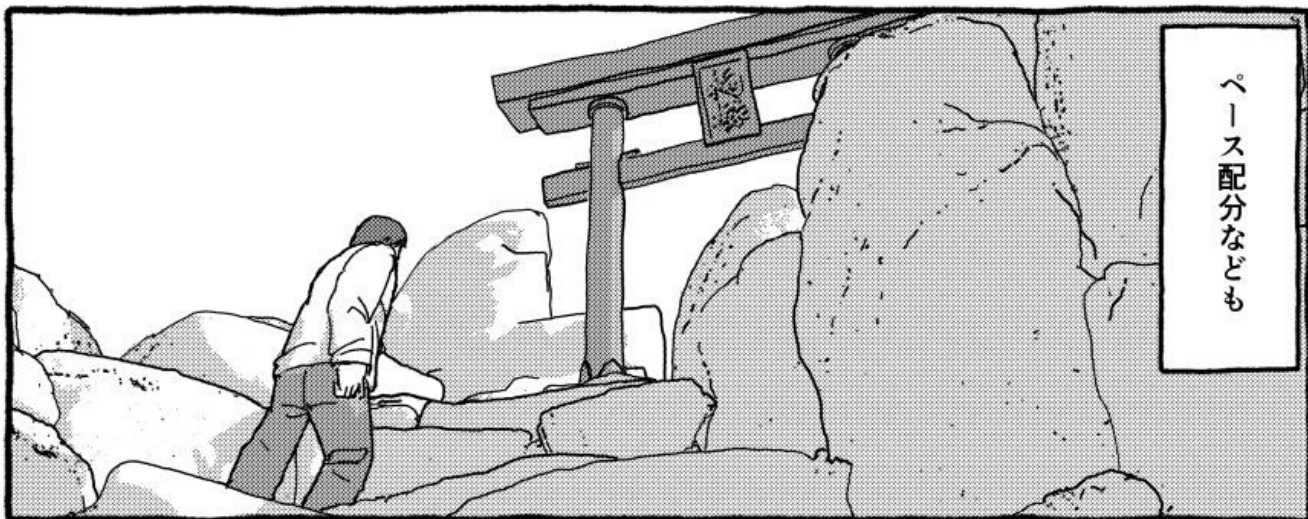


理論的には……
ギリギリ可能
かもしれない。

一度行った道だ。



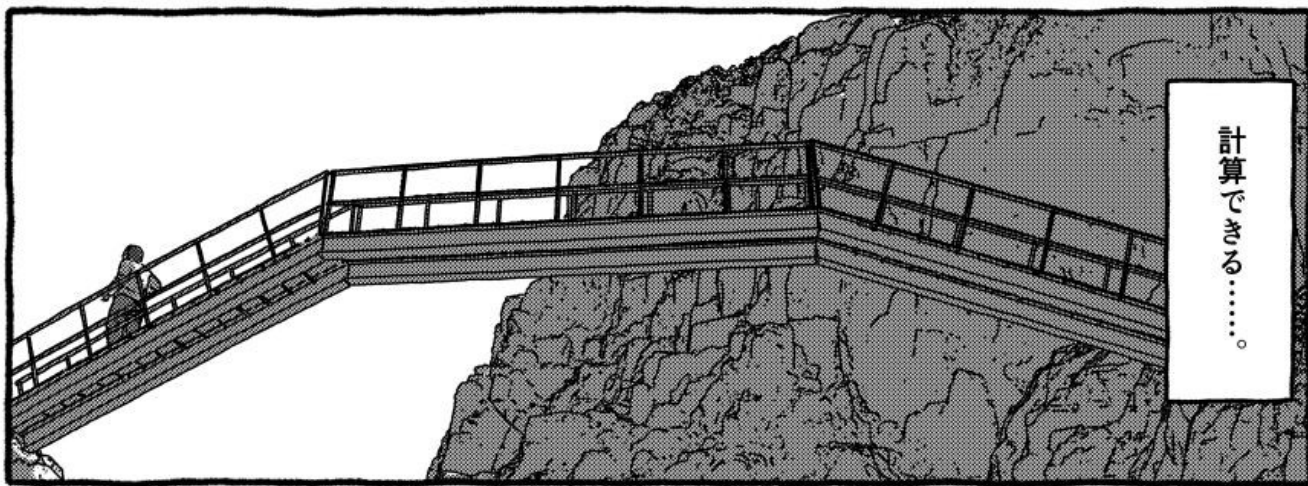
ペース配分なども



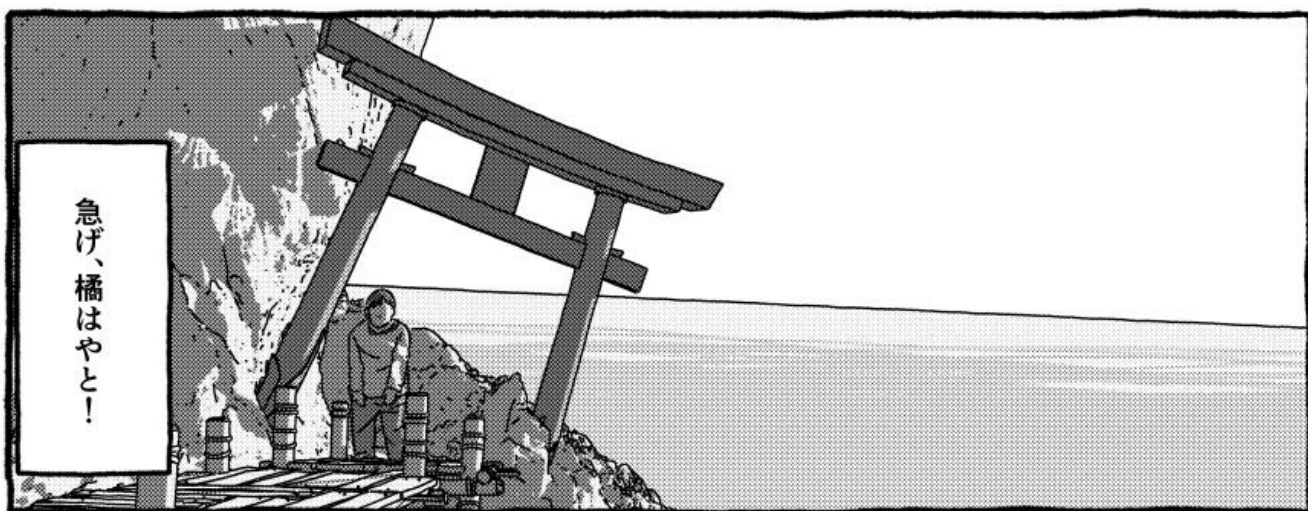
今回は予め



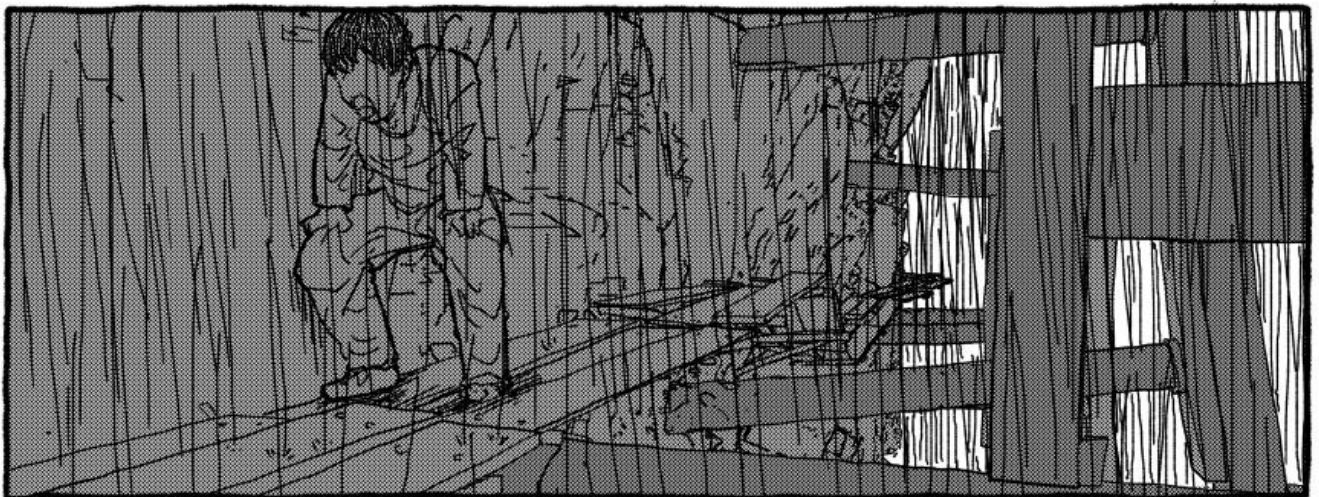
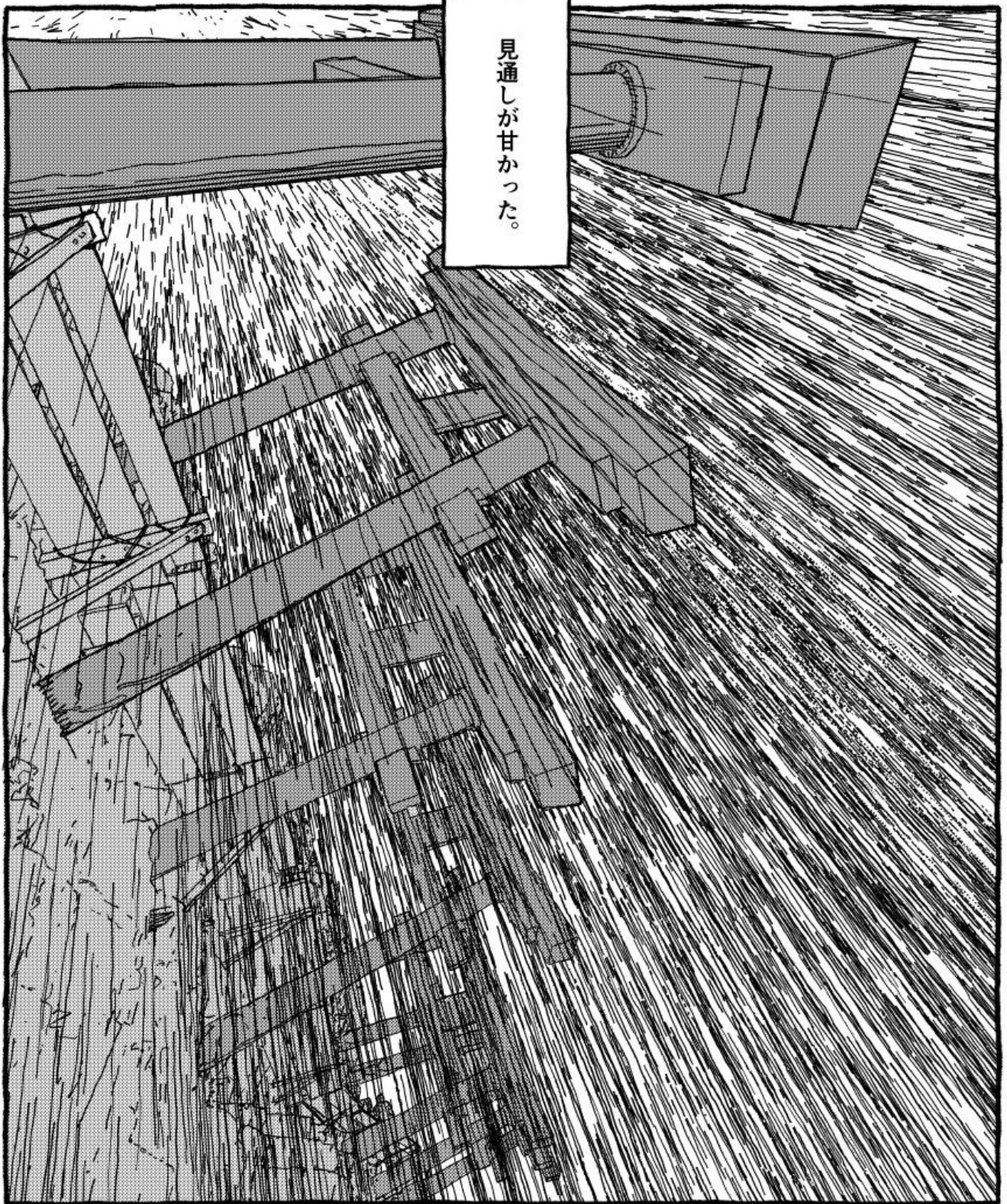
計算できる……。



急げ、橋はやと！



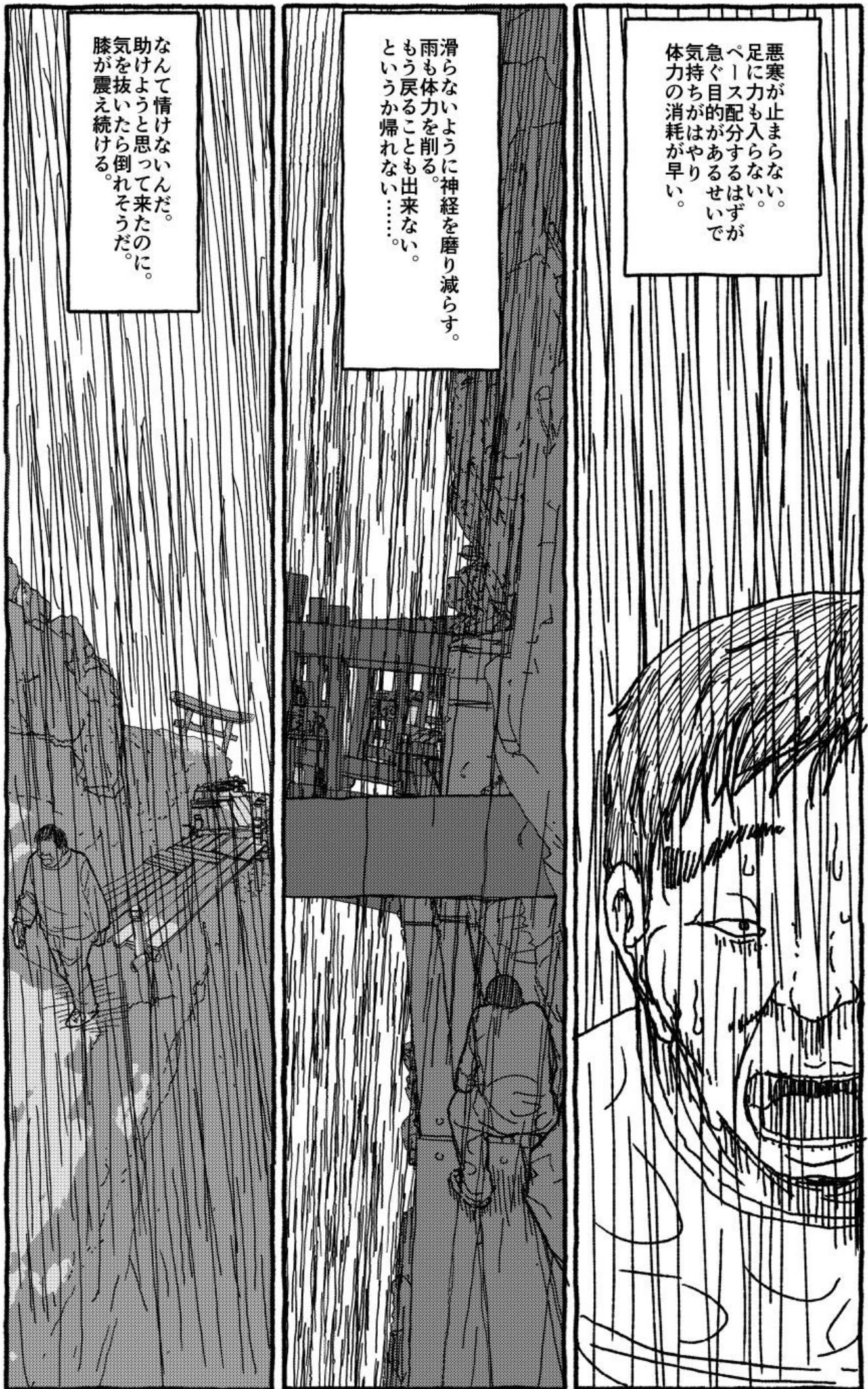
見通しが甘かった。

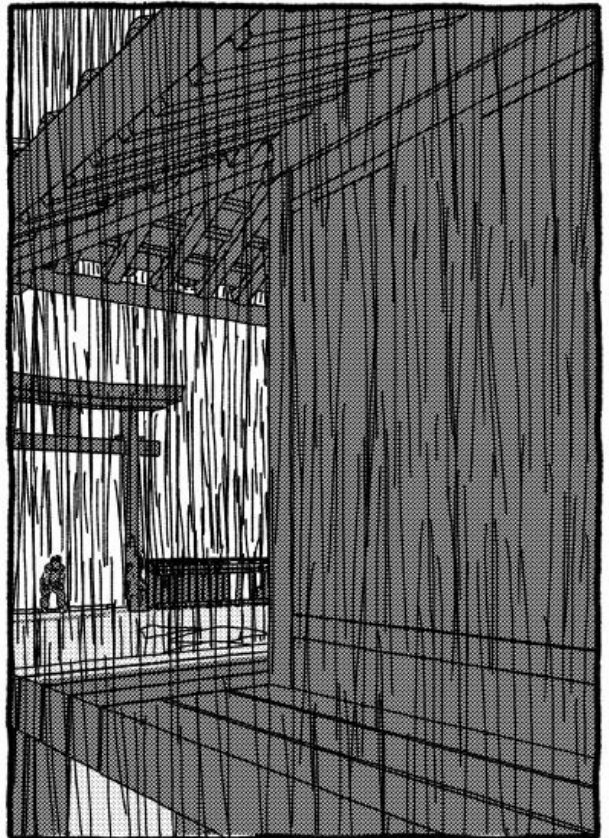
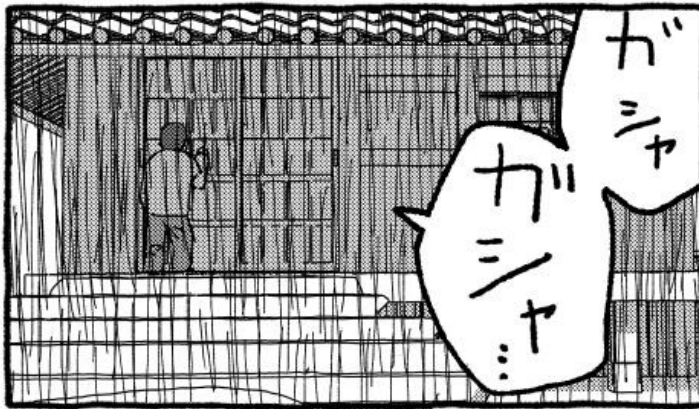
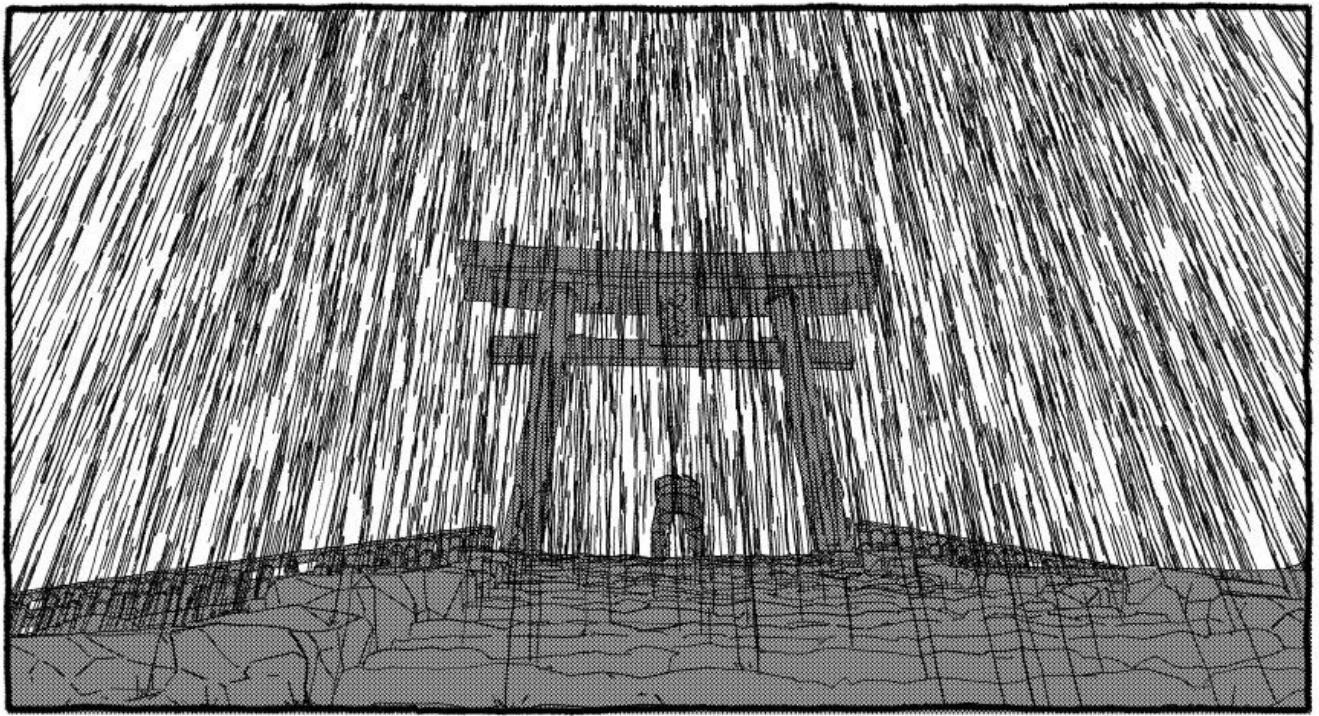


悪寒が止まらない。
足に力も入らない。
ペース配分するはずが
急ぐ目的があるせいで
気持ちはやり
体力の消耗が早い。

滑らないように神経を磨り減らす。
雨も体力を削る。
もう戻ることもない。
というか帰れない……。

なんて情けないんだ。
助けようと思って来たのに。
膝が震え続ける。



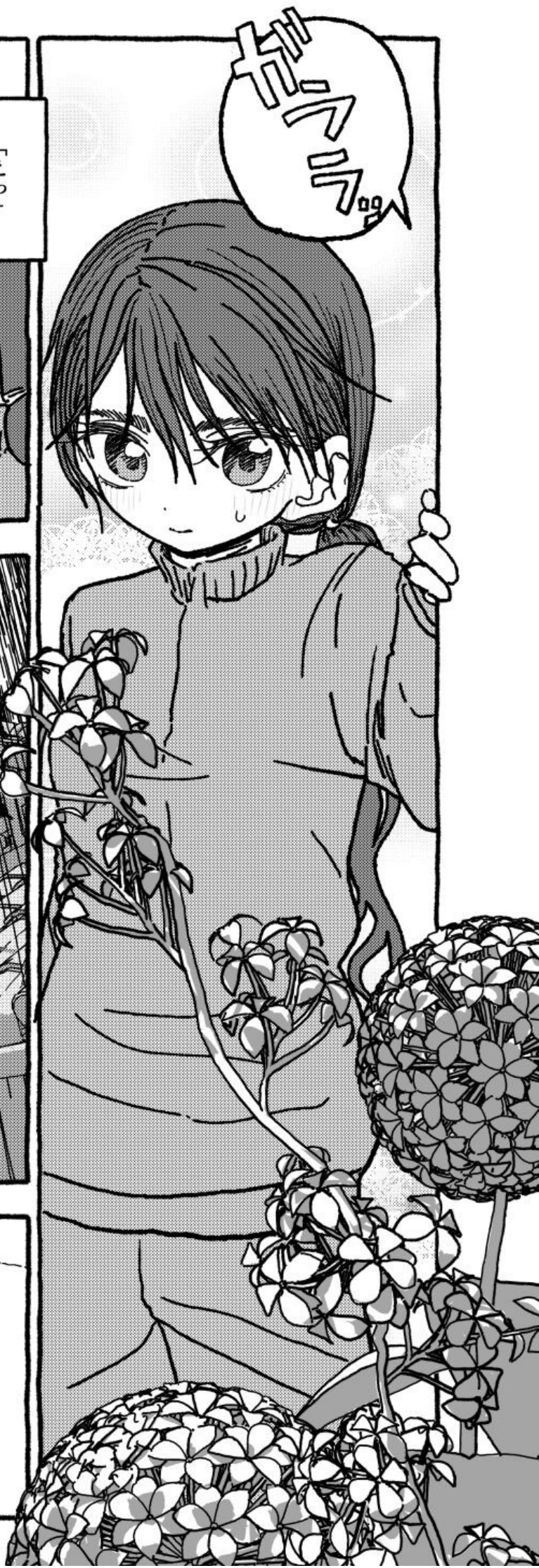




「えっ」



「ど、どうして……？
この雨の中を来たの？」
「すみません……」
「軒を貸して頂けると……」
「びしょびしょやないの、
とりあえずはよう入りっ」
「はい……」



「なんで……」



「やっぱりこの雨台風なんじゃねえ……
って、やったらそんな時になんで来たん！」
「避難……したほうが……いいと思って、
伝えようと思って……もう……遅いけど……
……ごめん……」



「超でっかい台風が……
これから来る……」



「避難……う、ってうちのこと？」
と聞くくえんの言葉は、しかし既にほとんど
橋はやとには聞こえていなかった。
朦朧とする意識と狭まる視界の中で
伝えるべきことだけをせめて伝えてしまわ
なければとしどろもどろに口を動かした。

「夢かもしれないと思ったけど、
でも本当にいたと思って。理由は
わからないけど。本当にいた……。
だってここに一人でいるんだろ……。
心配で……」

「うちを心……配……。してくれたの？
……それでまた……。ここまで来たの？」

「あっ……」

がく、









「目……覚めた？」

「あの……これは……」

「服はびしょびしょじゃったけ、洗濯したけん。乾燥機あるけん、乾いてるよ」

「あ、着ます」
「ダメ」
「えっ」



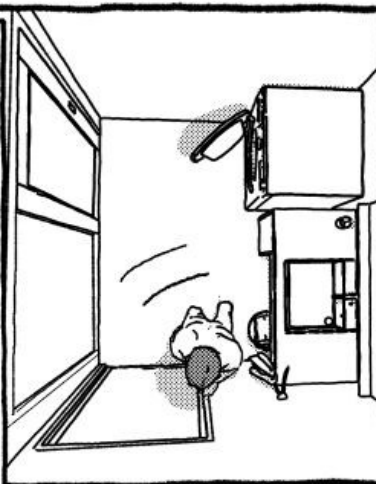
「君の着れるもの、ここにはこれ一着しかないんじゃけ。お風呂入ってから着なさい。今沸かしとるけん。あと麓には連絡しておいたけん、家の人にもここにおることは伝わつとるけん安心しないね。お腹すいとるよね？ お風呂の後でご飯にしようね。あ、沸いたけん、入らない」「あ、はい……」



心配なのは土砂崩れだ、その危険性のない場所があればこの雨の中を押しても移動する利点もあるが、しかし記憶の中のこの場所の立地から考えるに、もう少ない時間の中、移動できる範囲で安全な場所がないだろう。じつとやり過ぎすしかなない。



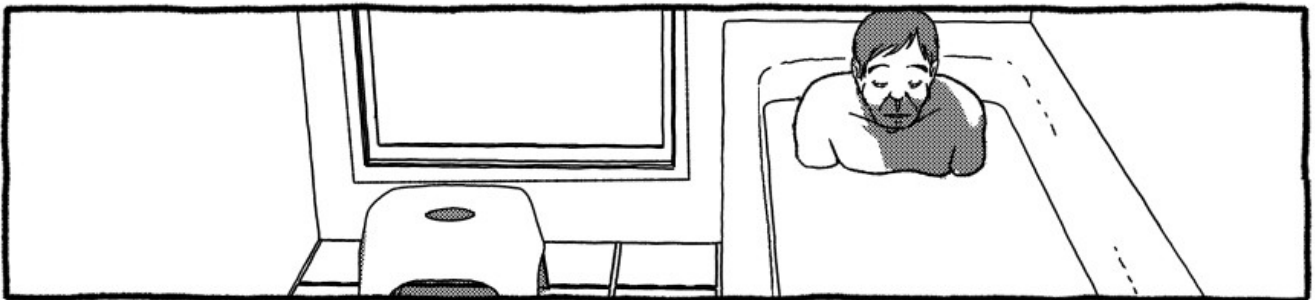
促されるままタオルで股間を隠し洗面所へ。冷静に状況を整理しつつ、言われた通りにとにかく入浴を済ませようと思う橋はやと。三時間経っているらしい。外からは風雨の音がしているが、じゃあ最大の暴風域は今正にというくらいか。



情けない気持ちになる橘はやと。
結局迷惑をかけたただだ。
にしても……くえんという存在は
やはり、いたのだ。そして改めて
見ると記憶の中のそれよりも
ずっと愛らしく、
すっごく綺麗なお姫様みたい。
倒れる寸前に抱きかかえられて
すごくいい匂いもした。

というか、服を全部脱がされたのか……
全部見られたのか、という事実を今一度
思い返し羞恥と共に苛烈に勃起して
しまう橘はやと。
抜いてしまった方が良いか……？

と考えるがこの清らかな空間、
突然上がり込んだあんなに綺麗な子の
お家でおもむろに精液を放出するなどの、
あまりに穢らわしく恐れ多い感じがして、
それを考えると別個の問題として更に
ちんちんは激烈に勃起してしまっただが、
なんとか我慢した。



風呂から上がると
入れ替わりにくえんが入った。

はたん

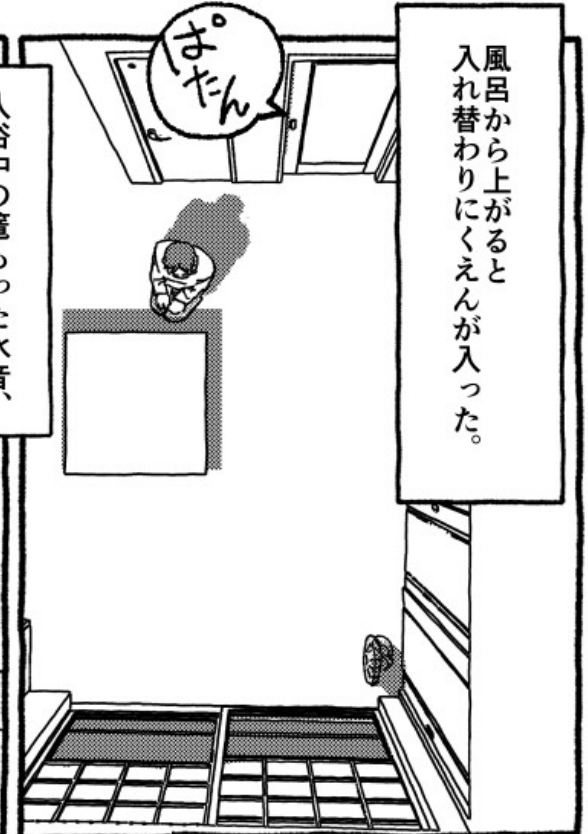
入浴中の籠もった水音、
物音にその裸の諸動作、
一つ一つを想像して
しまいちんちんが限界
寸前の橘はやと。

かぼん

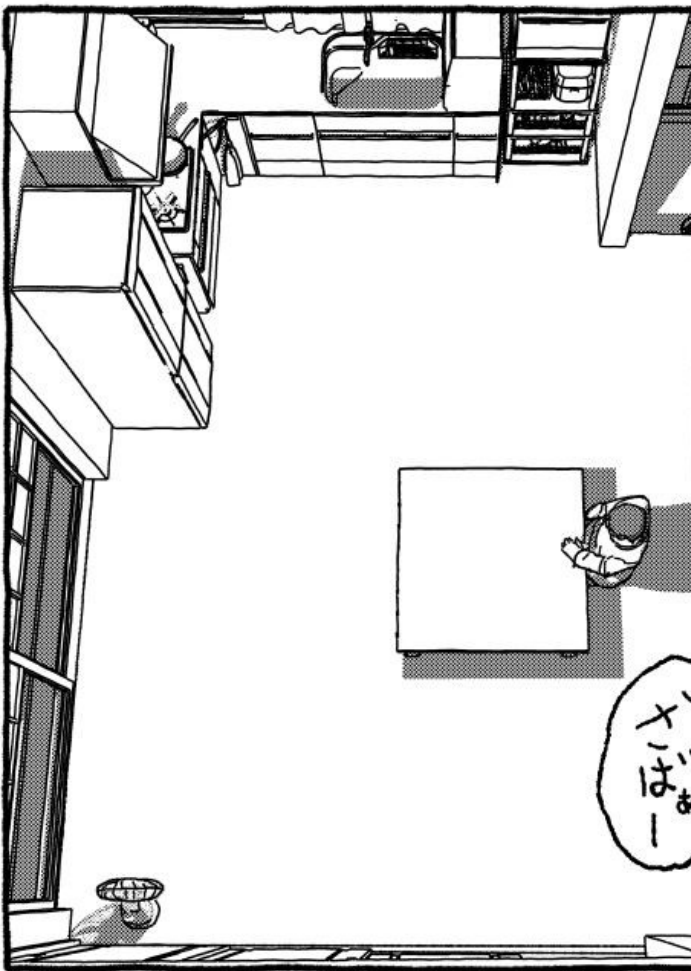
ぎばあ

ぽん

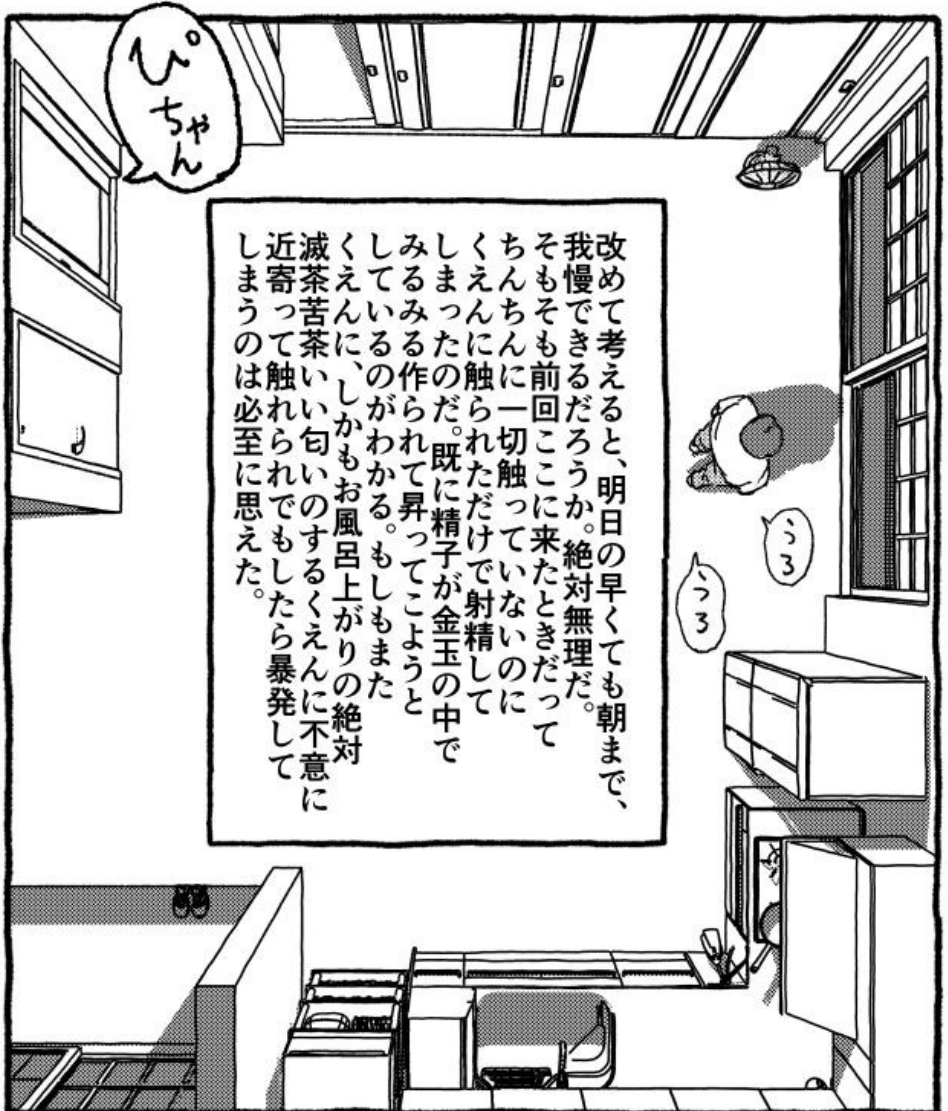
しん



この後のことを考える。
どう考えても晴れるまでここから
出ることはできない。どれだけ
早くとも明日の朝まではこの家で
くえんと二人きりなのだ。
襲ってしまわないだろうか？
自分は……
そもそも記憶の中のくえんで
家で何度もシコりにシコっている。
短い期間で二〇回以上射精した。
想像であんなことやこんなことを
やりをやった。こんな気持ちになる
女の子は初めてだった。
今まで色んなオカズで自慰を行い
射精してきた。特定の誰かに
ここまで執着することは橘はやとの
人生において未だなかったのだ。



「ヤハッ
ー」

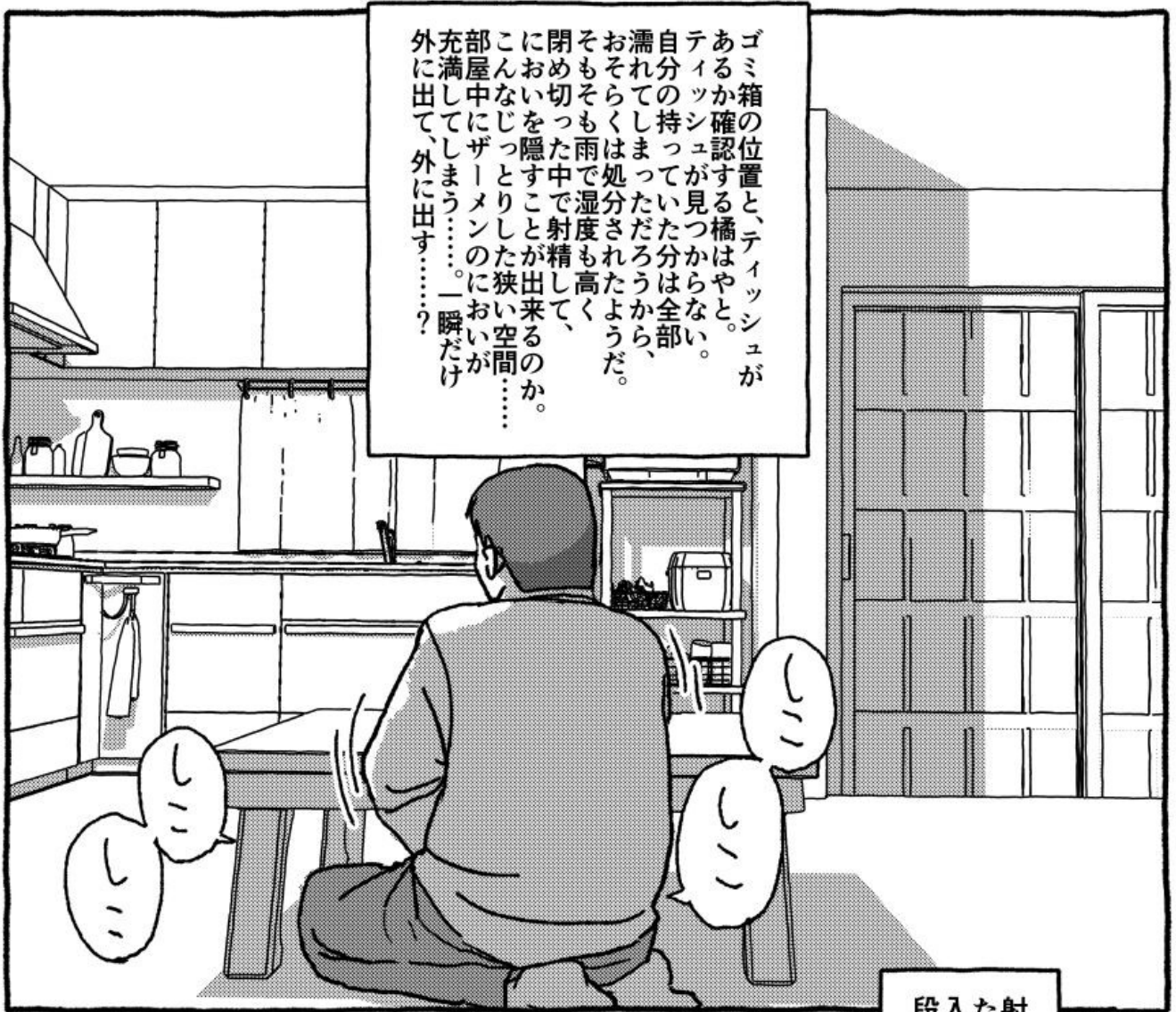


改めて考えると、明日の早くても朝まで、
我慢できるだろうか。絶対無理だ。
そもそも前回ここに来たときだって
ちんちんに一切触っていないのに
くえんに触られただけで射精して
しまったのだ。既に精子が金玉の中で
みるみる作られて昇ってこようと
しているのがわかる。もしもまた
くえんに、しかもお風呂上がり、絶対
減茶苦茶いい匂いのするくえんに不意に
近寄って触れられでもしたら暴発して
しまうのは必至に思えた。



それは避けたい……。
「抜いておこう……」
「今しかチャンスはない……」

ゴミ箱の位置と、ティッシュがあるか確認する橋はやと。ティッシュが見つからない。自分の持っていた分は全部、濡れてしまっただろうから、おそらくは処分されたようだ。そもそも雨で湿度も高く、閉め切った中で射精して、においを隠すことが出来るのか。こんなじつとりした狭い空間……部屋中にザーメンのにおいが充満してしまう……。一瞬だけ外に出て、外に出す……？

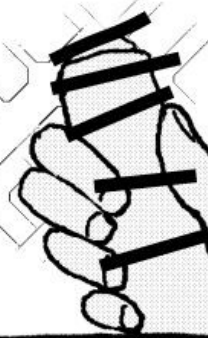


射精するという決断自体はしてしまっただけに、既にちんちん及び陰嚢は射精モードに入り途中止めに、関係しては受け付けていない段階に移行している。



外だ、戸を開けて外で出そう。しかし問題が一つ……。このままくえんちゃんをオカズに射精するべきか。あまりにも情けなく汚らわしい所業ではないのか、そんなことをしてこの後、せらんと冷静に顔を合わせられるのか。

という思索と焦りの中での自慰行為に周りの状況などは全く見えていない橋はやと。とにかく別の女の子……好きなアイドルとか思い浮かべよう……。よし、くえんちゃんの姿を掻き消すんだ……。ちんちんを弄りながら慎重に作戦を遂行する橋はやと。

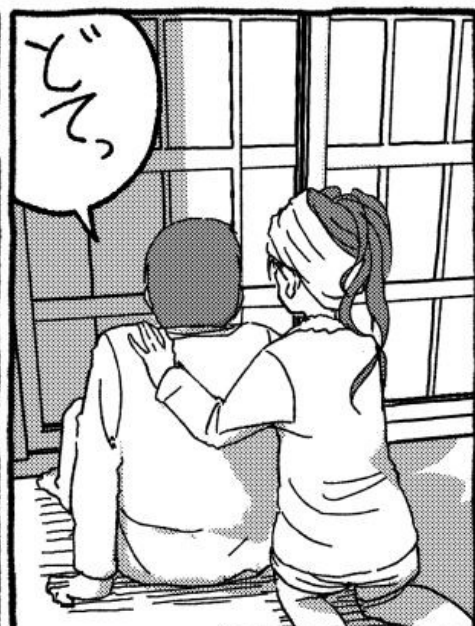




「い……今だ……っ」
「いげんっ、何しよるの！」
しかし突然後ろから身体を掴まれ
綿密な計画は水泡に帰す橘はやと。



よし、
射精まであと20秒といったところ……
そろそろ立ち上がり玄関を開けよう、
風の方向から吹き込む。
開けると濡れずに精液だけ雨の中に
玄関なら濡れずに精液だけ雨の中に
ビューッと放出してサッと戻ることも
不可能ではない……かもしれない……
服は多少濡れるだろうが、
一瞬だけなら……肝要なのは
くえんちゃん顔や姿や声を
思い浮かべないことだ。
それだけで射精が10秒は早まる。

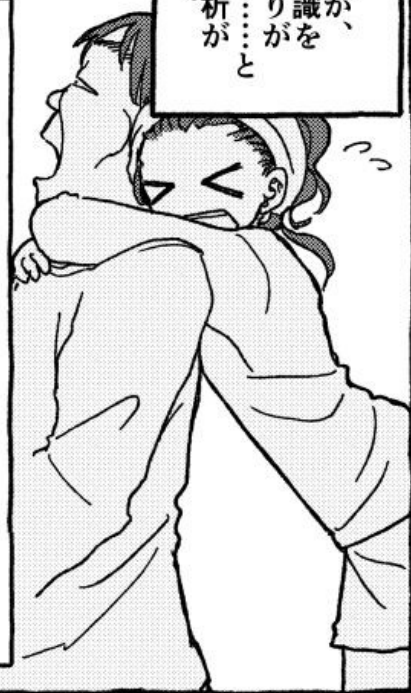


いや、そうじゃなく、と
尚も抵抗するが尻餅を
ついてしまう橘はやと。
まだ立ち上がろうと
するも肩をしっかり
抑えられ、射精寸前の
ため力負けし、もはや
腰に力の入らない
橘はやと。



「帰るんは無理よ、今日は泊まりないって」

何が起きたか
一瞬理解できなかつたが、
あまりに射精計画に意識を
持たずにいなかっただけで
見えていた冷静的な分析が
諦念にも似た冷静な分析が
頭を駆け巡る橘はやと。



「お願いじゃけ
一緒にあってよお」

「うち、こがいなまでの
風の音はほんまに
初めてなんじゃわ」

「ね？」

あまりの愛らしい声と
いい匂いに心臓が
きゅってなる橘はやと。

同時に射精する
橘はやと。



ひゅっ!!
ひゅっ!!

び

「なして？」

そうも直截に理由を尋ねられると
言い訳とか釈明とか云々の前に
どう説明したらいいものかと。
自分でもわからない橘はやと。
しかし、結局もう「から全部
時系列順に丁寧に白状して
しまうこととなったのは、
くえんが不安そうな顔でこう
続けたからだった。

「じっ
と」

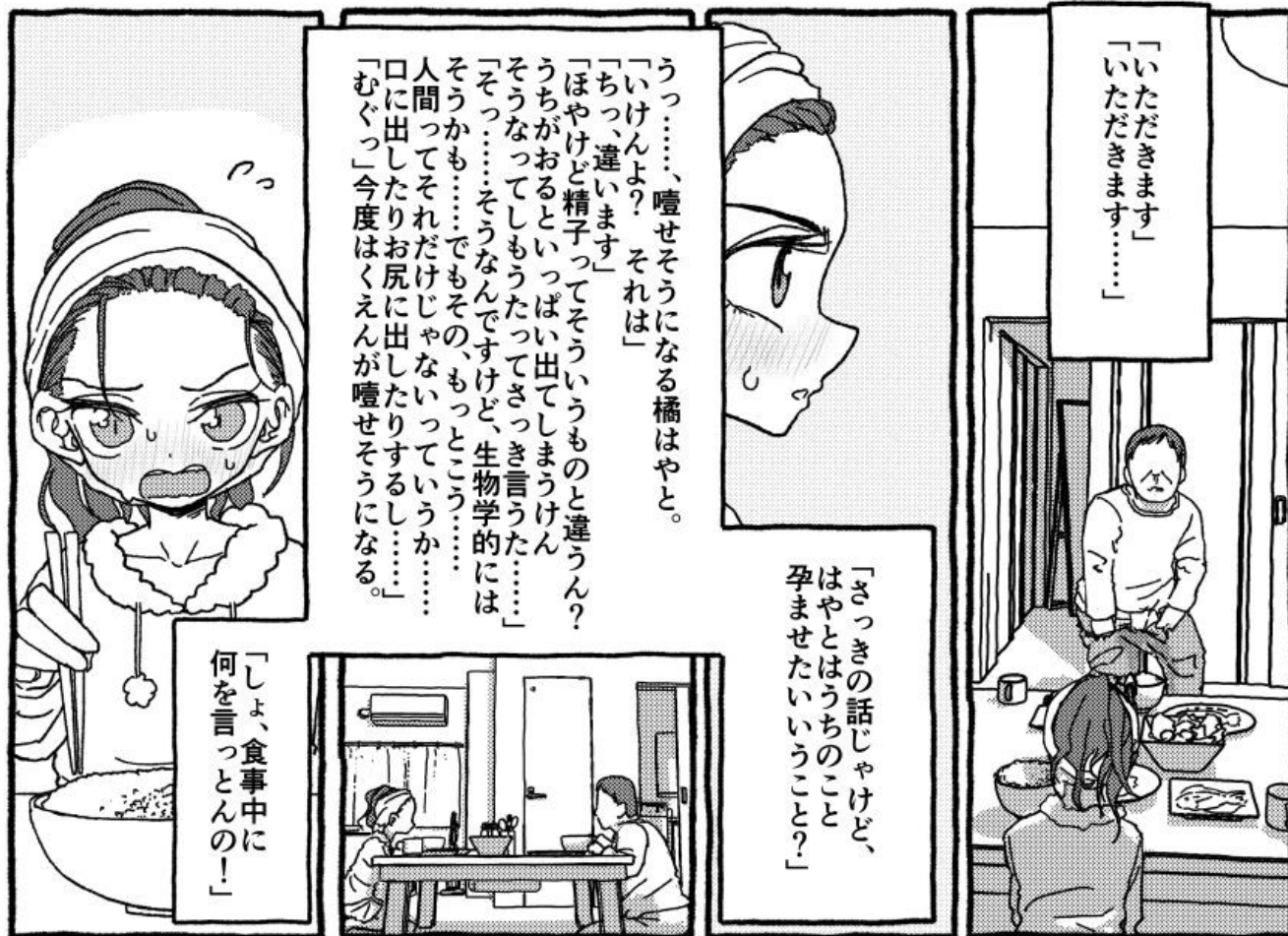
「うちが何か
してしもたん
じゃろかあ……」

かくかくしかじか

くえんがあまりに美しいので
前に一目見たときからあなたで
自分を慰めていたのです。そして
また実際に会えてしまい、懸命に
堪えていたのですが、やはり、
辛抱溜まらずしかしめて、
見えないところで処理して
しまおうとしたところ、ごさいます。
時間をかけてしどろもどろに喋る
橘はやと。
部屋には既に精液のにおいが濃厚に
充満してしまっていた。

「なしてお手洗いで
せんかったん？」

トイレ……!!
橘はやとに
雷が打たれたような
衝撃が走る。



食洗機に食器をセツトするくえん。

カチャ

じゃー

トイレに行くくえん。

いーくら

来客用兼スベアの歯ブラシを渡すくえん。

「お話しよ。眠くなるまで」
「はっ、はい」
歯磨きを終えてくえんの提案。そんなことしたら尚更ギンギンになりそうだが、反射的に快諾する橘はやと。

お話、といってもそもそも二人とも互いに何も知らない。必然、互い違いに質疑応答のような質問の応酬に。



「あ、そっか……橘はやとっていいいます……」
君はその……くえんさんでいいんでしょうか？ 苗字とかって……？」

「くえんでいいよ。苗字はないんよ」
「そうなんだ……ずっとここに一人でいるの？」

「そうなんだ……寂しくないの？」
「……君が来なかったら、今日は寂しかったかしれんね」

「そ……そっか……よかった」
「ん。……」

「……最初に来たとき家の裏耕してなかった？」
「いろいろね、暇じゃけ新しく野菜でも育てよか
思うたんじゃけど今日の雨風でダメかもしれんねえ」

「ああいう耕運機とか、ここの家電とか……」
結構新しいけどこれって……」

「電話すれば欲しいものは送ってくれるけん。
食糧とかガスも、月一くらいでヘリでまとめてね。

食糧は業務用冷凍庫に入れとるけど、
なるべく使わんでお米以外は基本的には緊急用じゃね。

鶏がおるし、魚も釣れるし、山菜も採れるし、
山羊がその辺におるからたまにミルクももらえるよ。

罾で猪も捕れるけど、しんどいから減多にせんね。
水はよく出る井戸があるし電線が通つとるのは
来る途中にも見えたじゃろ？ 不便はしとらんね」

「そ……そうみたいだね……」
「ところで君は……彼女とかおるん？」
「あ……いないです……」



さて、二人してお布団に入るも
ドキドキし過ぎて眠れない橘はやと。

「眠れんの？ ちょっと寝たもんね」
「あ、いや、まあ、そういうわけでも、
気にしないで……」

「うちもおんなじ……」とくえん。
とは言いつつも、くえんは恐らく
暴風雨と雷、家鳴り、或いは土石流が
起きないかと、この台風で
眠れないのだろう。

「ねえ……橘くん？」
くえんがぼつりと呟く。

「想像でうちと
どんなことした？」

「そっそれは……ちょっと」
「言うて？ ダメなん？」
「どうやらくえんは、
はやとがくえんで
しこっているという話に
興味津々のよう。」
「だ……だって
恥ずかしいし……くえんも
聞いたら気持ち悪いと
思うようなことだし……」

「じゃあ、うちが具体的に
言うけん、それをしたか
してないか教えて？」
「えっ」

「これじゃったら、うちが想像も
せんようなことは出てこんよ、
逆にあんまり変なこと聞いたら
うちが恥ずかしいだけじゃけん」
「……た……確かに」
感心する橘はやと。



「キス、した？」

「う……えっと……はい……しっ……しました」

「……いっぱいした？」

「……し……しました、はい」

「じゃあ、えっと……それはちゃんと口と口のキス？」

「う……うん……」

「それって、大人の……？」

「お……おとなの……？」

「じゃ……じゃけ、舌を、その、舌と舌で、するやつを、した？」

「はい……」

「気持ちよかった？」

「はい……」

「……ほ、ほか……ええと……じゃあ……じゃあ、やっぱり、ええと、その、そりゃ、うちと、性交、したんよね？ 性交渉」

「……は、はい」

「精子、うちの中に出した？ 子作りした？」

「あ、えっと……避妊具に……」

「そ……想像なの……？」

「う……うん……」

「想像の中で……避妊具に精子出したん？ さっきみたいにびゅーって」

「う……ん」

「……」

「……」

「……」

「……」

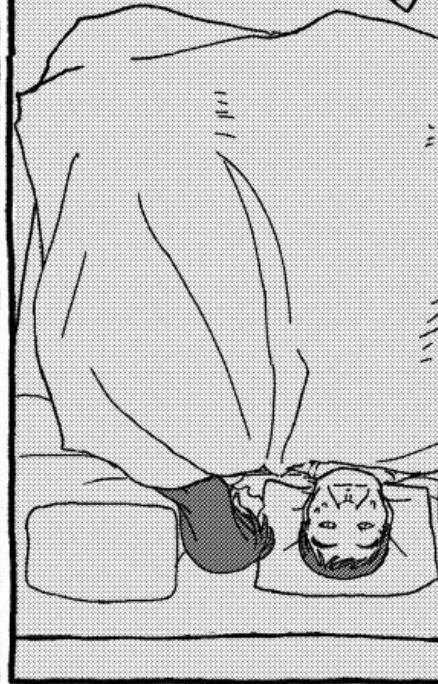
「……」

「……」

「……」

「……」

「……」



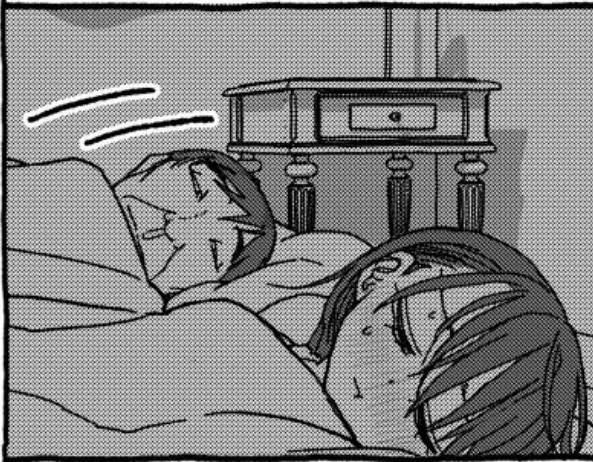
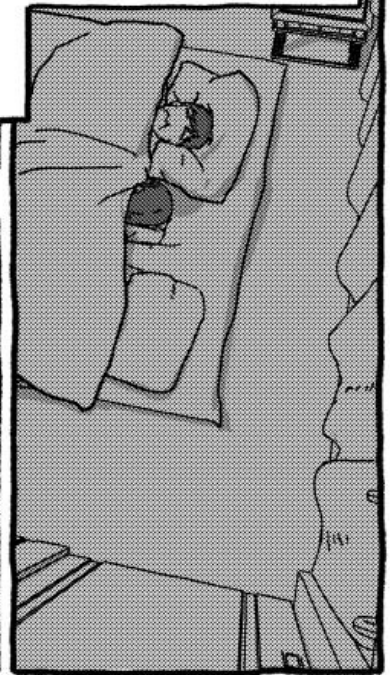
「あつ、そういう意味じゃなくて、ほら、来る道危ないけん……。それに、うちとあんまり、関わらん方がいんよ、わかるじゃろ？」
焦った口調で誤解を解くえん。
ほっと胸をなで下ろす橘はやと。関わない方がいいというのもしっかりにそうなのだろうとは、なんとなく思う。

しかし、こんなところに女の子が一人で住んでいるのを知って、麓でぬくぬく暮らすというの悪いことか思えた。

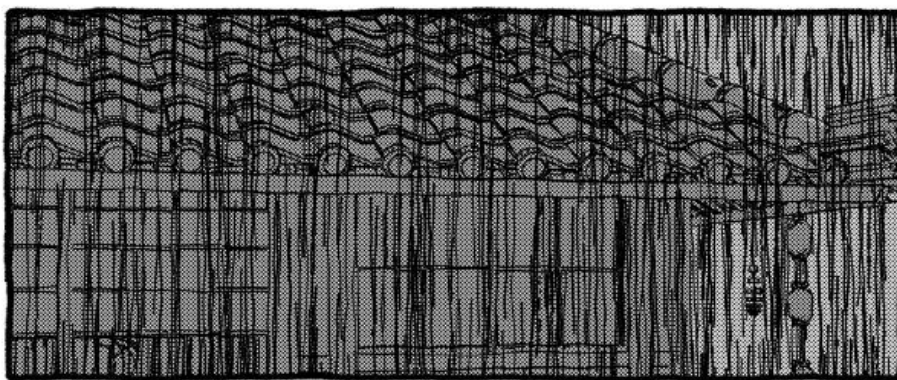


「したいっ！」

「降りて下で暮らすことは出来ないの？」
「できんこともないけど……」
「じゃ、じゃあそうしようよ、なんでも手伝うから。僕に出来ることだったら……」
「……」
しばし懊悩するように黙り込むえん、意を決したように口を開き、小声で問う。
「……うちと結婚しとないじゃろ？」



「ド迫力の即答にたじろぐえん。」「いけんよそんなにすぐ決めたら、……色々あるんじゃけ」
「天狗の隠れ蓑の話とか……？」
「そういう話聞いたけど」
「それも知っとるん……」
「ほうか……、知って言うとるんじゃね……」



そしてくえんはふにやふにやの口調で言って、眠りに落ちた。
「じゃあ明日、」
もらいにいこうね……」
橘はやととも性器こそ完全に勃起したままでは今射精するわけにはいかない……！と必死に意識を落ち着け、眠った。



目を覚ますと昨夜眠ったのと同じ場所。ひとまず安堵するが昨夜までの轟音が嘘のように静かな朝で、また何か夢を見ているんじゃないかと思う橘はやと。



姿を見つけて、安堵より何より胸が締め付けられるような性欲が襲ってきた。



くえんはどこだろう。居た痕跡はある。

嵐の後の清冽な風は彼女を纏ってとても優しく透き通り、ここで同じ空気を呼吸しているだけで射精感が込み上げてきそうだった。

咄嗟に股間を押さえる橘はやと。
しかしそもそも朝立ちしている
のに気づきアツと小さく声を
あげてしまい、くえんがこちらに
気付き、にっこり笑う。

「お」

「は」

「よう」



「晴れたねえ。よう眠れた？」

「う…うん
おはよう」

「ん。」

……と軽く言葉を交わした
のち、ぼおっと見惚れて
しばし見つめたまま硬直
してしまふ橘はやと。
くえんはきよとんと
首を傾げる。

「どしたん？」

そう問われても自分でもよく分からない。
見慣れるまで少し時間がかかるようだ。
くえんが下界に降りるには姿を隠す道具が
必要である意味が感覚で分かった。
他の誰かと結ばれることを想像すると
耐えられない。それは他の誰かが同じだろう。
そうこうしているうちにくえんはこちらに
歩いてきて縁側に上がった。

「麓に電話したんやけどねえ、道が落ちてしもうとるんじゃって。」

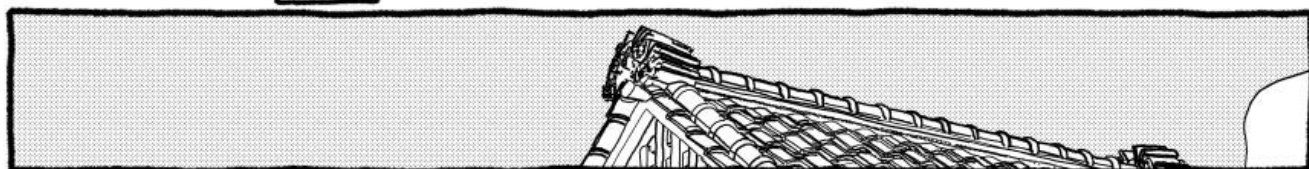
「う……うそ……」

「補修は相当かかるみたいじゃけど、はやとのことは網野さんが明日へりで迎えに来てくれる言うとるけ、安心し。」

「へりで!?」

「前回来たときもへりで帰ったんよ、気絶しとったけど。」

「そうだったのか……。」

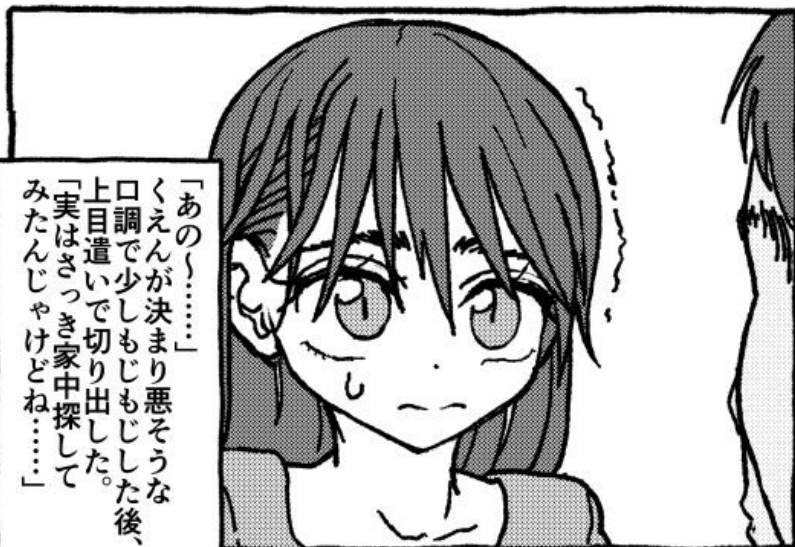
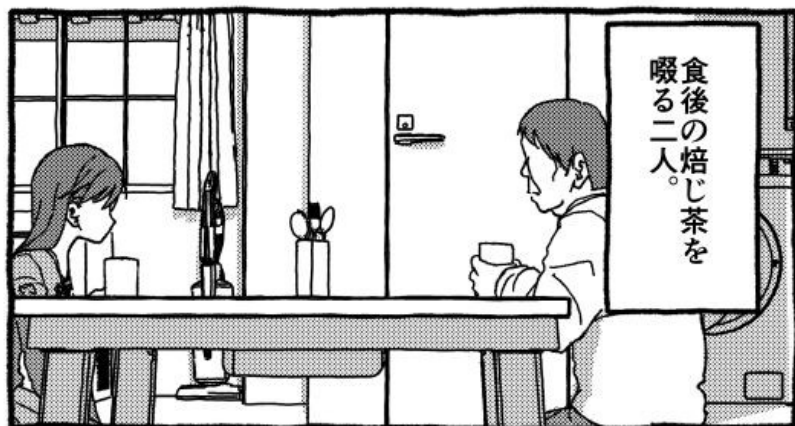


冷凍のパンを食べようか、というところで玄関のところにある業務用冷凍庫から取り出した5枚切りの食パンをトースターで焼いて食べる二人。定期的に送ってもらっているのは小麦粉やイーストやその他材料で、庭の奥に石窯があるので好きに加工しているらしい。

食後の焙じ茶を啜る二人。

これは昨日の朝に採った鶏卵。今朝は鶏の声が聞こえなかった。なので無事だろうかとかえんは心配している。

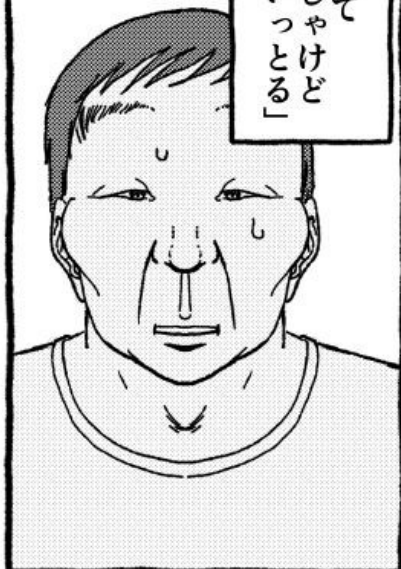
「あの……」
くえんが決まり悪そうな口調で少しもじもじした後、上目遣いで切り出した。
「実はさっき家中探してみたんじゃけどね……」



「こんこん おふだ 婚々の御札ねえ、
なくしとるわ……」



「なくさんように敢えて
本の葉にしとったんじゃけど
いつの間にかどっかいっとなる」



「最後に見たのは
いつじゃろ思ってたけど
2年くらい見とらんねえ」



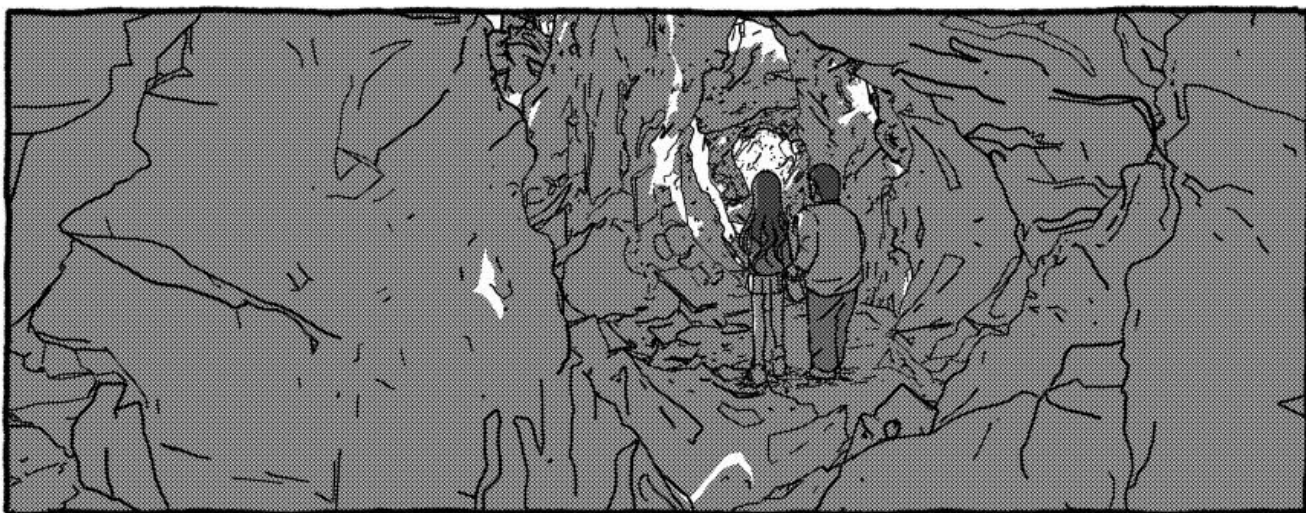
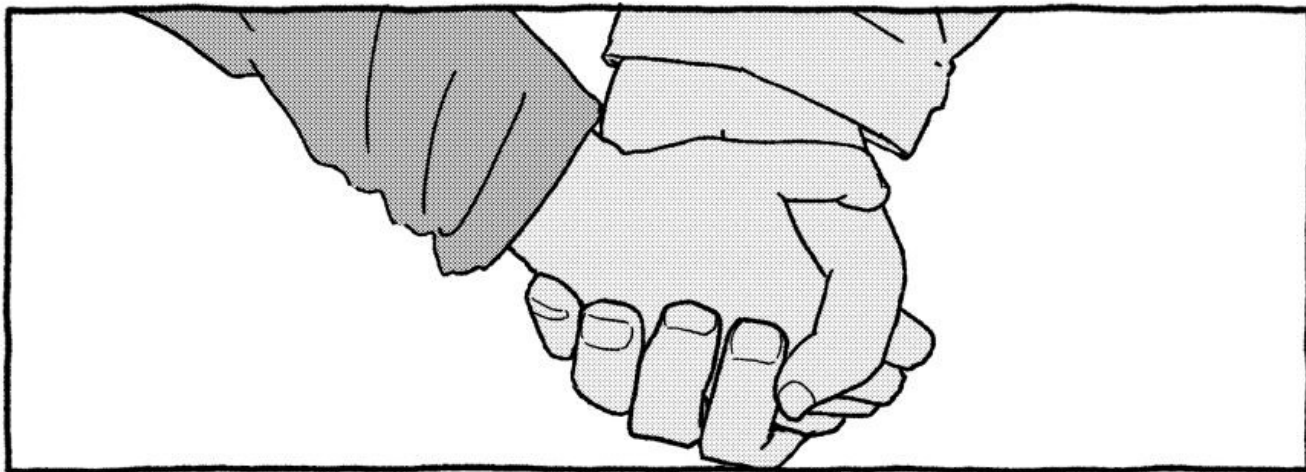
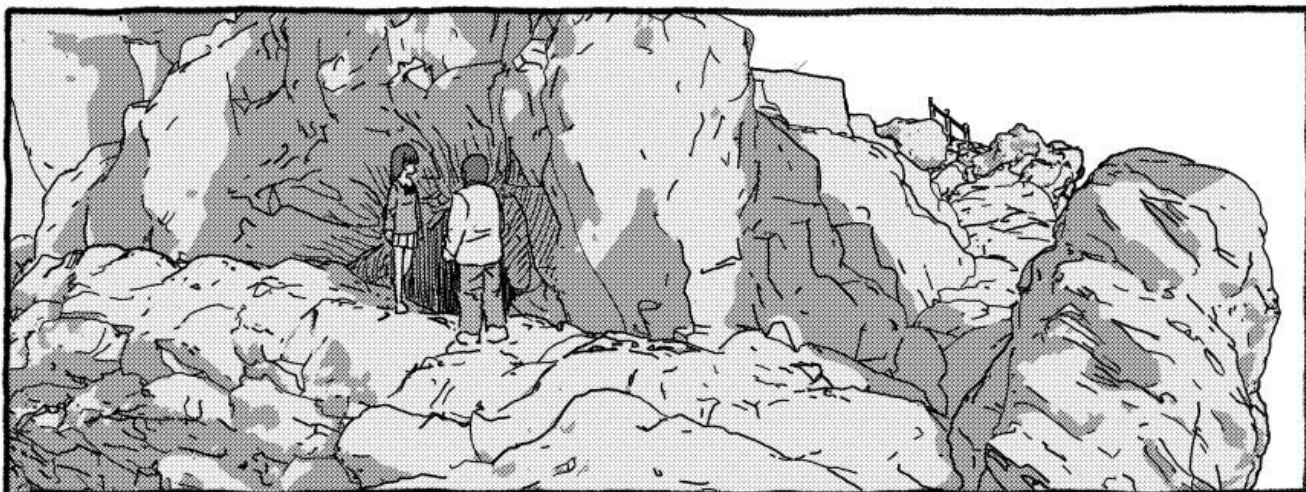
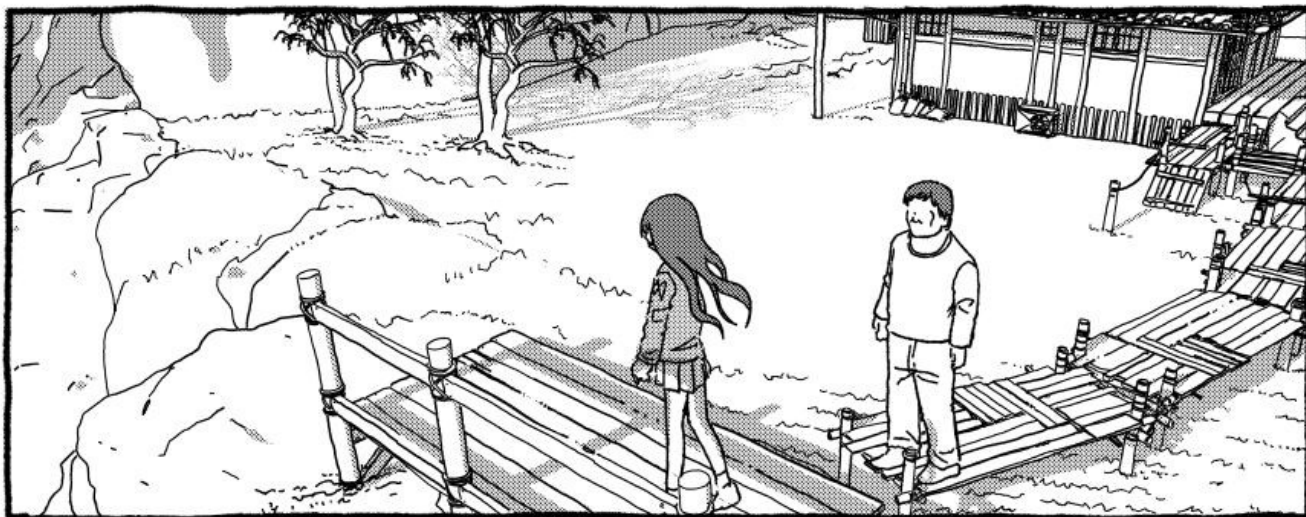
御札……確かそれと引き換えに貰える
姿を消すための道具がなければ
人里には降りられない……
その御札のことだろう。
なければ……もう一つ方法が
あったはずだ。記憶をたぐる橋はやと。

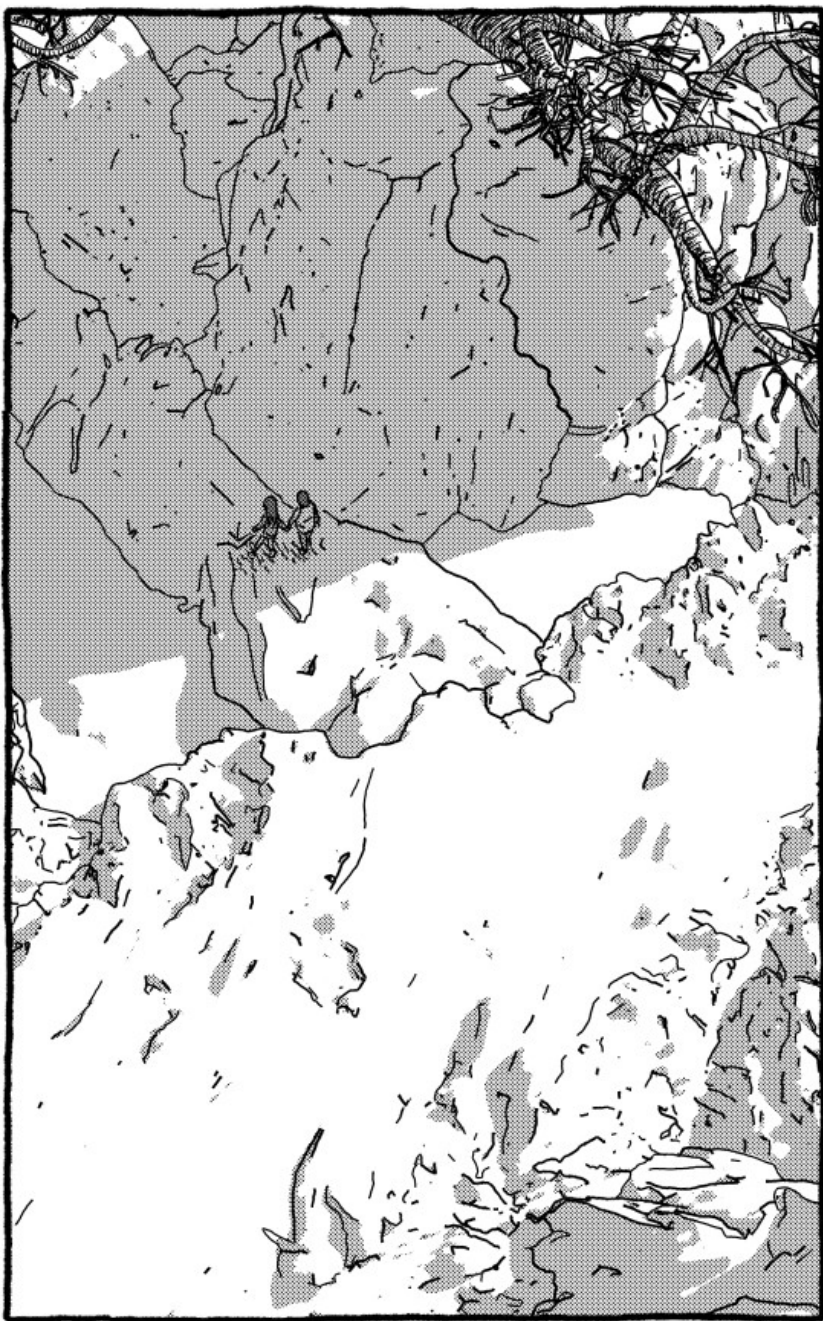
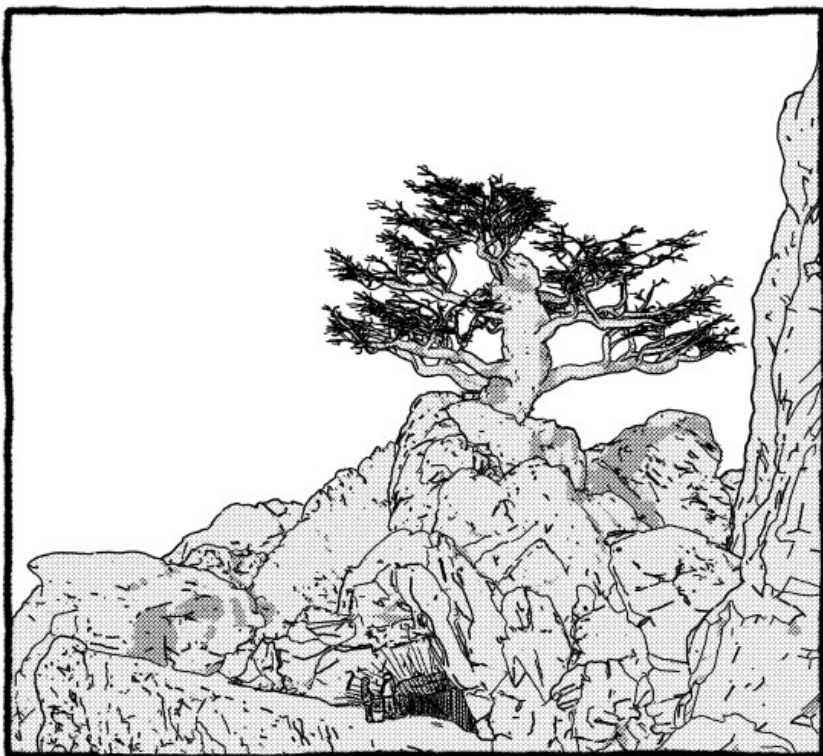
「……………確か御札を奉納？
するのが一つ目の方法で……」
「うん……もう一つ方法はあるん
じゃけど……知っとるんよね？」

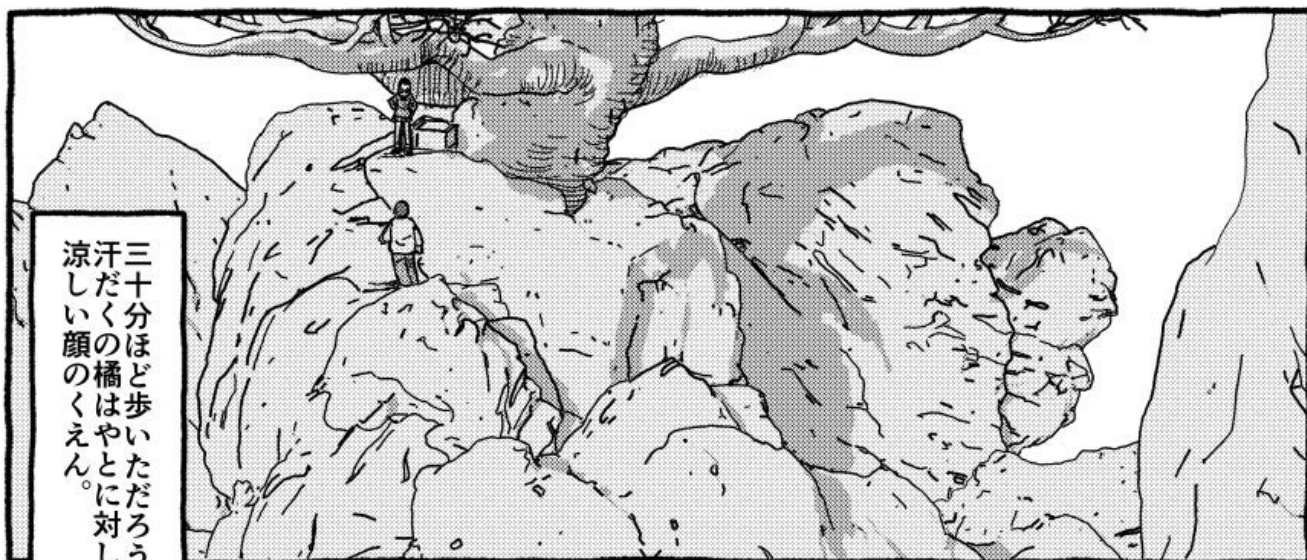


「同じ願い事をするんだっけ……？」
探り探り答えた橋はやとに、
ふむと何か考えるように軽く嘆息して
くえんは微笑んで言った。
「……まあ行ってみる？」
「え」

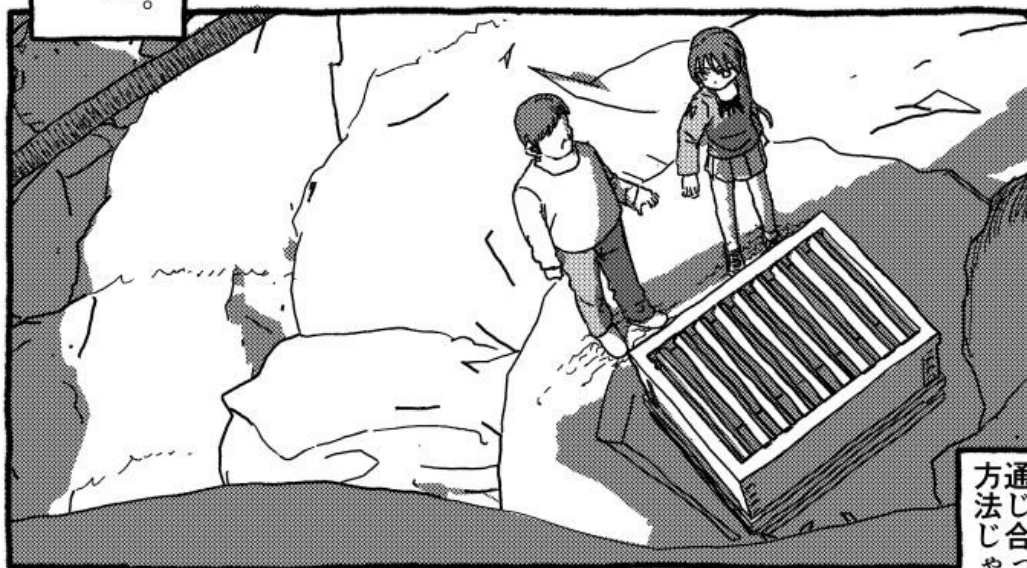








三十分ほど歩いただろうか。
汗だくの桶はやとに対して
涼しい顔のくえん。



大樹の下に賽銭箱のようなものがある。
「本来はここに
くえんの婚々の御札おふだを入れると
引き換えに天狗の隠れ蓑を
貰えるて聞いとるよ」

「もう一つの方法は……」
「二人の心がちゃんと
通じ合つとることを証明する
方法じゃね」



「手順も知つとるんよね？」
「えーと……確か」
「これから一緒に柏手二つ、
そのあと願ひ事をしてね。
二人の願ひっていることが
一言一句おんなじやったら
天狗の隠れ蓑を貰えるけん」



「一言一句……」改めて聞いてその条件の
シビアさに震える桶はやと。つまり……
ならばもちろん事前の打ち合わせなどは
NGなのだろう。文言もその前提でちゃんと
考えないと……



……などと考えているうちに横から柏手の音が聞こえてきてあまりにも焦る橘はやと。慌てて追従する。どうしてそんな急いで……とも思ったが条件的に少しでも会話したら打ち合わせになってしまいそうだから牽制したのかも。失格になっちゃ元も子もないし……



どうしよう。タイピングもあんまりズレたらまずいだろうし柏手を打って目を瞑ってしまったが正直何も考えていない。願いの事……本当に願っていることじゃなきゃ意味がなさそうだし、合わせにいつてもむしろ逆効果だろう……けれど例えば痩せたいとか明らかに自分にしか当てはまらないことは意味ないからまず排除して……願う自体は本当のこととで、文言をくえんのものでも自分のものでも不自然じゃないような普遍的なものにする程度には工夫して……

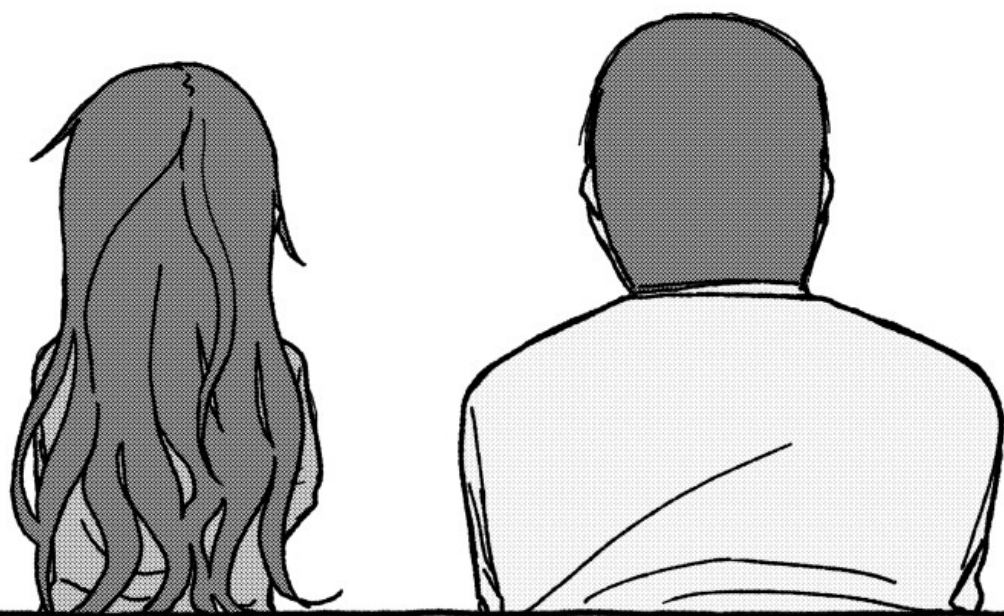


と考えていると横からごそごそしている音が聞こえてきて更に焦る橘はやと。



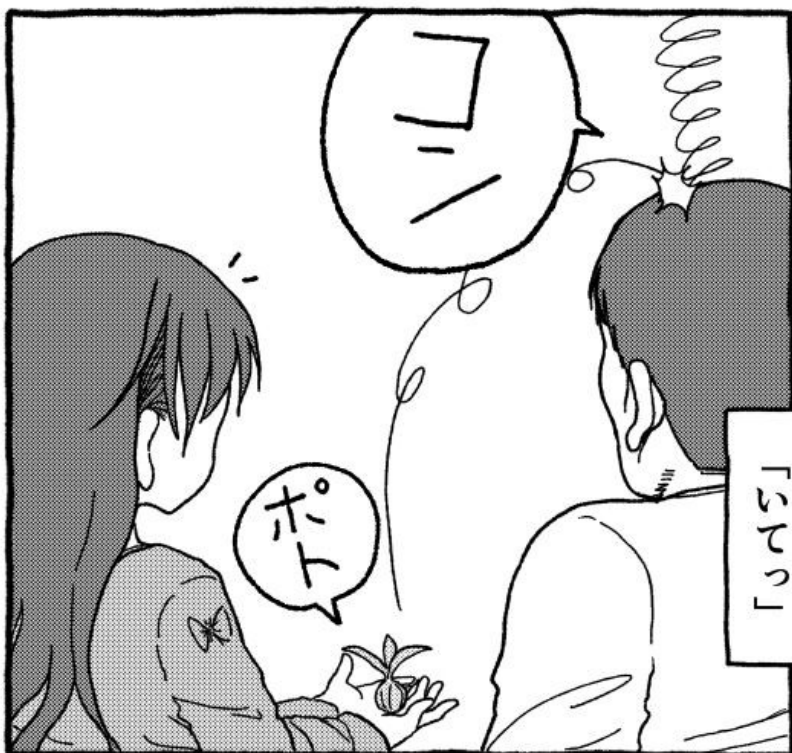
えっ、もうくえんは願い終わったのだろうか、まずい、早くしないと、一言一句……えーと……、

“隣の人が好きです。
だから、隣の人がちゃんと幸せになれますように。”



しまった……、願った後で後悔する橘はやと。
今のだけだったらいいじゃん……。
後段だけ一致しなきゃ。
一言一句一致しなきゃ。
いけないんだぞ……。
天文学的な確率じゃん……。
ただでさえ至難の難易度
だろ……に……なぜ二文もの
文言を……絶対無理じゃん
ん？





「さっし」

「えっ………これは……？」

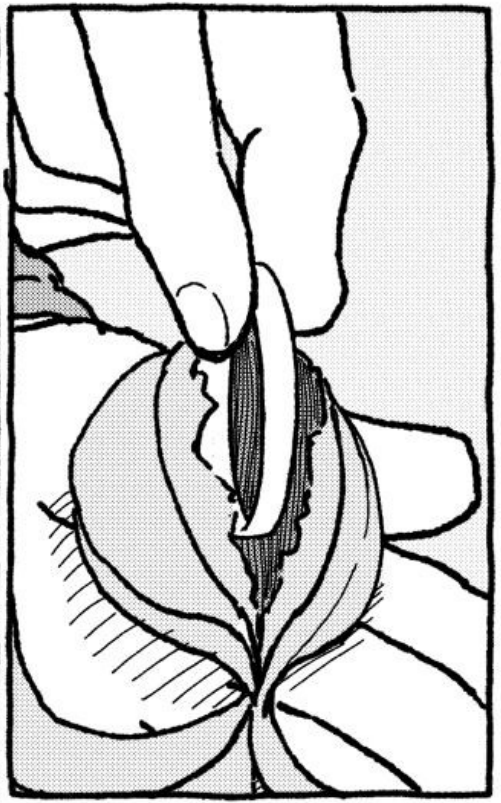
「さっし」

「さっし」



「ちよっと重いねえ」
「さっきまでこんなの枝に生ってた？」
「うーん……どうやったけ」





「もらえた!」
「えっ……本当に……?」
「えっ……本当に……?」
理解が追いつかない橘はやと。
どう見ても「素」には見えない。
しかし仮に貰えたのだとしたら
つまり……一字一句同じことを
くえんも願ったということ?

二文で願うなんてあの条件じゃ
致命的なミスも同然なのに……
でもそれでも一致するくらい
同じ気持ちだったんだ……
胸の奥が熱くなる。あまりにも
嬉しい気持ちになる橘はやと、
ふと周りを見ると誰も居ない。
「……えっ!」

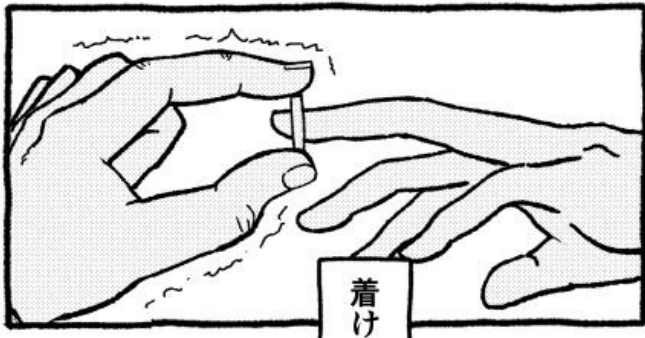


「着けた人以外から
見えなくなるんよ」
という言葉とともに現れる
くえん。ほっと胸を
なで下ろすと共にその
不思議な効力が本当だった
ことを身を以て知り驚く
橘はやと。
「す……本当に消えた……」

「じゃあ今度は
君からつけて」
「えっ」



指を差し出すくえん。
「あつ、着けた人以外から」
「……ってそういうこと!」
やとと効果を理解する橘はやと。



着けた。今度は消えない。



「他の人には見えんのか、
二人だけじゃと
確認しようがないねえ、
自分で自分は見えるし」

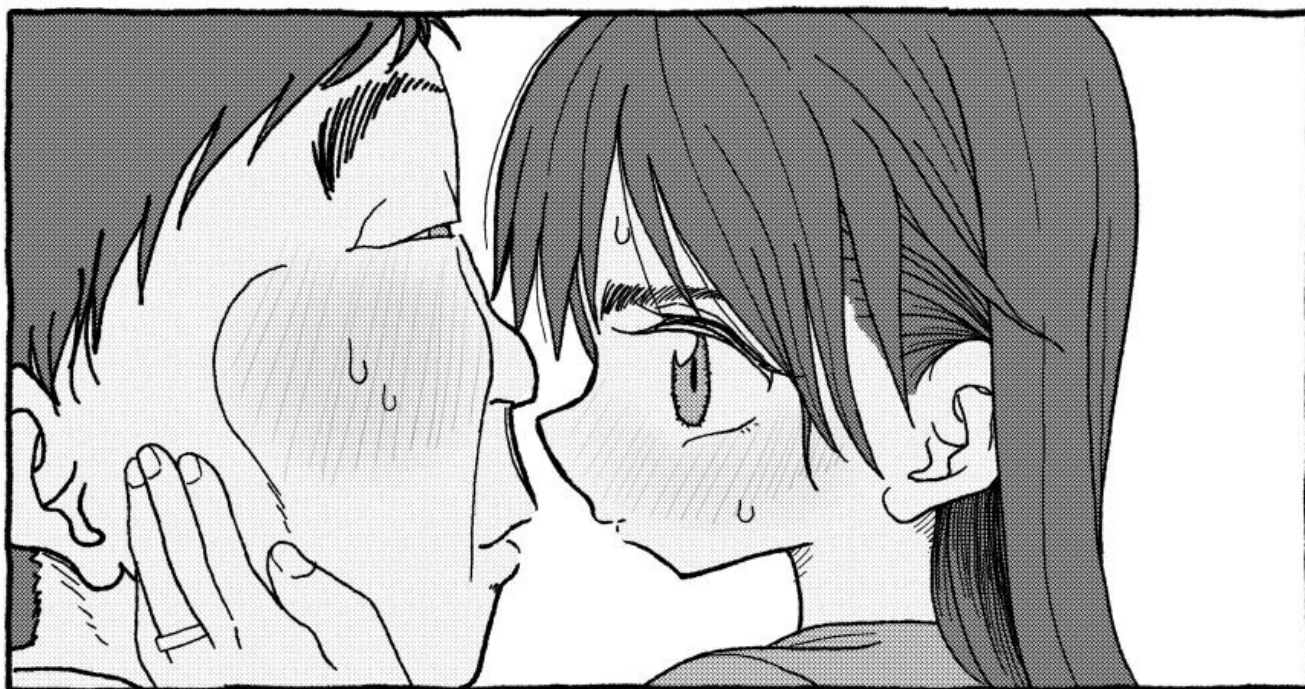
「でも今うち、世界で君にしか見えんのよ。」

「うちに何してもバレんねえ」



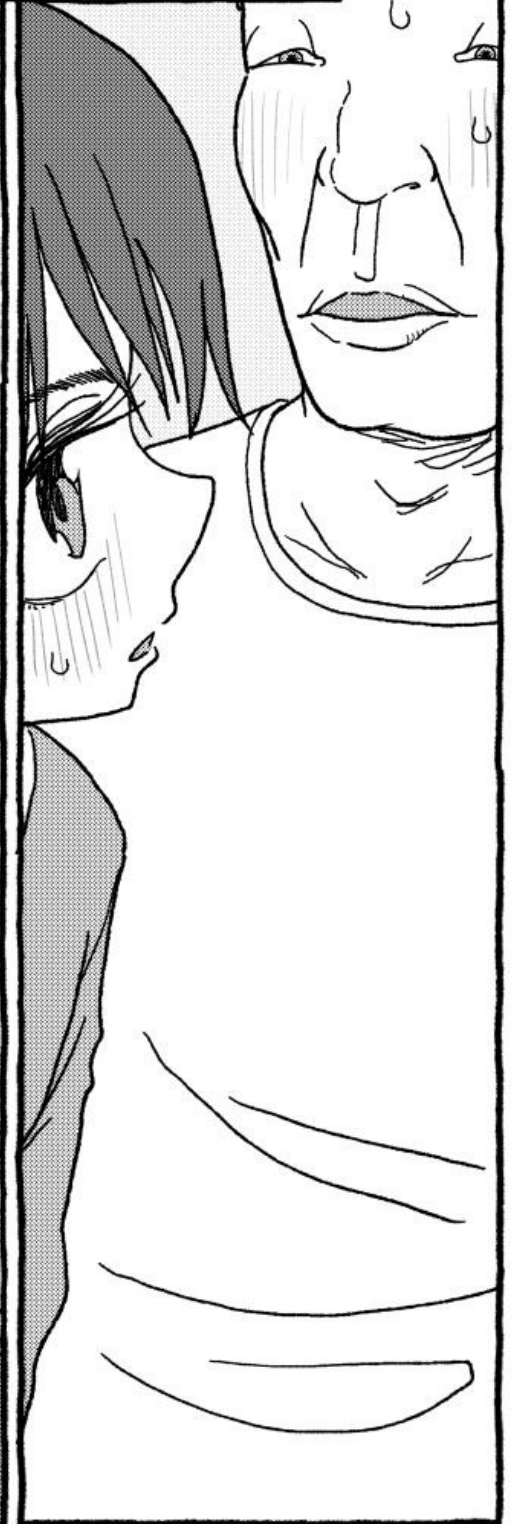
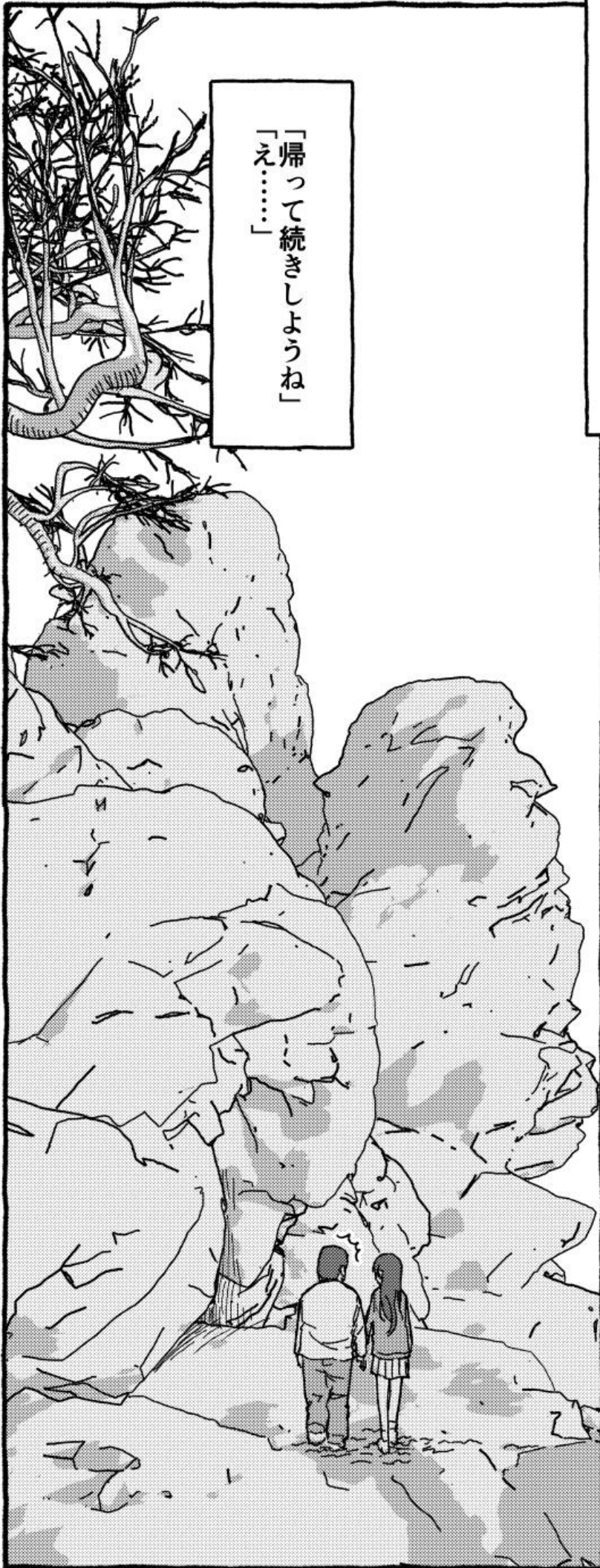
「なっ……何にもしないよ
くえんが嫌なことなんて！」
「じょ……冗談じゃけ」

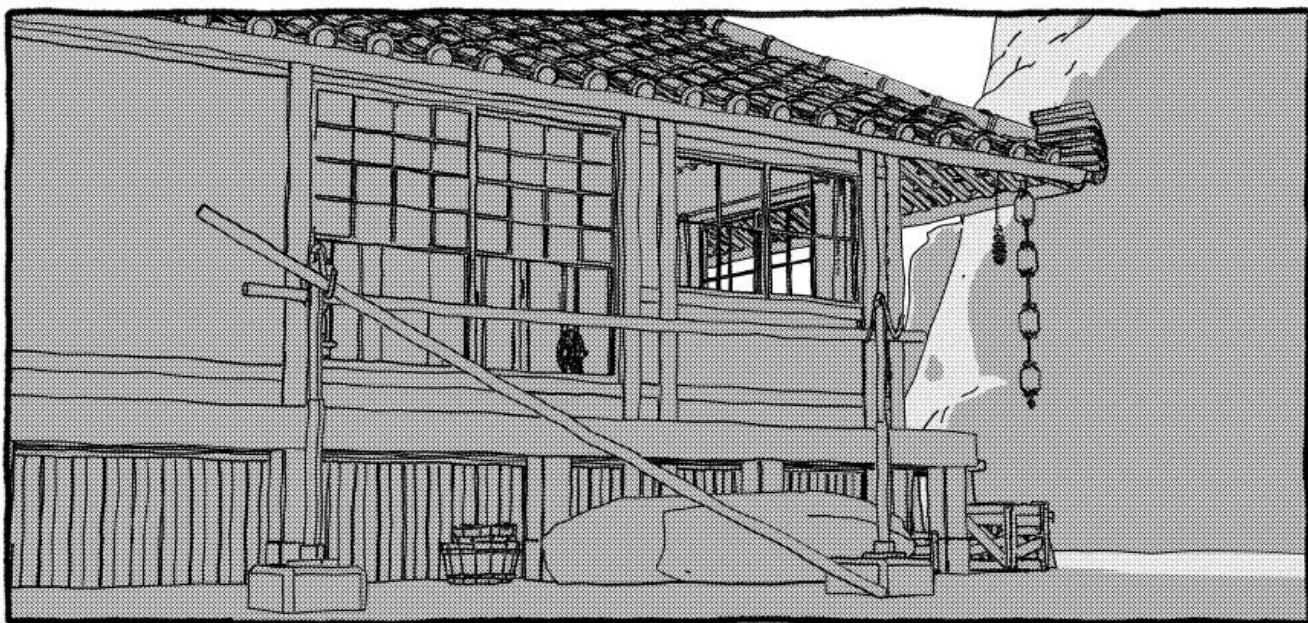
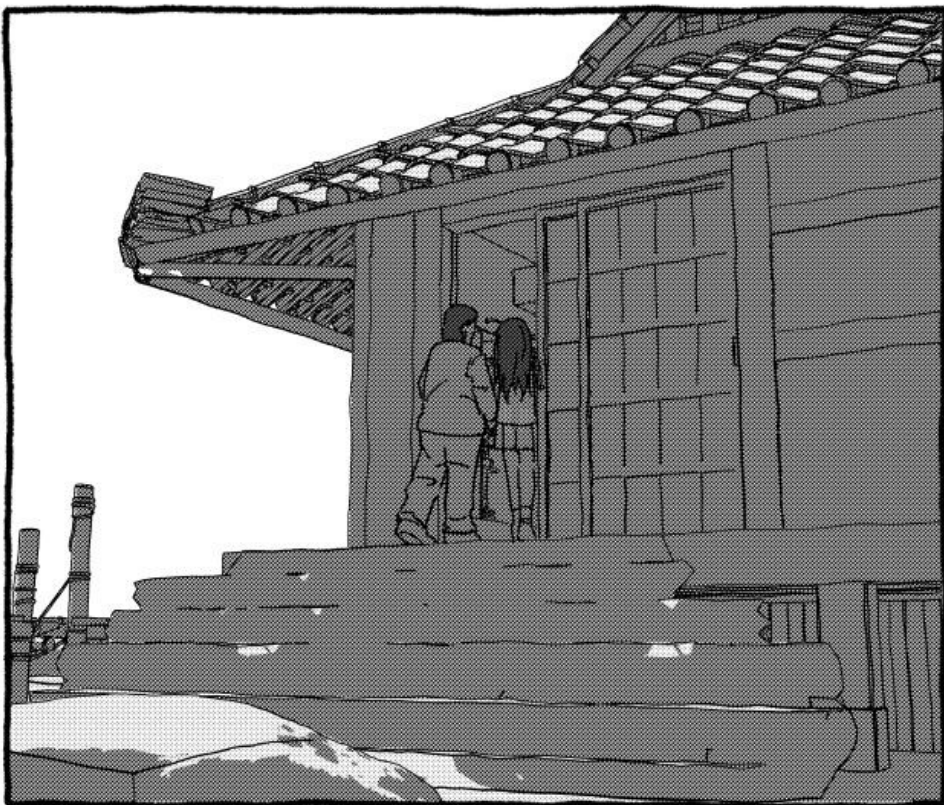
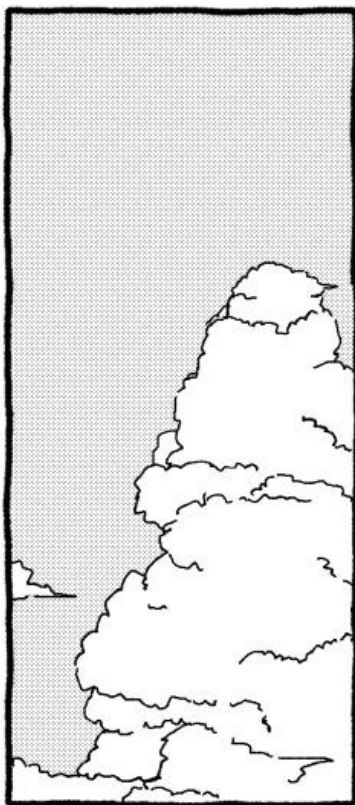


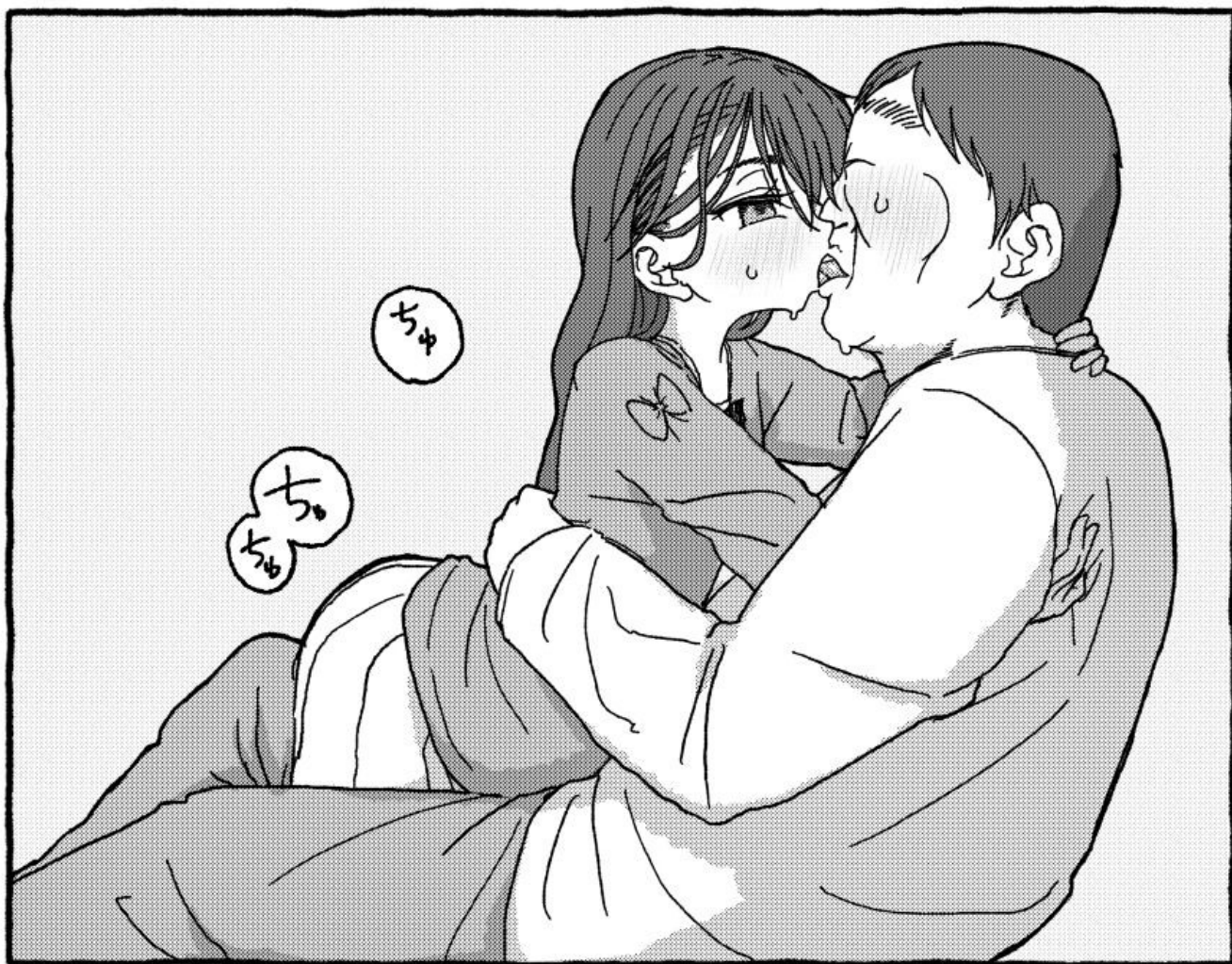
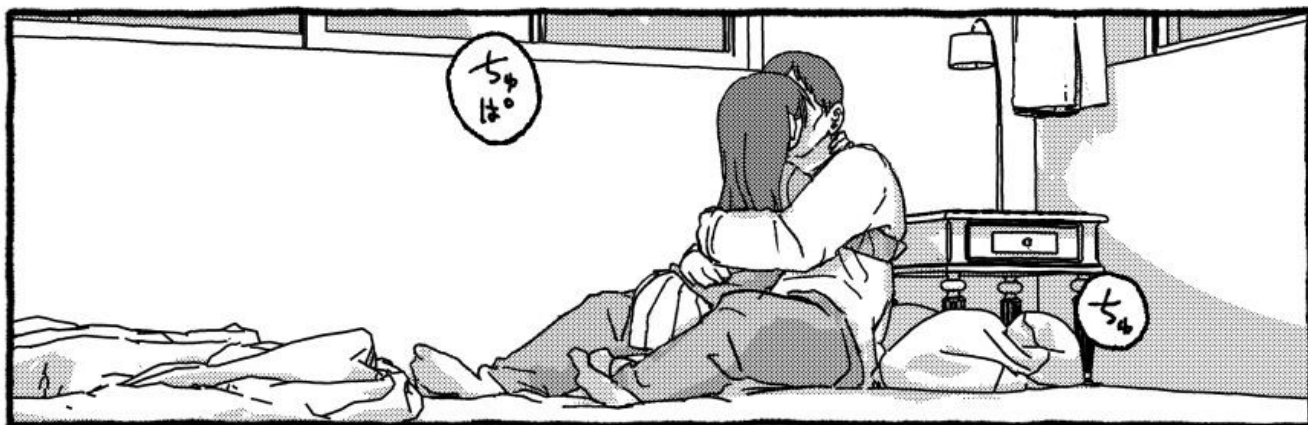


柔らかい唇の感触、甘い匂いに
熱くてくすぐったい吐息の温度、
何が起こったのか……気持ちよすぎて
意味が分からない。頭の整理が付かず
ボーっとする橋はやと。
「帰ろ」
というくえんにただただ
相槌を打つのが精一杯であった。
「あ、うん……」

「帰って続きしようね」
「え……」









腰が抜けたような痺れと共に
性器の感覚ももう全くわからなくな
っていた。既に射精してしまっ
ているかもしれない。けれど体重をかけて
寄りかかるくえんが腰をくねらせ、
股間を押しつけてくる感触に慌てて
それを制止する。
「だ……だめくえん……」



体温も、甘えるようにしがみつ
くえんの重みも舌の味も口内に漏れる
甘い吐息も身体の柔らかさも全部が全部
気持ちよくて幸せ以外の全ての感覚を
塗りつぶしていた。
「だめ……?」
「ひ……避妊具……とか……なくて……」
「真面目じゃね……わかつとるけん」
そう言うのとにっこりと笑ってくえんは
ズボンのチャックをおもむろに弄り始めた。
手間取りながらもパンツの中から屹立する
男性器を露出させる。



呆れたように先端に鼻先を近づけ
匂いを嗅ぐくえん。
「なに……このにおいは……」

すん♡
すん♡

「どうやったらこんなにおいになるの……ちゃんと洗ったん？」
「ご……ごめん……」

「変なおい……違うんじゃない……男の子のこころ……
……お風呂入ったよね昨日……何のにおい？ これは」

す♡

す♡

「根元はもっとひどい！
やっぱり洗えてないじゃろこれは！」

くん♡

くん♡
くん♡

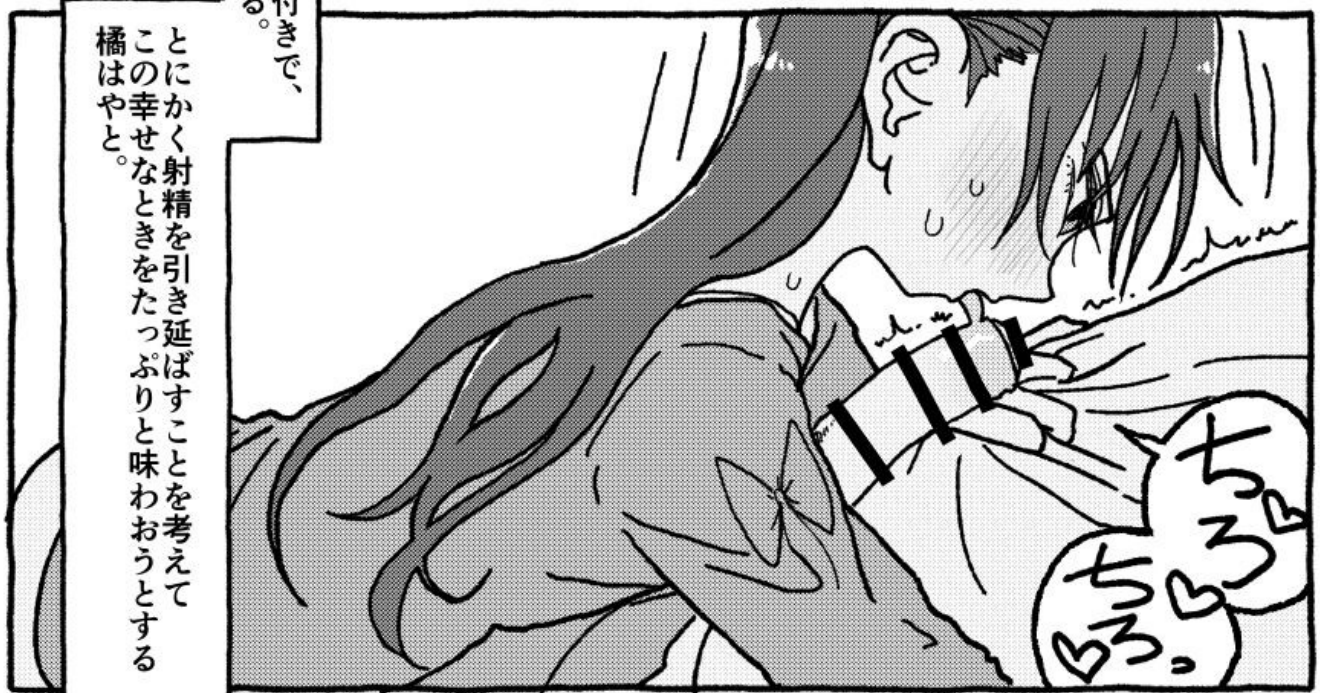
「まったく……もう」
そう言って口を尖らせるくえん、
そのまま亀頭に唇を運ぶ。

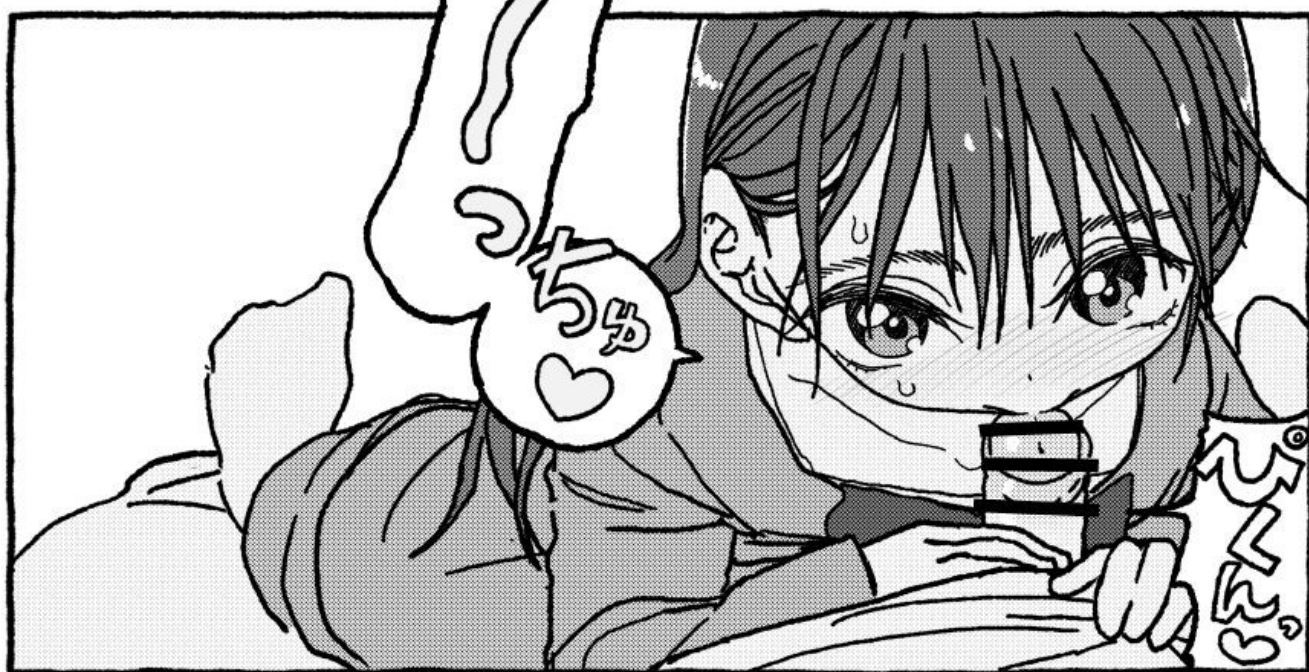
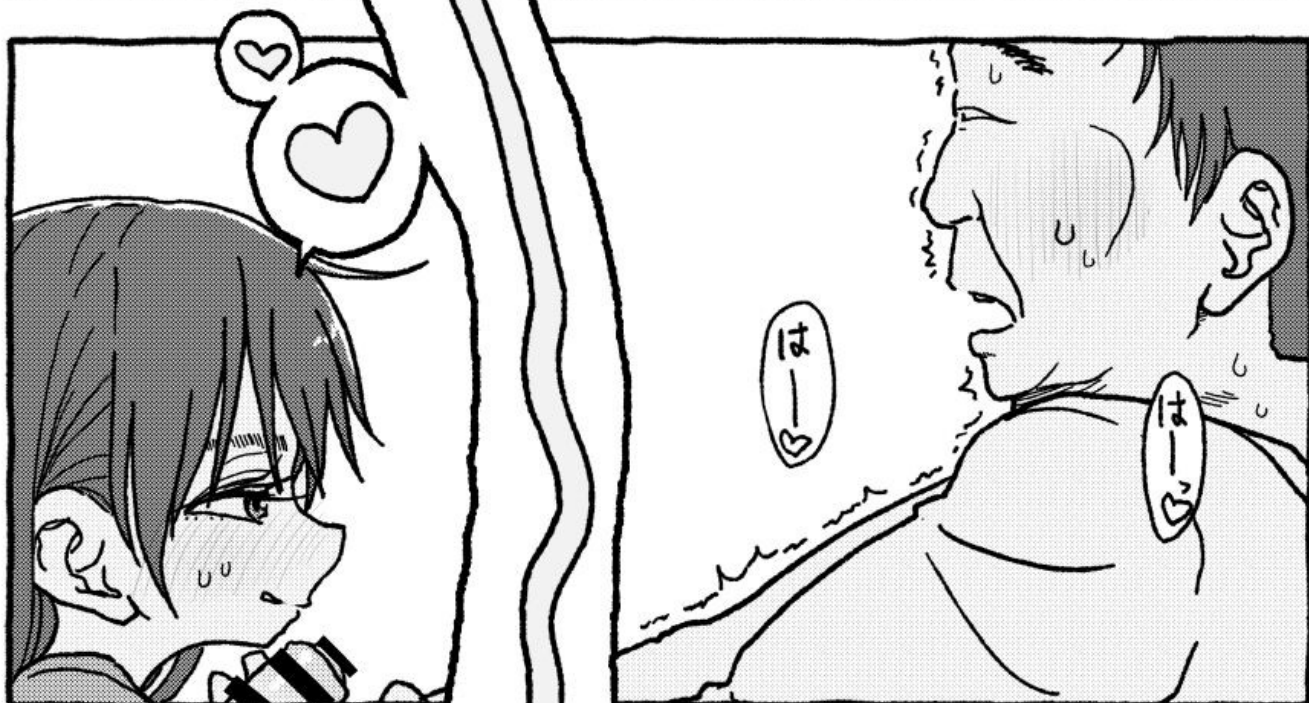
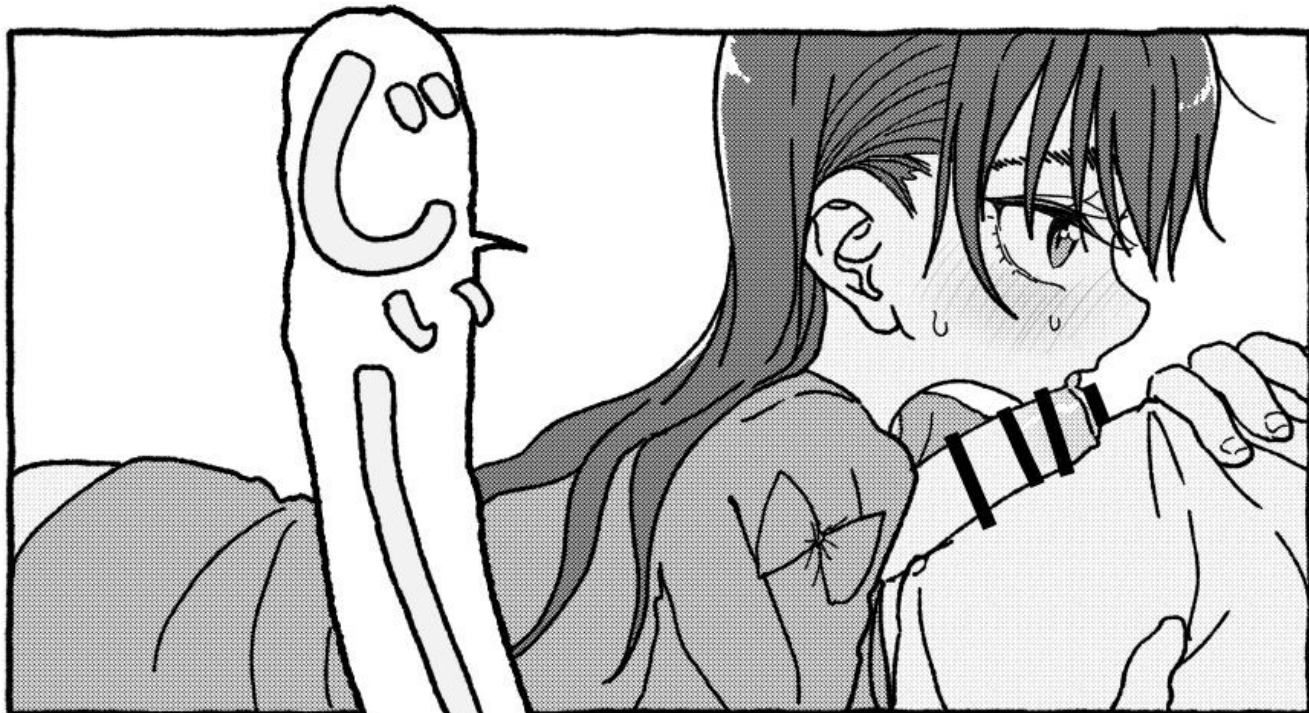


ちゅ♡

「あっ……！」







「く……くえん……」
性器をゆっくり優しくひと舐めされた
だけであつたが、限界に近い橘はやと。
そもそもこんな風に見つめられるだけ
でも勃起してしまうのに耐えられる
はずがなく射精感を懸命に抑えつつ、

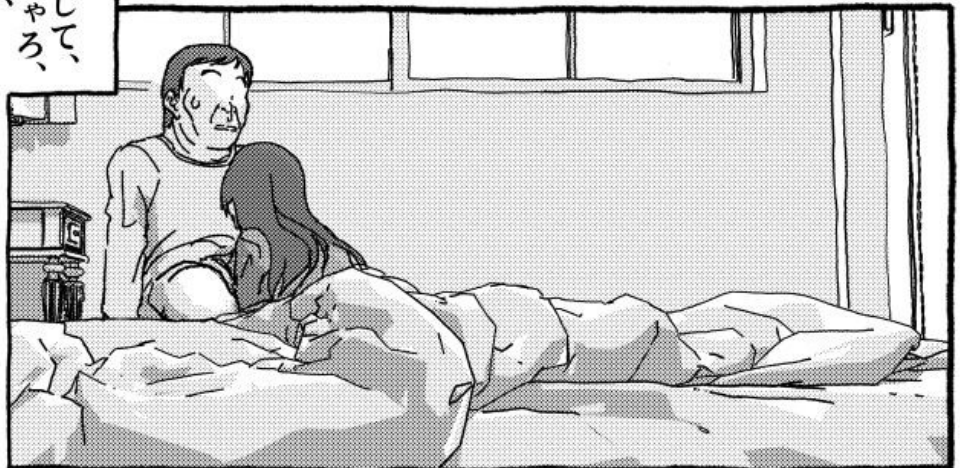
でも
こちらの目を見つめ
続けてくれるくえんに
気持ちは伝えたくて
たどたどしくも
言葉を継ぐのであつた。「その……目見てくれるの

……っていうか……
見つめ合いながら……
してくれるの……すごく
……すき……うれしい」
橘はやとがそう絞り出すと、
ほんとう？ うちもね、と
くえんは嬉しそうに言った。

「ほんと？
うちもね、それすごく
思ってたんだよ……！」



「おちんちん舐めるのって、すごくときどきして、
匂いもうちたまらんくって、はやとはどうじゃろ、
どんな顔しとるんじやろって思ってたけん、ね、
それでふっと顔見たら目が合ったじゃろ、そしたらうち、なんかね、もっと
ときどきしたけん、それでね、
じーっとそのまま見つめながら
してみたら、はやとも気持ち
よさそうな目しとったもんねえ」
と捲し立ててくえんは、ふふっと
笑って言った。
「おんなじじゃねえ」



「うれしいねっ」



「うっ……！」
苦悶の声をあげる橘はやと。
そんな顔されたら
ペニスはもう爆発寸前だ。

気を逸らすため慌てて何の気ない
話題を振る。
「でも、でも首疲れない？ その姿勢で……
見つめ合うのって……しんどいよね」
確かにそうじゃねえ、と一瞬思案して
何か思いついたような顔のくえん。

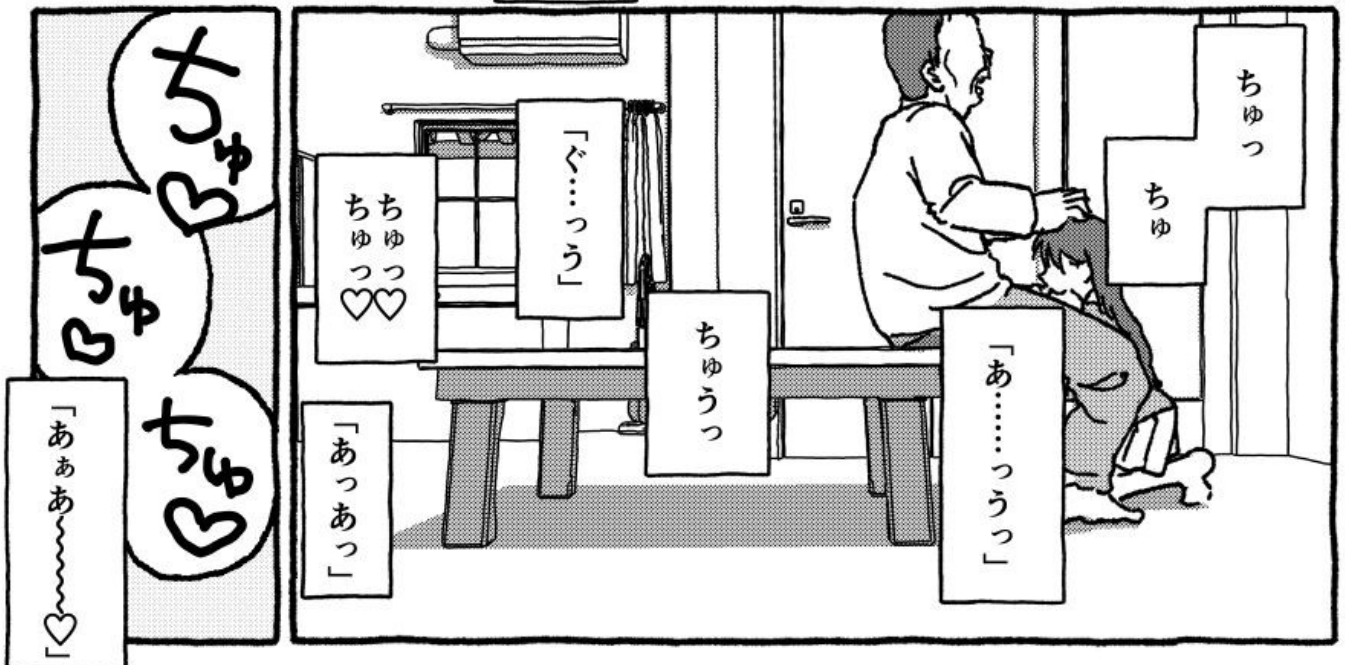
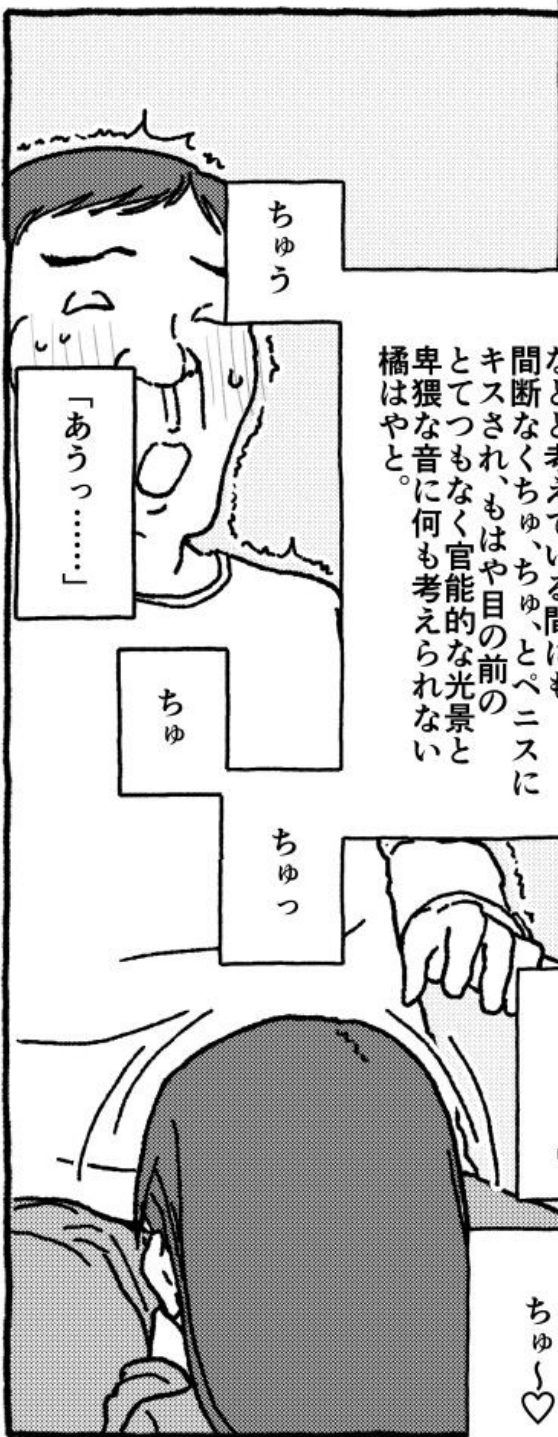
「こっちきて」と隣室へ移動、
追って立ち上がると食卓机に
座るよう促される橘はやと。
自分はその足の間に座り、
うん、と得心するくえん。
「こっちのほうが楽じゃね」
そのようだった。

いっばい見つめ合えるねえ
と再びいたずらっぽく笑み、
くえんは龜頭に吐息をあて、
キスをする。
「はうっ……」やはり声を
抑えきれない橘はやと。

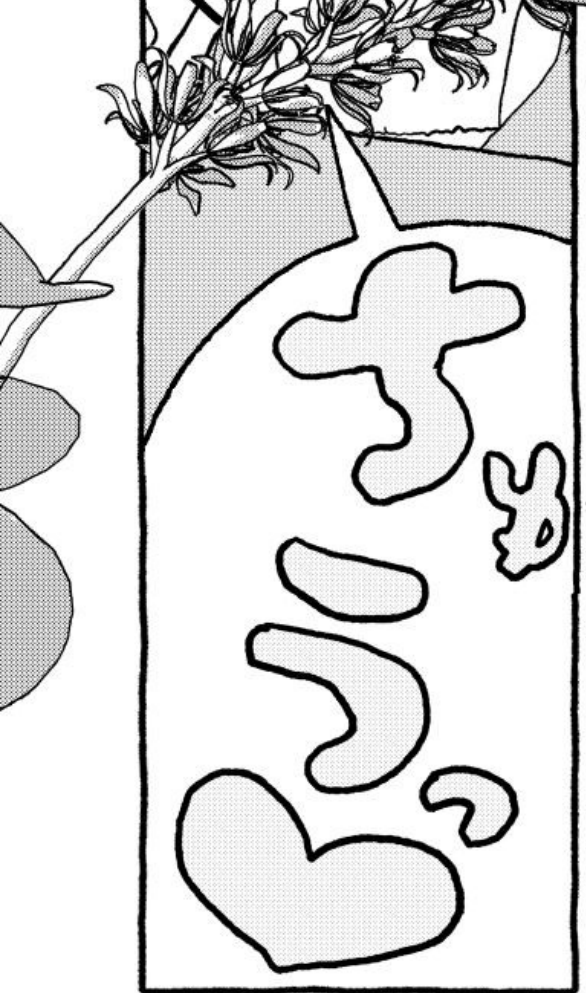
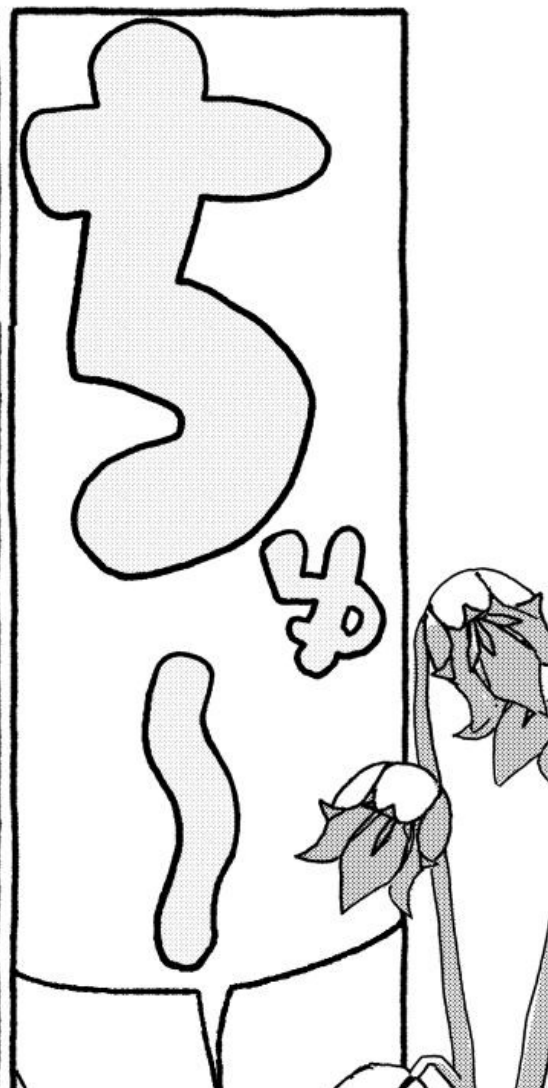
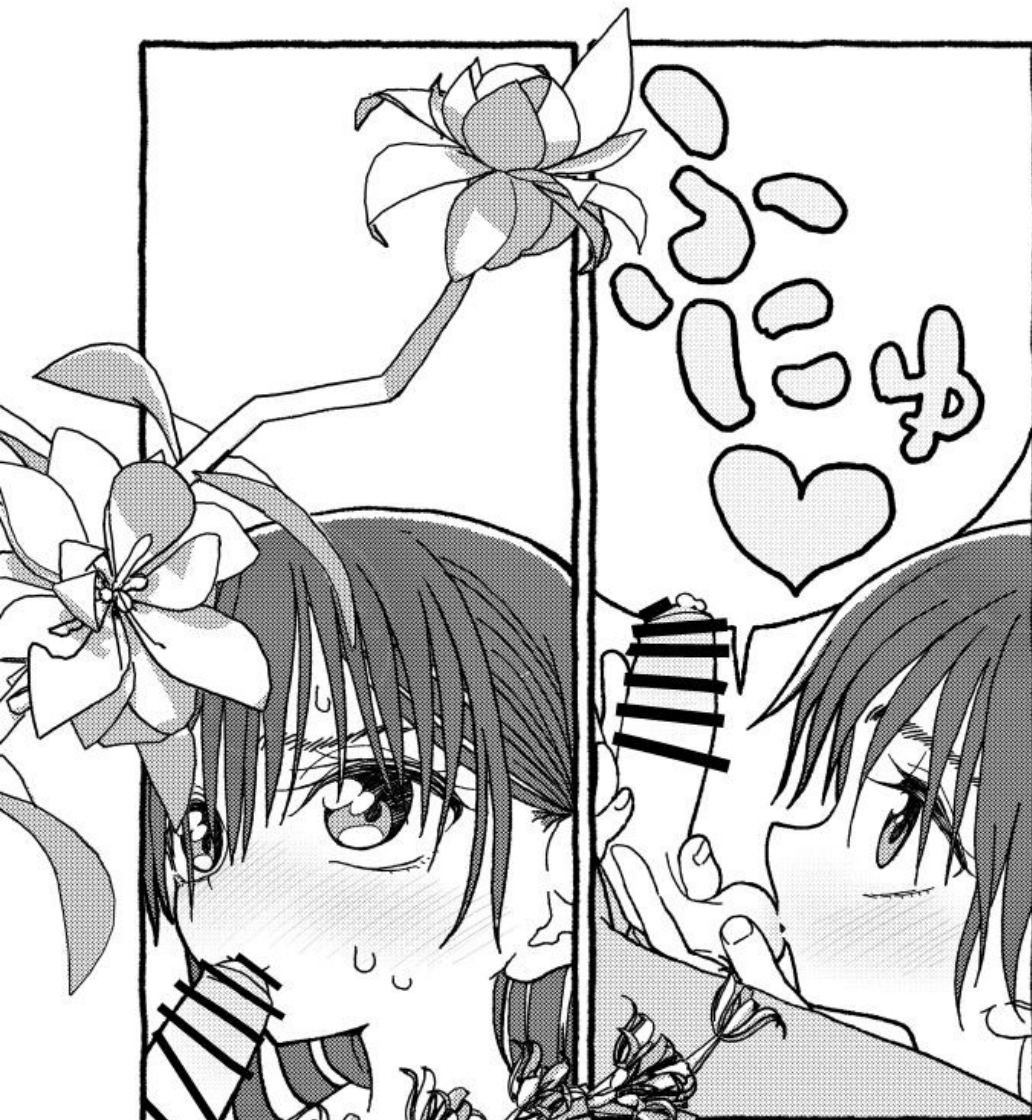
「そっ……それ……」
射精を必死にこらえつつ
声を絞り出す橘はやと。
「やっぱり」と
嬉しそうなくえん。

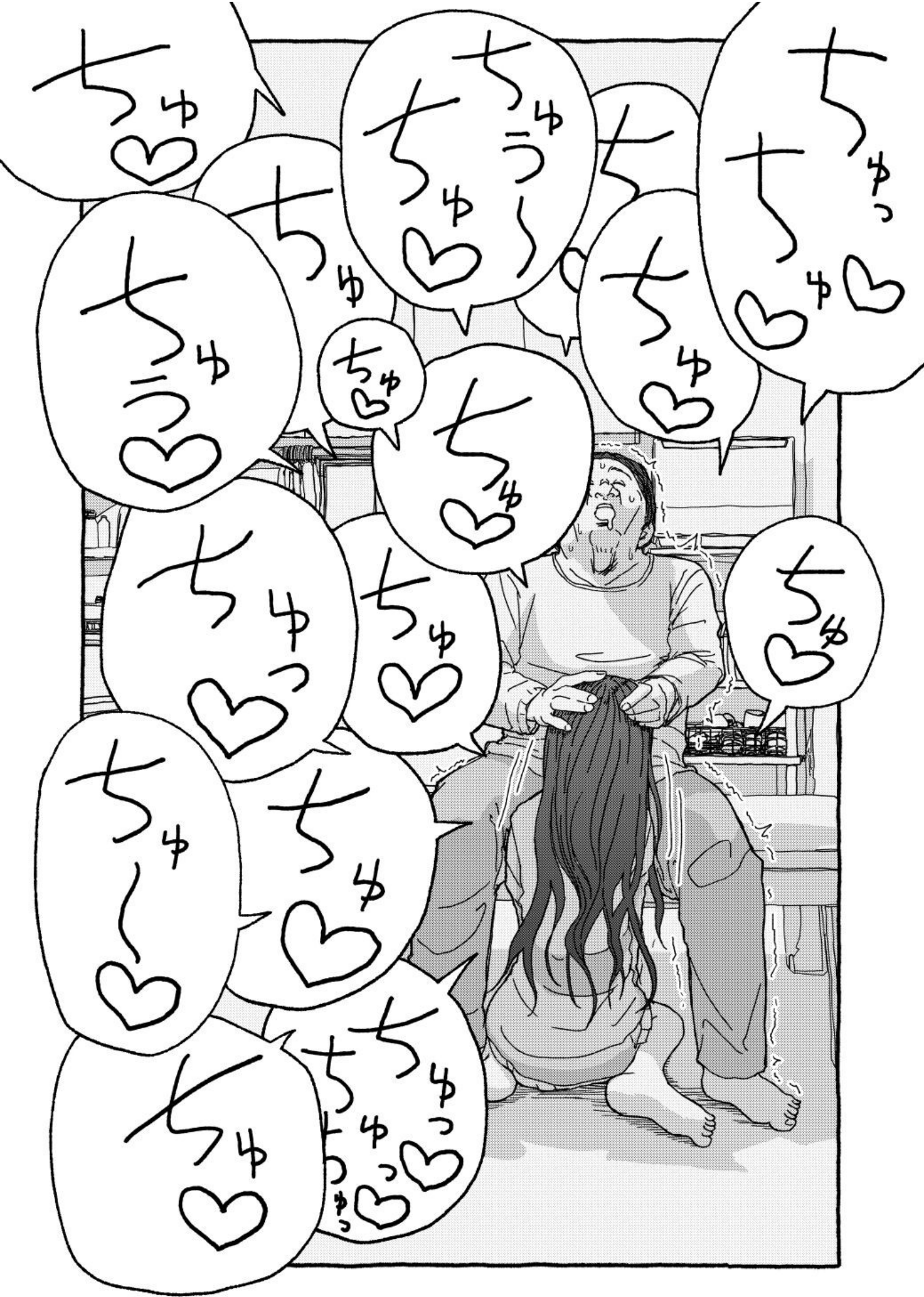
「さっき先っぽにキスしたときも
ぴくって反応しとったもんねえ」
くえんは亀頭にキスを続ける。
反応に気付かれていたことも加味し、
もはや昇ってくる射精感に対する
完全降伏を確信する橘はやと。
くえんのいたずらっぽい顔には
容赦の色など感じられない。

などと考えている間にも
間断なくちゅ、ちゅ、とペニスに
キスされ、もはや目の前の
とてつもなく官能的な光景と
卑猥な音に何も考えられない
橘はやと。









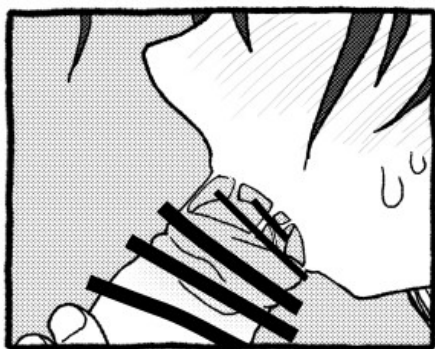
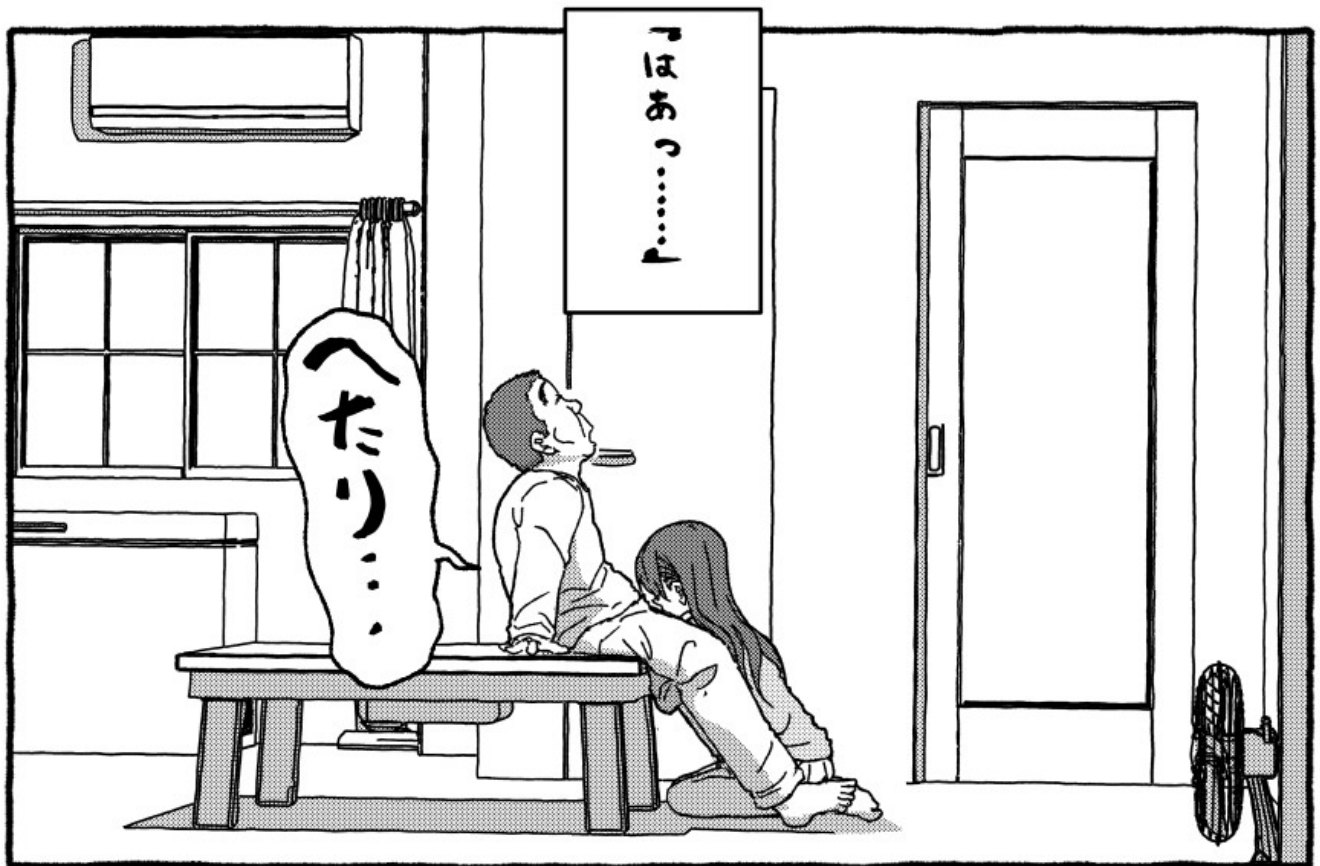
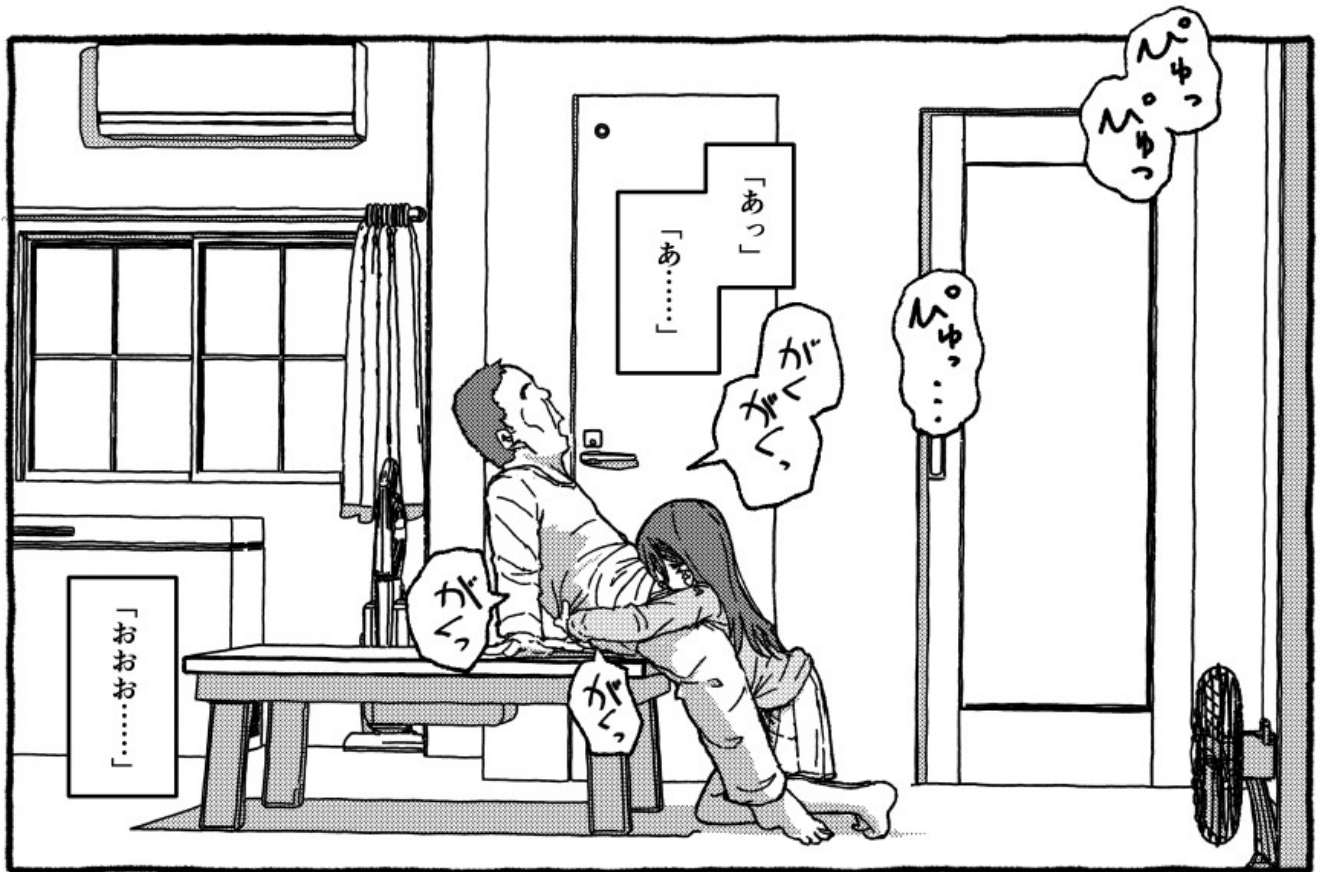
一回一回反応を楽しむようにキスし続け始めるくえん、まだまだこれからというような目を向けるが橘はやとは既に射精秒読み段階。もはや腰が溶けるような甘い痺れの中、自分でもいつ発射されてしまうのかわからない状態で……でる……

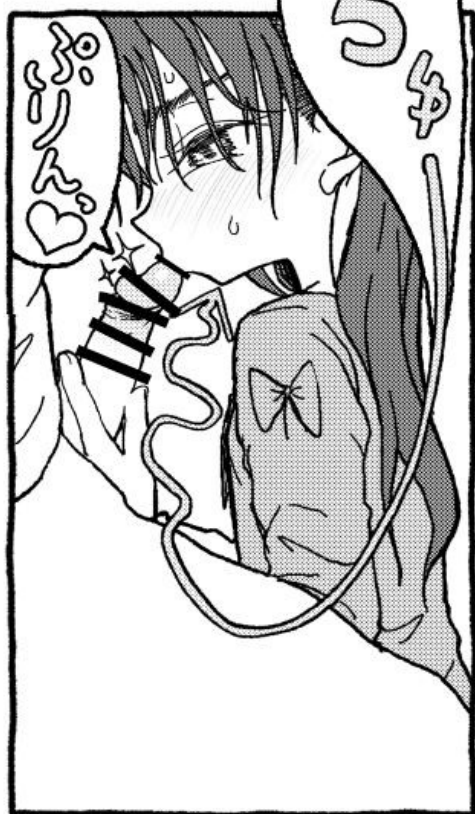


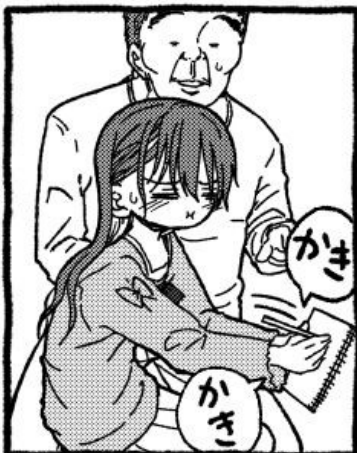
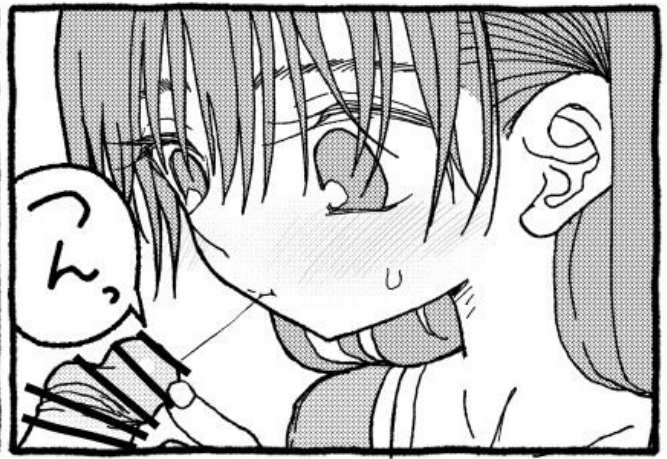
出るん、ほうね、とくえんが了承しましたという風に復唱したのが聞こえると同時に、柔らかく甘い感触と震えるような温かい吐息が亀頭を包んで意識が飛びそうになる橘はやと。

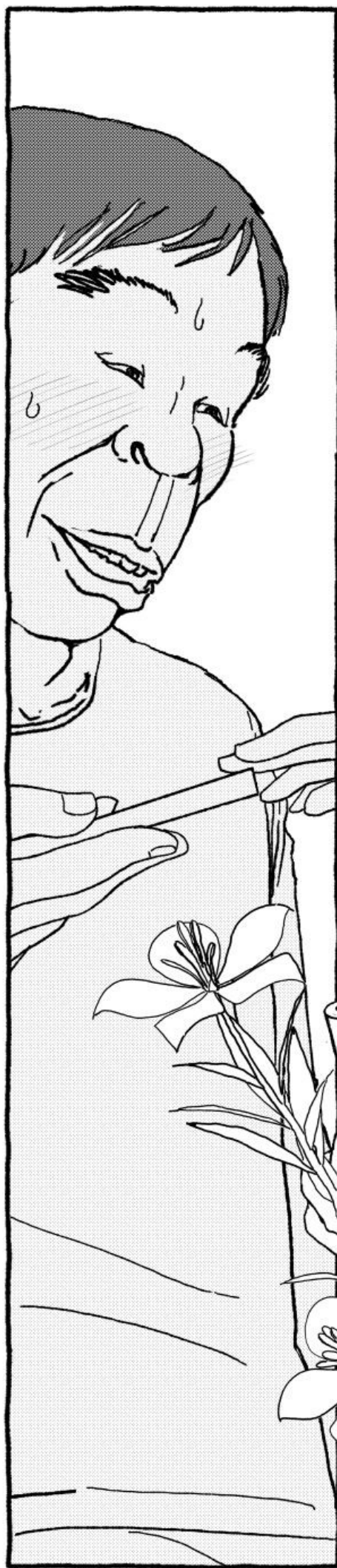




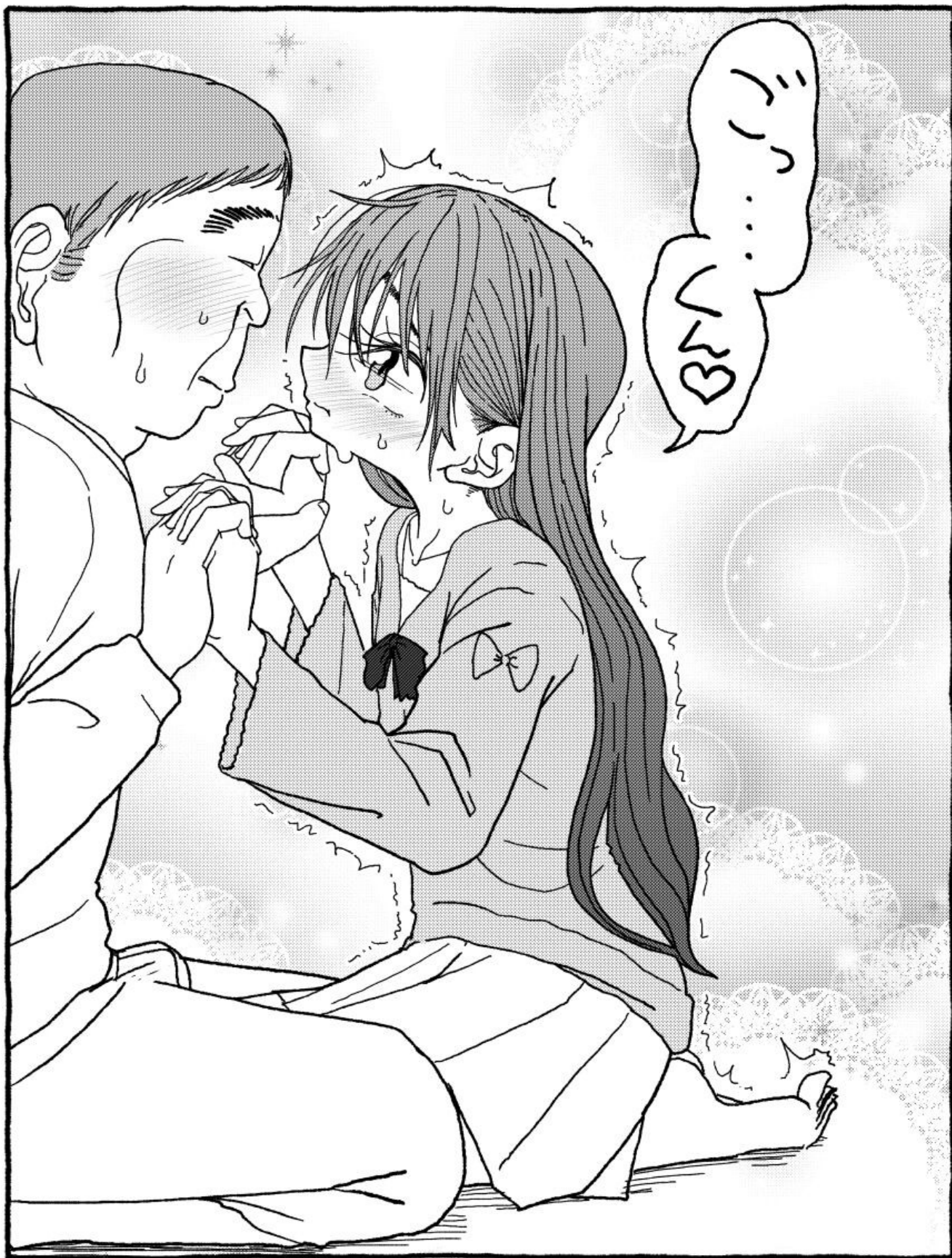














ぱた
ぱた

ぱた
ぱた

「ふえ〜……
やらしい味じゃねえ〜」
顔を真っ赤にして感想を
呟くくえん。
何か言わないと!と
焦って素直な感想を伝える
橘はやと。
「のっ……飲んでくれたの
すっごく嬉しい……!」

「ほんと? よかった。
やっぱりそうなんね」
とろんとした目で
答えるくえん。
打ち震えるような熱い
ものがこみ上げてくる
橘はやと。
抱きしめたいという
衝動を必死に堪える。

♡

すん
すん

す
♡

は
♡

抱きしめたらそのまま理性とか
全部吹っ飛んでメチャクチャに
してしまいそう……。
そんな橘はやとの懸命な懊悩も
どこ吹く風、口に残ったにおいが
気になってしょうがないような
様子のくえん。
それを見て更に腰の奥に新たに
火がともるような感覚を覚える
橘はやと。再度勃起を開始しよう
としているちんちんを抑えようと
するが……?!





